

佐用町

# 上三河遺跡

—県道若桜下三河線道路改良事業に伴う発掘調査報告書—

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会

佐用町

# 上三河遺跡

－県道若桜下三河線道路改良事業に伴う発掘調査報告書－

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会



調査区遠景 南から



調査区近景 北から



上三河遺跡出土土器



SH01出土管玉

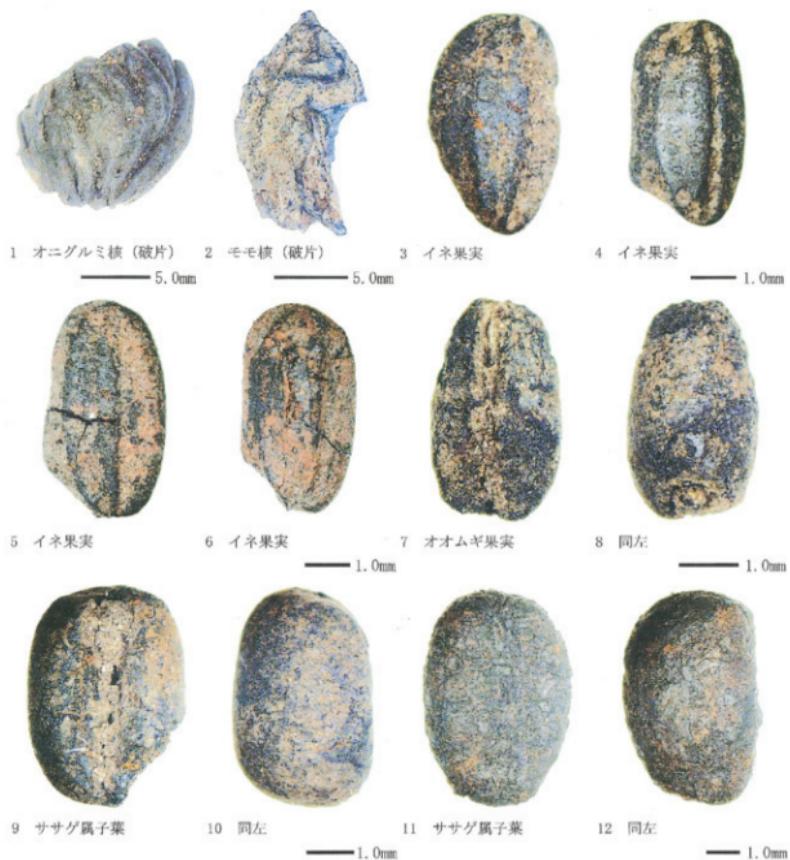
上三河遺跡出土石器



## 上三河遺跡の花粉・胞子

— 10  $\mu$ m

上三河遺跡の炭化種実



## 例 言

1. 本書は兵庫県佐用町上三河に所在する上三河遺跡の発掘調査報告書である。兵庫県文化財調査報告の第354冊にあたる。
2. 発掘調査は（主）若桜南光線道路改良事業に伴うものである。兵庫県西播磨県民局県土整備部上郡土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。
3. 本発掘調査は、平成13年度に兵庫県教育委員会が実施し、同埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館）藤田淳・小川弦太が担当した。
4. 遺構の実測は、調査員と調査補助員が行った。遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（現兵庫県立考古博物館）嘱託員が行った。
5. 写真は遺構を調査員が撮影し、遺物については谷口フォトに委託した。
6. 本書の挿図第2図「周辺の遺跡」は、国土地理院発行の1/25,000「矢名瀬」を1/50,000に縮小して使用した。
7. 本書で使用した標高は東京湾平均水準（T.P.）を基とし、方位は国土地標第V系の座標北を示す。座標値については世界測地系である。
8. 本書の執筆は藤田・小川が行い、編集は小川、嘱託職員宮田麻子、西村美緒が行った。第4章においては、青木哲哉氏（立命館大学）から玉稿をいただいた。バレオ・ラボ、古環境研究所には自然科学分析を依頼し、その報告を掲載している。
9. 調査で出土した遺物・写真・図版等の資料は兵庫県立考古博物館及び兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水630-1）において保管している。
10. 現地調査及び報告書作成の際には、佐用町教育委員会の藤木透氏、中村剛彰氏から御協力、御教示を頂いた。記して深謝の意を表する。

## 凡 例

1. 遺物は種類ごとに通し番号をついているが、鉄器にはM、石器にはS、玉にはTを冠し土器との区別を行っている。
2. 土器は種別によって断面の表現を変え区別している。須恵器は黒塗り、弥生土器・土師器は白抜きで示している。
3. 上層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1992年版を使用した。

## 本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査の経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 分布調査・確認調査	5
第3節 本発掘調査	8
第4節 普及活動	8
第5節 整理保存作業	8
第3章 調査の成果	9
第1節 1区の遺構・遺物	9
第2節 2区の遺構・遺物	11
第3節 3区の遺構・遺物	35
第4節 4区の遺構・遺物	38
第4章 自然科学分析	57
第1節 放射性炭素年代測定	57
第2節 上三河遺跡における自然科学分析	60
第3節 上三河遺跡の地形環境	70
第5章 総括	79
第1節 遺物	79
第2節 遺構	80
第3節 まとめ	82

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	1	第35図 2区包含層出土石器	34
第2図 周辺の遺跡	3	第36図 3区平面図	35
第3図 路線図及び調査位置図	6	第37図 SK11・12・13・14・15	36
第4図 確認調査トレンチ位置図	7	第38図 SK17	37
第5図 普及活動	8	第39図 SD08・09	38
第6図 1区平面図	9	第40図 4区平面図	39
第7図 SB01	10	第41図 SH02	40
第8図 1区包含層出土土器	11	第42図 SH02 カマド	41
第9図 2区平面図	12	第43図 SH02出土上器	41
第10図 SH01	13	第44図 SH02出土石器	42
第11図 SH01出土土器 1	14	第45図 SH03	42
第12図 SH01出土土器 2	15	第46図 SH03出土土器	43
第13図 SH01出土骨片	16	第47図 SK18	43
第14図 SH01出土石器 1	17	第48図 SD10・11・13・14・15・16	44
第15図 SH01出土石器 2	18	第49図 SD17・18	45
第16図 SB02	19	第50図 SD14・17・18・20出土上器	47
第17図 SB03	20	第51図 SD20・21・22・23	48
第18図 SB03・04出土土器	21	第52図 SD23・24・25出土土器	49
第19図 SB04	22	第53図 SD24	49
第20図 SB05	23	第54図 SX02・09出土上器	50
第21図 SB06	24	第55図 SX01・02	51
第22図 SB07	25	第56図 SX03・04・05・06	52
第23図 SK01	25	第57図 SX07・08・10	54
第24図 SK02・03・04・05・06	26	第58図 SX09	55
第25図 SK09	27	第59図 出土鉄器	56
第26図 SK10	28	第60図 暦年較正結果	59
第27図 SK01・09・10出土上器	28	第61図 2区における花粉ダイアグラム	64
第28図 SD05出土土器	29	第62図 調査区周辺の地形分類図	71
第29図 SD06・07	29	第63図 調査区付近の微地形分類図	73
第30図 P05出土上器	29	第64図 1区における遺構検出面からのトレンチ断面	73
第31図 P11・12出土土器	30	第65図 2区における遺構検出面からのトレンチ断面	75
第32図 2区包含層出土土器 1	32	第66図 4区における遺構検出面からのトレンチ断面	76
第33図 2区包含層出土土器 2	33	第67図 町教委調査C区と4区	81
第34図 2区包含層出土土器 3	34		

## 表 目 次

第1表 SB01柱穴間距離	10	第9表 放射性炭素年代測定及び 暦年較正の結果	58
第2表 SB02柱穴間距離	19	第10表 2区における花粉分析結果	63
第3表 SB03柱穴間距離	21	第11表 炭化種実同定結果	67
第4表 SB04柱穴間距離	22	第12表 イネ炭化果実計測値	68
第5表 SB05柱穴間距離	23	第13表 イネの粒形とその大きさ	69
第6表 SB06柱穴間距離	24		
第7表 SB07柱穴間距離	25		
第8表 測定試料及び処理	57		

## 写 真 図 版 目 次

卷頭図版 1 調査区遠景	調査区近景	卷頭図版 3 上三河遺跡の花粉・孢子
卷頭図版 2 上三河遺跡出土土器	出土石器	卷頭図版 4 上三河遺跡の炭化種実
SH01出土管玉		
写真図版 1 1区下面全景		3区SH02カマド断面
1区上面全景		1区SB01
1区下面全景		写真図版 8 2区柱穴
写真図版 2 2区全景		2区SB03
2区全景		写真図版 9 2区SB04
2区全景		2区SB05
写真図版 3 3区全景		2区SB07
3区全景		写真図版10 2区SK03
4区全景		2区SK05
写真図版 4 4区拡張区		2区SK06
4区全景		2区SK09
4区全景		2区SK10
写真図版 5 2区SH01検出状況		2区SK18
2区SH01		写真図版11 2区SK08
2区SH01柱穴断面		2区SK08土器出土状況
写真図版 6 3区SH02検出状況		写真図版12 1区SD01
3区SH02		1区SD02
3区SH02土器出土状況		4区SD10
写真図版 7 3区SH02カマド		4区SD14

	4区SD16	4区SX10完掘
	4区SD17	2区P12土器出土状況
写真図版13	4区SD18	写真図版19 1区包含層・SH01出土土器
	4区SD18土器出土状況	写真図版20 SB03・SB04・SK01・SK09・SK10
	4区SD18セクション	出土土器
写真図版14	4区SD20	写真図版21 SD05・P05・P11・P12・2区包含
	4区SD20土器出土状況	層出土土器1
写真図版15	4区SD22	写真図版22 2区包含層出土土器
	4区溝・木棺墓群	写真図版23 2区包含層出土土器
写真図版16	4区SX01	写真図版24 SH02・SH03出土土器
	4区SX02検出状況	写真図版25 SD05・SD14・SD17・SD18・SD20
	4区SX02	出土土器
写真図版17	4区SX03完掘	写真図版26 SD18・SD20・SD23・SD24・SD25
	4区SX04完掘	出土土器
	4区SX05木棺完掘	写真図版27 SD25・SX02・SX09出土土器、包
	4区SX05完掘	含層出土鐵器
	4区SX07セクション	写真図版28 SH01出土石器
	4区SX07完掘	写真図版29 SH01・SB07出土石器
写真図版18	4区SX09木棺完掘	写真図版30 2区包含層・SH02出土石器
	4区SX09完掘	写真図版31 SH01出土石器（写真掲載のみ）
	4区SX10木棺完掘	

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 地理的環境

上三河遺跡のある佐用郡佐用町は、兵庫県の西部にあり、面積307.51km<sup>2</sup>の山間の町である。2005年10月1日の新設合併により佐用郡内の4町（佐用町、南光町、三日月町、上月町）が合併して発足したが、合併以前の町名は佐用郡南光町である。この町名はすでに消滅しているが、千種川中～上流域に沿った細長い町域は、遺跡周辺の地理的、歴史的環境を記述する上で有効である。したがって、以下でも南光町およびその他の旧3町も、そのままの名称で使用することとする。

南光町は北に隣接する千種町に源を発する千種川が町内を貫流しており、南北21.15km、東西1.5～4.5kmほどの細長い町域を有する。千草川を挟んで東側と西側に標高300～600mの山並みが連なっている。町の北方には標高727.2mの船越山がそびえるが、その北には1000m級の日名倉山や後山が連なる。これに対して南方の山は低く、標高408mの赤十字山から西播磨丘陵につながっている。

町の基盤をつくる地層は、約3億年前から2億1千万年前に堆積した上月層、三日月層、山崎層で、南から北へ形成されていった。これらの層には砂岩や粘板岩、チャート、石灰岩、輝緑凝灰岩などがみられる。さらに、火山活動に伴ってはんれい岩、蛇紋岩、花崗岩類などの火成岩が貫入している。

町の中央、下三河から上三河を横断する山崎断層は、三木市から岡山県英田郡大原町（現美作市）へと続く総延長約80kmの活断層である。これを境に南側には600mを越える高山はない。断層によって形成された谷や峠は、南北に連なる山を越えて東西を結ぶ交通路として古代より利用されたと考えられる。当地域周辺出土の銅鐸が山崎断層に沿うように分布することはその一つの現れとする説がある。

町を貫流する千草川は全長が67.6kmあり、町の中程で上流域と中流域に区分できる。河口から町の南端までは直線距離で36kmあるが、比高差は80mしかない。これに対して、町の南北では160mの比高差があり、急流をつくっている。流域には河岸段丘や支流水の扇状地が分布し、上三河遺跡も千種川東岸に形成された段丘上に立地している。この段丘は千種川が形成した扇状地が古墳時代後期～中世のある時期に段丘化したものであることが、微地形の分析によって明らかにされている（第4章第3節参照）。



第1図 遺跡の位置

## 第2節 歴史的環境

南光町も1995（昭和35）年の合併により生まれた新しい町である。それ以前は、1889（明治22）年の町村制施行によって発足した佐用郡久村、中安村、宍粟郡三河村に分かれており、上三河遺跡のある三河村は宍粟郡に属していた。町名は神龜5（728）年に行基が開山したと伝えられる名刹、船越山南光坊瑠璃寺に由来する。

山地が町域の約78%を占めるため、遺跡の数は少なく、平成16年発行の『兵庫県遺跡分布地図』によると83ヶ所を数える。このうち製鉄関係の遺跡が13ヶ所を占め、この地域の特色となっている。

町内遺跡の発掘調査は主には場整備事業に先立って佐用郡教育委員会（現佐用町教育委員会）によって進められてきたが、兵庫県教育委員会による調査は、中国縦貫自動車道建設に伴う西下野遺跡の調査以来となる。

以下では発掘調査が行われた町内の遺跡を中心に、時代を追って概観してゆきたい。

### 旧石器時代

段遺跡（10）でチャート製などの石器が數点採集されている。ナイフ形石器など定型的な石器ではないため、時期は明確にできない。佐用郡内では佐用町の長尾沖田遺跡で採集されている黒曜石製のナイフ形石器が確実な後期旧石器時代の資料として特筆される。

### 縄文時代

早期では段遺跡（10）の横円形押型文土器がある。押型文土器や前期の爪形文土器の出土している遺跡は郡内でいくつか知られるが、いずれも断片的である。続く中期も同様であったが、上三河遺跡（1）の鍋台地区で中期末の方形堅穴住居が検出され、郡内最古の堅穴住居の例となった。

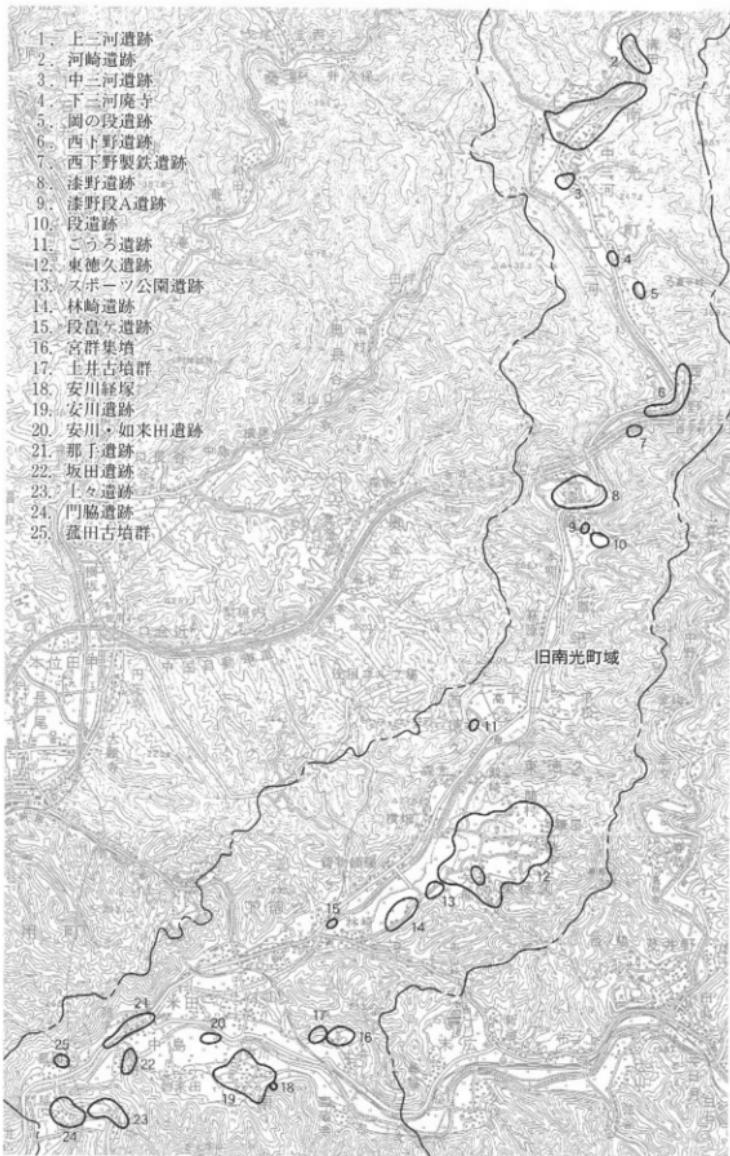
後期になると遺跡の数、遺物量とも増加する。中でも安川如来田遺跡（20）では柱穴や炉跡が発見され、注口土器を含む後期～晩期の土器が出土している。石器も石鏃、石錐、石匙、石斧、敲石、石皿など多彩である。この他の後期の遺跡には段品ケ遺跡（15）、東徳久遺跡（12）、上三河遺跡（1）などがあり、郡内でも佐用町の本位田円応寺遺跡、長尾沖田遺跡、中の原遺跡で住居が、延吉遺跡では配石墓や埋壙、貯蔵穴などが発見されている。しかし、晩期には遺跡の数は減少する。河崎遺跡（2）や安川遺跡（19）で土器が出土している他、郡内でも上月町の櫛田遺跡や真野遺跡が知られる程度である。

### 弥生時代

この傾向は弥生時代中期前半まで続くが、後半からは増加をはじめ、後期になると飛躍的に増加する。規模の大きな中核的な集落も形成され、佐用町の本位田遺跡、長尾沖田遺跡、横坂丘陵遺跡などで大規模な弥生集落が発見されている。町内では東徳久遺跡（12）、林崎遺跡（14）、上三河遺跡（1）などがあり、中でも千種川東岸の河岸段丘上に展開する東徳久遺跡は中核的な集落と位置づけられる。円形住居、木棺墓、土器棺墓、土坑など多くの遺構があり、分銅型土製品が出土していることも特筆される。また、北約1kmにあるごうろ遺跡（11）で出土した中細形銅劍との関連にも注目しなければならない。銅劍は式内社である天一神社に奉納され、昭和35年に県指定重要有形文化財に指定された。

### 古墳時代

弥生時代後期の集落の隆盛に比べ、古墳時代前期の集落は郡内でも少なく、前期古墳や中期の大型墳も未確認である。後期になると規模は小さいものの群集墳が成立する。宮群集墳（16）、土井古墳群（17）、菰田古墳群（25）はいずれも町内南域にある小規模な古墳群であるが、破壊されて現状をとどめないものが多い。



第2図 周辺の遺跡 ( $S = 1 : 50,000$ )

## 古代

佐用郡は旧国名でいう播磨國讃容郡にあたり、南光町内には東徳久を中心とする「柏原里」と千種川から東へ分岐する志文川の下流域にあたる「雲濃里」があった。しかし、上三河地区は古代には宍粟郡柏野里に属していたと考えられ、昭和35年の南光町成立までは、一貫して宍粟郡であった。柏野里は現在の山崎町中心部から北西に延びる菅野谷から十万、南光町上三河を経て、千草町あたりまでを含む地域と考えられている。

両郡は、『播磨國風土記』に鉄生産の記述があるように、古代より鉄を産する地域として知られている。特に、佐用郡内には古代の製鉄遺跡が多く発見されているが、それらは3つの地域に分かれる。一つは佐用盆地北西の大塗山周辺に広がる大塗山製鉄遺跡群で、『播磨國風土記』にも記載がある。一つは千種川本流沿いに展開する南光町北部の三河製鉄遺跡群で、千種町域あるいは千種川の砂鉄が原料となっていると想定される。今一つは、佐用町北部の日名倉山南麓の製鉄遺跡群で、原料は千種町域から運搬されたと推定されている。

南光町の製鉄遺跡では、昭和47～48年に中国縦貫道建設に伴って調査された西下野製鉄遺跡（7）が有名である。奈良時代初頭のたたら炉5基、炭置き場、砂鉄置き場が発見されている。近年では、東徳久遺跡（12）で郡内初例となる横口式炭窯が発見された。熱残留磁気法による年代測定では670年±20年と報告され、製鉄炉も検出されている。この他、町内では漆野段A遺跡（9）や岡の段遺跡（5）で製鉄遺跡が調査されている。

## 中世

群集墳や奈良時代の製鉄遺跡が存在するにもかかわらず、占領時代～古代の集落遺跡は上三河遺跡で発見された掘立柱建物以外は、ほとんど知られていない。しかし、古代末～中世になると、東徳久遺跡（12）や安川遺跡（19）、上三河遺跡（1）などで集落が確認されるようになる。東徳久遺跡では平安時代後半～鎌倉時代頃までの掘立柱建物を中心とする遺構が検出されている。

また、中世の城館として柏原（徳久）城、熊見城、長田山城など10ヶ所ほどの山城が知られているが、曲輪配置まで判明しているものは少ない。平成14年度から佐用郡教育委員会（現佐用町教育委員会）による実地踏査が順次行われており、今後、正確な基礎資料が整備されてゆくことが期待される。

## 参考文献

- 佐用郡教育委員会 埋蔵文化財調査年報（平成3～16年度）  
佐用町教育委員会 2006 『早瀬瓦窯跡』  
佐用町教育委員会 2007 『平成17年度 埋蔵文化財調査年報』  
南光町史編纂委員会 1994 『南光町史 原始・古代編』  
南光町史編纂委員会 1994 『南光町史 中世編』  
山崎町史編纂委員会 1977 『山崎町史』  
千種町史編纂委員会 1983 『千種町史』  
兵庫県教育委員会 1991 『長尾・沖田遺跡（I）』  
兵庫県教育委員会 2004 『兵庫県遺跡地図』

## 第2章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

兵庫県上郡土木事務所は、佐用郡南光町上三河（当時）において（主）若桜南光線道路改良事業を計画した。若桜南光線は、鳥取県と兵庫県を結ぶ主要地方道である。近年、その交通量が増加したため、集落を避けて道路を建設するいわゆるバイパス道路の建設を行うことになった。本事業はこのうち南光町下三河～上三河間約1,700mをつなぐものであり、平成6年度には南側約900mが完成した。残る北側800mは上三河遺跡（遺跡番号：510057）として周知されている遺跡の範囲内であり、道路予定地の隣接地は佐用郡教育委員会（当時）によっては場整備に伴う本発掘調査が実施されていた。

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（当時）は上記の事業計画を受けて、平成12年4月に計画路線内の分布調査（遺跡調査番号：2000006）を実施し、平成12年7月に確認調査（遺跡調査番号：200025）を行った。その結果、計画路線内の南端から北へ約260mの範囲で遺跡を確認した。このため、兵庫県西播磨県民局県土整備部上郡土木事務所の依頼（平成13年2月16日付け 上土-2319号）に基づき本発掘調査を実施した。

平成17年に南光町・佐用町・三日月町・上月町が合併し佐用町となったため、若桜南光線は若桜下三河線と名称が変更となっている。

### 第2節 分布調査・確認調査

#### 分布調査

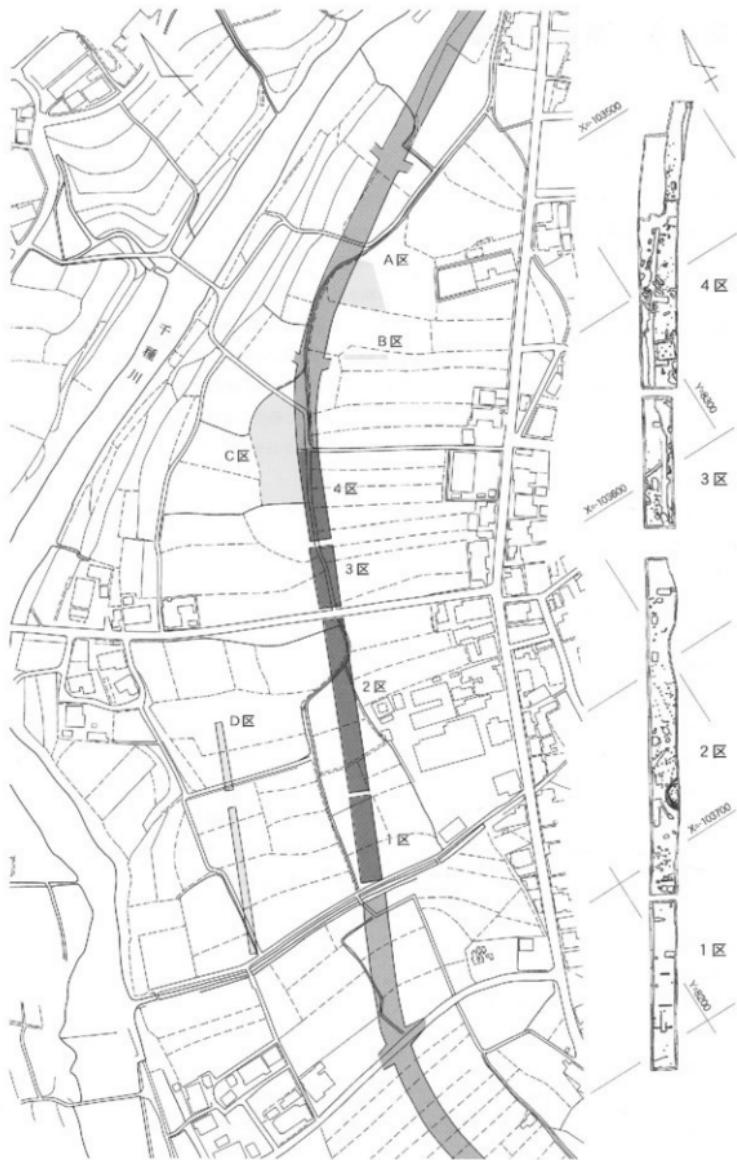
遺跡調査番号	2000006
調査担当者	西口圭介・小川弦太・海邊博史
調査期間	平成12年4月21日
調査面積	13,000m <sup>2</sup>

事業予定地内では道路建設における盛り土などによって遺構、遺物の確認はできなかった。しかし、周知の埋蔵文化財包蔵地である上三河遺跡内にすること、隣接地において本発掘調査が行われていること（第3図 A区～D区）などから、遺跡が存在する可能性が高いと判断した。

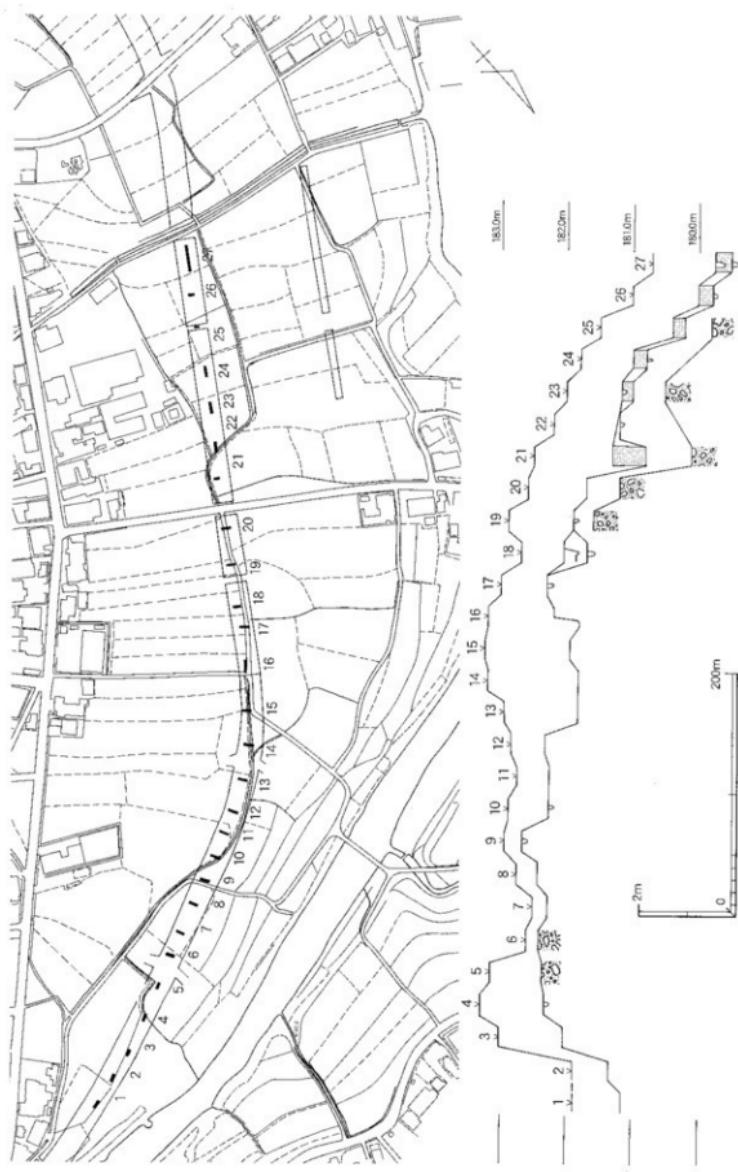
#### 確認調査

遺跡調査番号	2000225
調査担当者	山田清朝・甲斐昭光
調査期間	平成12年7月31日～8月3日
調査面積	370m <sup>2</sup>

幅2mのトレンチを調査箇所に合わせ長さを設定し、約20m間隔で合計27カ所の調査を行った。その結果、トレンチ16とした場所より南側約260mの範囲で遺構・遺物を確認した（第4図）。



第3図 路線図及び調査位置図



第4図 確認調査トレンチ位置図

### 第3節 本発掘調査

遺跡調査番号 2001004

調査担当者 藤田 淳・小川弦太

調査期間 平成13年5月30日～9月28日

調査面積 2,570m<sup>2</sup>

1区～4区に分けて調査を進め弥生時代から古墳時代にかけての集落、墓を発見した。主なものとして、堅穴住居3棟、掘立柱建物7棟、木棺墓・土坑墓10基がある。その他に溝、柱穴など多数発見した。  
(第3図)

### 第4節 普及活動

調査期間中の6月4日～8日の5日間、上津中学校の生徒2名を「トライやるウィーク」で受け入れたほか、町内の三河小学校、中安小学校、三上中学校の児童・生徒を対象に発掘体験学習や一日展示会を行った。また、8月11日には現地説明会を行い、約50名の参加を得た。



第5図 普及活動（発掘体験、展示会、現地説明会）

### 第5節 整理保存作業

#### 整理体制

出土遺物の洗浄、ネーミングなどは現場事務所で実施し、金属製品の保存処理および報告書作製に伴う整理作業（接合、遺物実測、復元、トレース、図版作製など）は兵庫県立考古博物館で実施した。

平成19年度 遺物の接合、復元、造構・遺物図版作製、金属器保存処理を行った。

整理保存班 岸本 一宏・岡本 一秀

嘱託員 A作業：眞子ふさ恵・伊藤ミネ子・早川有紀・荻野麻衣・谷脇里奈・的場美幸

B作業：宮田麻子・西村美緒

保存処理：栗山美奈・大前篠子・藤井光代

平成20年度 遺物の復元、トレース、造構・遺物図版作製、遺物写真撮影、写真図版作製と報告書編集作業を行った。

整理保存班 篠宮 正・岡本一秀

嘱託員 A作業：眞子ふさ恵・西口由紀・藏 積子・宮野正子・早川有紀・又江立子・嶺岡美見・藤池かづさ・小谷桂加

B作業：宮田麻子・西村美緒

保存処理：大前篠子・藤井光代・長濱重美

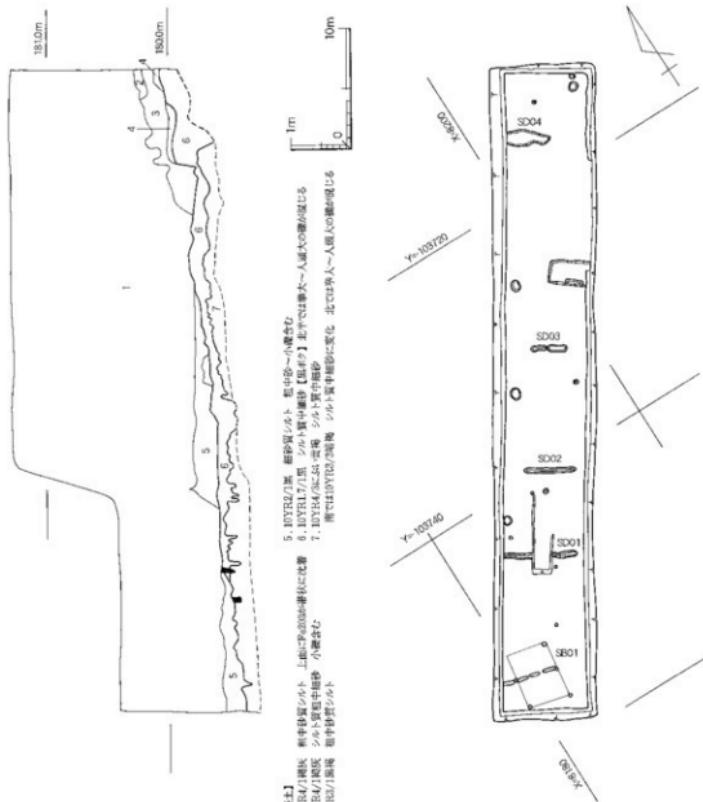
## 第3章 調査の成果

### 第1節 1区の遺構・遺物

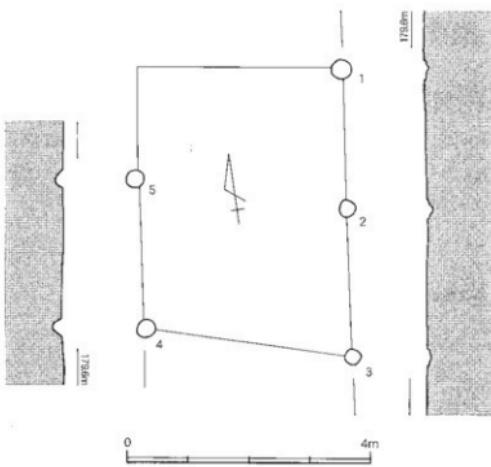
1区は調査区の南端にあたる。調査区は幅9m、長さ55mあり、今回の調査区では3番目の広さである。遺構面が2面あり、上層で中世、下層で弥生時代～中世の遺構を検出した。上層、下層とも遺構、遺物の密度は低い。上層の遺構は跡溝のみであり固化していない。

#### 1. 掘立柱建物

SB01(第7図、写真図版7)



第6図 1区平面図



第7図 SB01

第1表 SB01柱穴間距離

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
東桁行	P1-P2	2.30	4.74	2.37
	P2-P3	2.44		
南梁行	P3-P4	3.40	3.40	3.40
西桁行	P4-P5	2.46	2.46	2.46

#### 検出状況

1区南部で検出した。

#### 規模・規模

桁行2間×梁行1間の側柱の建物である。北西隅の柱穴は検出できなかった。各柱穴間の距離は第1表の通りである。

#### 柱穴

平面形は円形を呈する。柱穴の直径は28cm~30cm、検出面からの深さは浅いもので4cm、深いもので16cm前後を測る。

出土遺物 遺物の出土はない。

#### 2. 溝

##### SD01 (第6図、写真図版12)

検出状況 1区南部で検出した。SD02、SD03と平行する溝である。

**規模・形態** 幅50cm、長さ6m、深さ4~7cmの直線的に伸びる溝である。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

#### SD02 (第6図、写真図版12)

**検出状況** 1区南部で検出した。SD01、SD03と平行する溝である。

**規模・形態** 幅40cm、長さ4m、深さ8cmの直線的に伸びる溝である。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

#### SD03 (第6図)

**検出状況** 1区中央部で検出した。SD01、SD02と平行する溝である。

**規模・形態** 幅50cm、長さ3m、深さ10cmの直線的に伸びる溝である。

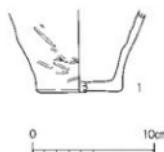
**出土遺物** 遺物の出土はない。

#### SD04 (第6図)

**検出状況** 1区北部で検出した。

**規模・形態** 最大幅1.4m、長さ3.6m、深さ10~15cmの溝である。

**出土遺物** 遺物の出土はない。



### 3. 包含層出土土器 (第8図、写真図版19)

(1) は甕底部である。体部外面は粗いヘラミガキが施される。

第8図 1区包含層出土土器

## 第2節 2区の遺構・遺物

2区は幅9m、長さ104mある。今回の調査区では2番目の広さである。遺構は基本的に二次堆積した黒ボク土下面(第9図12層の上面)で検出した。遺構面のところどころには礫層が見られる。今回の調査において遺構密度が最も高い地区である。検出した遺構は竪穴住居1棟、掘立柱建物6棟、土坑10基、溝3条、柱穴である。

#### 1. 竪穴住居

##### SH01 (第10図、写真図版5)

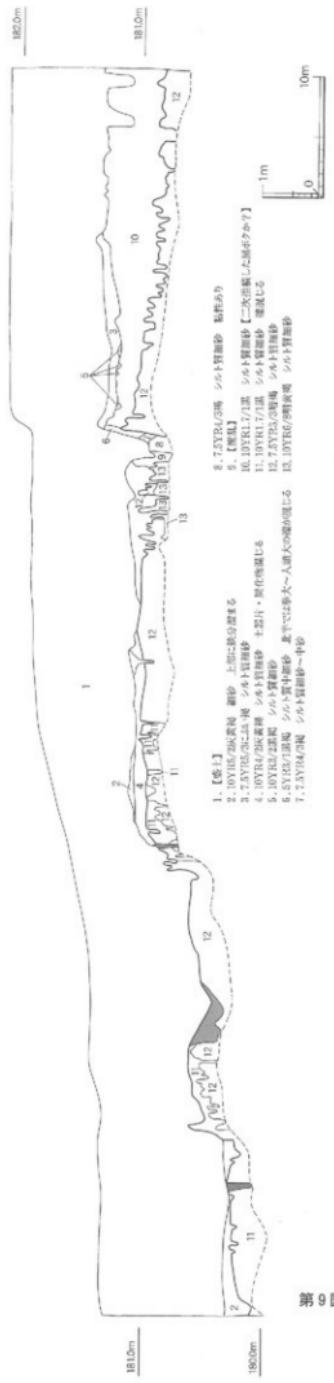
###### 検出状況

調査区東壁際で住居のはば半分を検出した。住居埋土から土器、石器、サヌカイトのチップ、炭化米、オニグルミ・モモ・オオムギなどの種子が出土している。

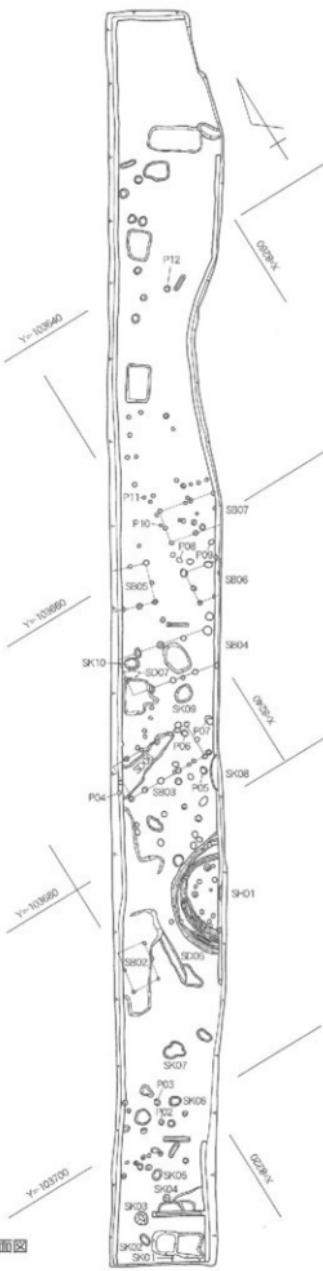
###### 規模・形態

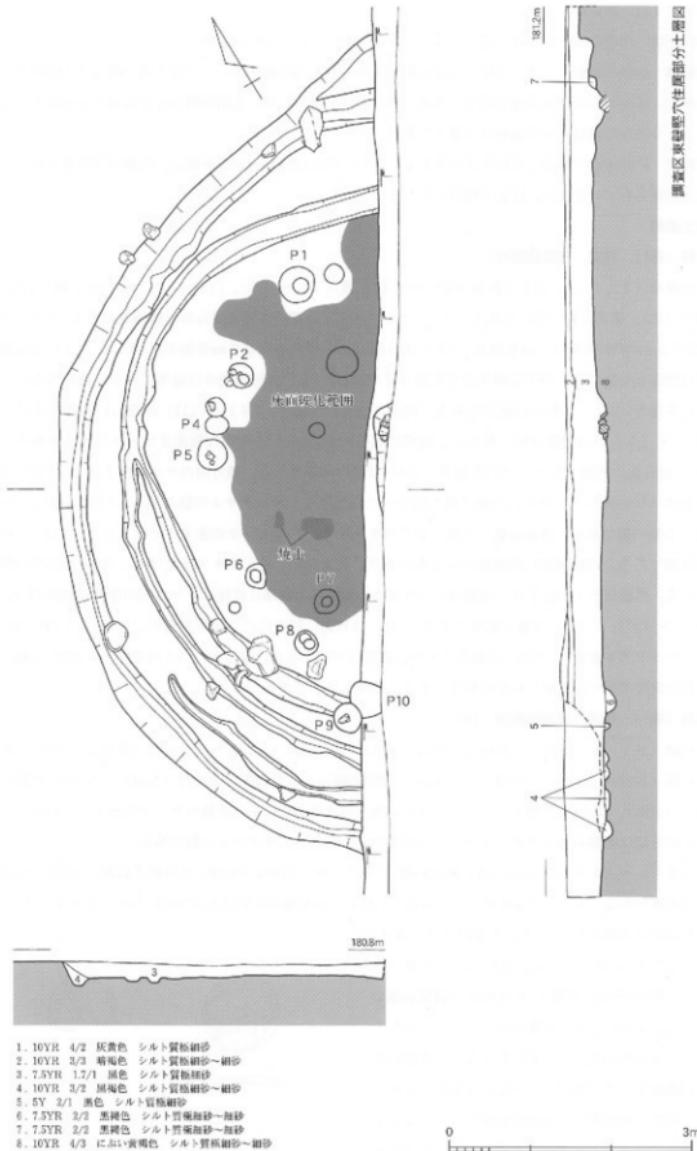
直径10m前後の円形住居と考えられる。遺構検出面からの深さは約20cmを測る。柱穴で開まれた部分の床面は、他の床面より固く、踏みしめられている。住居は拡張を伴う増築が行われている。床面の一部に焼土を検出した。

###### 屋内施設



第9図 2区平面図





第10図 SH01

中央土坑、周壁溝、主柱穴からなる。

中央土坑 東壁際で中央土坑と考えられるくぼみを検出したが全容は不明である。

周壁溝 住居の北側で2重、南側では部分的に4重となる周壁溝を持つ。一番外側の溝は住居南側で一番深く、床面からの深さ15cmを測る。北側へ進むに従い浅くなり、北側壁際付近では深さ6cmほどとなる。そのほかの溝は6~10cm前後の深さである。

主柱穴 住居床面で検出した柱穴は13基ある。柱穴の直径は15cm~40cmを測る。内側の周壁溝を切って柱穴が掘られているため、住居が増築されたと考えられる。

#### 出土遺物

##### 土器（第11、12図、写真図版19）

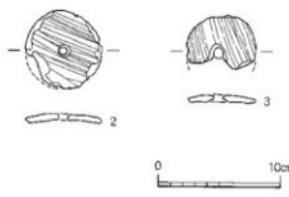
紡錘車（2）、（3）、弥生土器壺（4）～（7）、壺（8）～（13）、（15）～（17）、（19）、鉢（14）、脚部（18）、縄文上器（20）が出土した。（2）・（3）は壺の体部で作られた紡錘車である。（2）は直径6.2cm、中央の孔は7mmを測る。（3）は直径5.5cm、中央の孔は7mmを測る。（4）・（5）は口縁部に凹線文を施し、その上に捺状浮文を貼り付け飾る。（6）は短頸壺の口縁部である。体部外面にハケ目を施す。（7）は壺の口縁部である。内面にハケ目を施す。（8）～（11）は壺の口縁部である。（8）・（9）の口縁部は短く外反し、端部に面を持つ。（9）の内面は頸部までヘラケズリを施す。（10）は外面、内面ともにハケ目を施す。（11）は壺口縁部である。横方向のナデで仕上げる。（12）は外面にハケの後ハラミガキ、内面に横方向のハケ目を施し、ユビオサエの跡が残る。（13）は高さ11.6cmの小型の壺である。外面は縱ハケ後ハラミガキを施し、内面はハケの後ナデで仕上げる。（14）は鉢口縁部である。口縁端部に凹線状のへこみがあり、横方向のハラミガキで仕上げる。（15）は小型の壺である。外面はナデで仕上げ、内面はヘラケズリを施す。口縁部に直径7ミリほどの穿孔が1箇所ある。（16）・（17）・（19）は壺の底部である。（16）は外面に縦方向のハケ目を施す。（17）・（19）は内面にヘラケズリを施す。（18）は脚部であり、器種は不明である。縦方向のハケ目を施す。（20）は縄文土器の破片であり、沈線がわかる程度である。器種は不明である。

##### 石器（第14、15図、写真図版28、29）

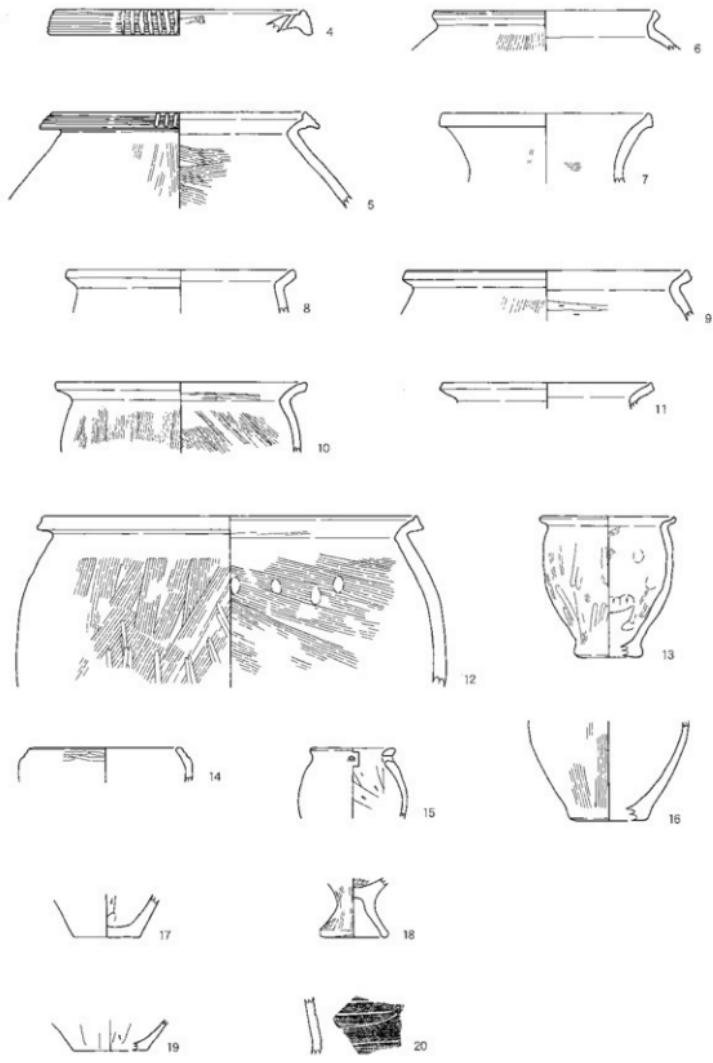
石鎌（S1）～（S11）、（S18）、（S32）～（S37）、石錐（S12）～（S17）、（S38）、（S39）、楔形石器（S19）、（S22）、（S24）～（S25）、調整剥離のある小剥片（S20）、（S21）、（S23）、磨製石包丁（S26）、（S27）が出土した。このほか、埋土の水洗選別により多量のチップが出土している。これらの石器は磨製石包丁やチップのごく一部をのぞいてすべてサスカイト製である。

（S1）～（S6）、（S32）は平基式石鎌、（S7）～（S10）、（S18）は円基式石鎌、（S11）は有茎式石鎌である。大きさでは平基式、円基式とも長さ3cmを境に小形品と大型品に分けることができる。小形品では重量は1.3g以下、大型品では（S4）

を除いて2.5g以上となり、完形品の最大は（S9）の長さ4.6cm、重量4.5gである。調整剥離の状況は、中央付近まで剥離が及んでいることがうかがえる資料が多いが、多かれ少なかれ素材剥片の剥離面を一部に残す。（S11）は茎部と考えられる部位に断面菱形の端面面が認められることから、茎部の欠損した有茎式石鎌とした。長さ1.46cm、重量0.4gの極小品であり、戦闘的な機能を



第11図 SH01出土土器 1



0 20cm

第12図 SH01出土土器 2

もつ大型の有茎式石鎌とは異なる。平基式に大型の戦闘用石鎌がみられることは播磨以西の瀬戸内沿岸部の遺跡の特色であり、内陸の上三河遺跡でも同様な傾向と言えるが、有茎式が長さ1cm以下の1点しかないことは偏ったあたりを示している。(S18)、(S33)～(S37)は未製品と考えた一群である。(S18)は平面的な調整剥離が両側縁から行われていることから石鎌の欠損と判断したが、7～8cmほどの長さに復元できると推定され、かなりの大型品となる。基部に調整剥離が行われていないため未製品としておく。(S33)は一見、完成品のように見えるが、基部側が欠損し一侧縁は調整剥離が行われていない。(S34)～(S37)は平面的な調整剥離が認められる薄手の剥片で、大きさや形態などから石鎌の未製品とした。

石錐のうち(S12)、(S13)は摘み部と錐部の区別が明瞭なもの、(S15)～(S17)は摘み部と錐部の区別が不明瞭なもの、(S14)は摘み部のない棒錐である。この他に錐部の破片も3点出土しており、(S38)、(S39)はそのうち2点である。先端が欠損したものの多いものの、先端部の破片や残存部位には摩耗はまったく認められない。なお、(S15)は石鎌とも考えられるが、(S1)～(S11)の石鎌よりは厚みがあるため石錐とした。

楔形石器は典型的なものは(S19)の1点である。上辺と右下辺とに相対する作用部が認められる。(S22)は両極打撃によって剥離された剥片で主剥離面は平坦である。(S24)、(S25)は楔形石器のスボールである。調整剥離のある小剥片は、薄い小剥片の一部に調整剥離が認められるもので、石鎌の未製品の可能性もある。

磨製石包丁は(S26)が完成品である。褐色を呈する細粒の砂岩かと思われる石材が使用されている。一部に磨き残しがあるものの、全面を研磨して小判形に整形された両刃の石包丁である。穿孔は両側から回転を利用して行われている。研磨痕は左面で明瞭に残るのに対して、右面は上半部がことによく摩滅し、研磨痕は下半を中心へうっすらと観察できる程度である。また、右面の刃縁に沿って下側の孔あたりの位置まで光沢が認められる。このことから、右面を上に向けて右手で操作したことが察せられる。(S40)は結晶片岩と思われる淡い緑灰色の石材を用いる。表裏の平坦部は研磨されているものの、刃縁部、背縁部とも剥離痕が残るため石包丁の未製品と考えられる。

この他、水洗選別によって多量の小剥片やチップが出土している。(巻頭図版2下段)これらの中にはサメカイト以外の石材もわずかながら認められ、ここにあげた以外の石器も製作されたことがうかがえる。また、小剥片には打面が認められないものが大半であるのに対して、長さ5mm以下のチップには打面とディフューズバルブを有するものが散見されることから、これらのチップはこの住居跡で最も多く出土した打製石鎌の製作にかかわるものであると考えて大過ないであろう。

#### 石製品（第15図、巻頭図版2）

管玉（T1）～（T3）が出土している。（T1）、（T3）は淡緑色の碧玉製で、径2.5mmの細身の管玉である。長さは6mmと14mm。（T2）はこれよりやや太く、褐色でざらつきのある石が用いられている。径3.5mm。長さ12mm以上。

#### 骨（第13図）

水洗選別によって出土した骨片である。長さ1cmほどの大きさしかなく、食料となった動物の骨と思われるが同定は行っていない。焼けて白色化している。



第13図 SH01出土骨片

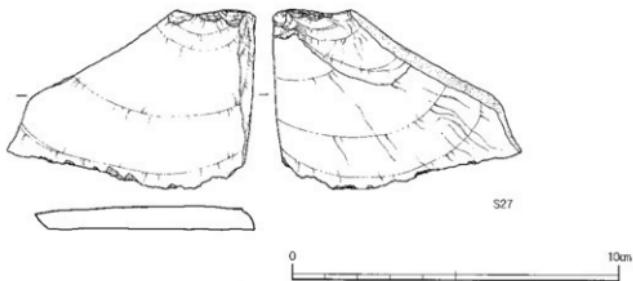
SH01



第14図 SH01出土石器 1



SB07



第15図 SH01出土石器 2

## 2. 据立柱建物

SB02 (第16図、写真図版8)

### 検出状況

2区南部で検出した。

### 規模・形態

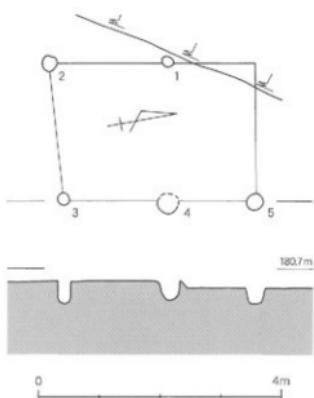
桁行2間×梁行1間の建物である。北西隅の柱穴は調査区外となるため検出できなかった。各柱穴間の距離は第2表の通りである。

### 柱 穴

基本的に平面形は円形を呈する。柱穴の直径は25cm前後、深さは30cm前後である。

### 出土遺物

遺物の出土はない。



第16図 SB02

第2表 SB02柱穴間距離

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
西桁行	P1-P2	1.92	1.92	1.92
南梁行	P2-P3	2.28	2.28	2.28
東桁行	P3-P4	1.70	3.10	1.55
	P4-P5	1.40		

SB03 (第17図、写真図版8)

検出状況

2区中央部で検出した。

規模・形態

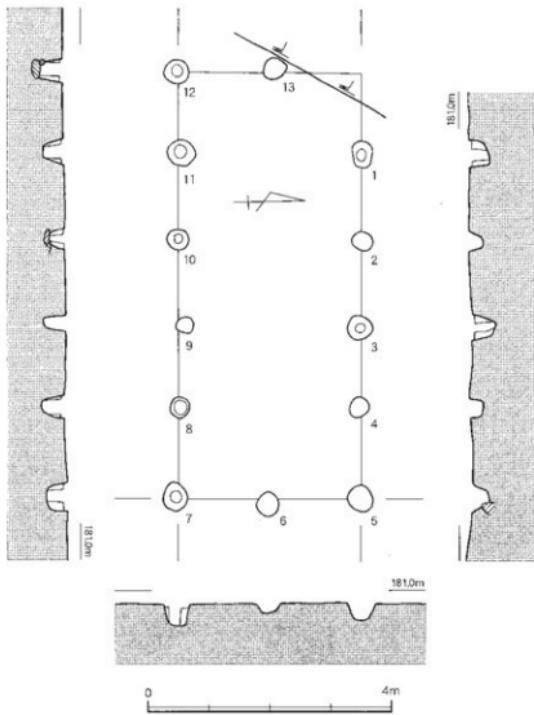
桁行5間×梁行2間の建物である。北西隅の柱穴は検出できなかった。各柱穴間の距離は第3表通りである。

柱 穴

基本的に平面形は円形を呈する。柱穴の直径は30~50cm、深さは16~40cmを測る。柱痕跡が確認できた柱穴から、柱の太さは20cm前後であったと考えられる。

出土遺物 (第18図、写真図版20)

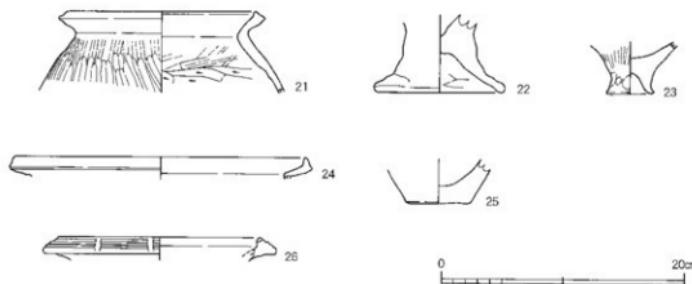
柱穴から弥生土器罐(21)、高杯(22)、脚部(23)が出土した。(21)は外面に縦ハケの後ヘラミガキを施し、内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。(22)は高杯脚部である。ヨコナデやヘラナデで成形する。(23)は脚部である。脚部は指揮さえで成形し、体部にヘラミガキを施す。



第17図 SB03

第3表 SB03柱穴間距離

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北桁行	P1-P2	1.40	5.60	1.40
	P2-P3	1.40		
	P3-P4	1.30		
	P4-P5	1.50		
東梁行	P5-P6	1.50	3.00	1.50
	P6-P7	1.50		
南桁行	P7-P8	1.50	7.10	1.42
	P8-P9	1.40		
	P9-P10	1.40		
	P10-P11	1.50		
	P11-P12	1.30		
西梁行	P12-P13	1.60	1.60	1.60



第18図 SB03・04出土土器

## SB04 (第19図、写真図版20)

## 検出状況

2区中央部で検出した。

## 規模・形態

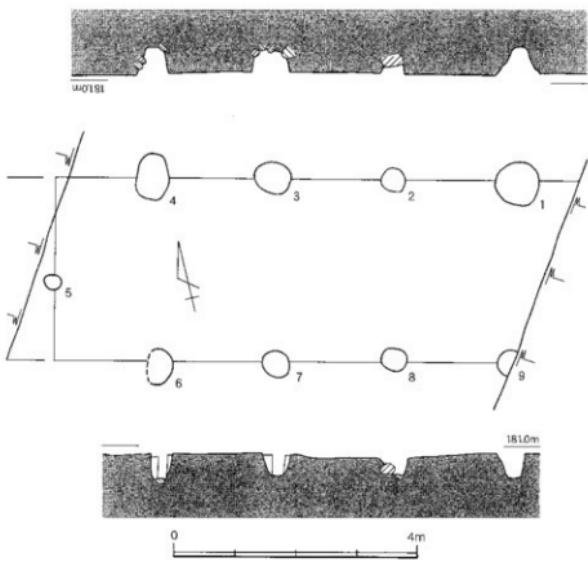
桁行4間以上×梁行2間の建物である。北西隅及び南東隅の柱穴は検出できず、建物東側は調査区外へと続く。各柱穴間の距離は第4表の通りである。

## 柱穴

基本的に平面形は円形を呈する。柱穴の直径は40~60cm、深さは30~40cmを測る。柱痕跡が確認できた柱穴から、柱の太さは20cm前後であったと考えられる。一部の柱穴の底には石が入れられている。

出土遺物（第19図、写真図版20）

柱穴から弥生土器甕（24）、（25）、壺（26）が出土した。（24）は口縁部の破片である。口縁部端部を上方に埋め上げる。（25）は底部である。ナデにより成形されている。（26）は口縁部である。4条の凹線上に棒状浮文が2箇所残存している。



第19図 SB04

第4表 SB04柱穴間距離

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北桁行	P1-P2	2.00	6.00	2.00
	P2-P3	2.00		
	P3-P4	2.00		
南桁行	P6-P7	2.00	6.10	2.03
	P7-P8	2.10		
	P8-P9	2.00		

SB05（第20図、写真図版9）

検出状況

1区中央部で検出した。

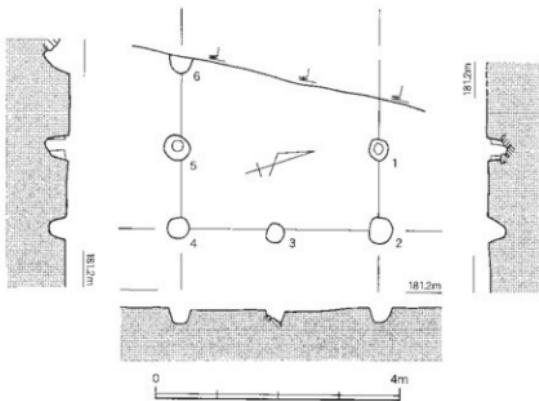
## 規模・形態

桁行2間以上×梁行2間の建物である。建物西側は調査区外へと続く。各柱穴間の距離は第5表通りである。

## 柱穴

基本的に平面形は円形を呈する。柱穴の直径は32~40cm、深さは30~40cmを測る。柱痕跡が確認できた柱穴から、柱の太さは20cm前後であったと考えられる。一部の柱穴の底から石を検出した。

**出土遺物** 遺物の出土はない。



第20図 SB05

第5表 SB05柱穴間距離

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
北桁行	P1-P2	1.38	1.38	1.38
東梁行	P2-P3	1.70	3.24	1.62
	P3-P4	1.54		
南桁行	P4-P5	1.34	2.68	1.34
	P5-P6	1.34		

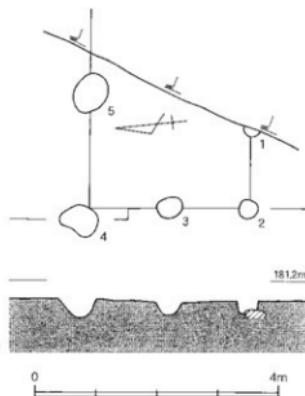
## SB06 (第21図)

### 検出状況

2区中央部東壁際で検出した。

## 規模・形態

桁行1間以上×梁行2間の建物である。建物東側は調査区外へと続く。各柱穴間の距離は第6表通りである。



第21図 SB06

第6表 SB06柱穴間距離

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
南桁行	P1-P2	1.30	1.30	1.30
西梁行	P2-P3	1.30	2.70	1.35
	P3-P4	1.40		
北桁行	P4-P5	2.00	2.00	2.00

#### 柱 穴

基本的に平面形は円形を呈するが、北西の柱穴が、いびつな円形を呈する。柱穴の直径は30~60cm、深さは20~30cmを測る。

#### 出土 遺物

遺物の出土はない。

#### SB07 (第22図、写真図版9)

##### 検出状況

2区中央部東壁際で検出した。

##### 規模・形態

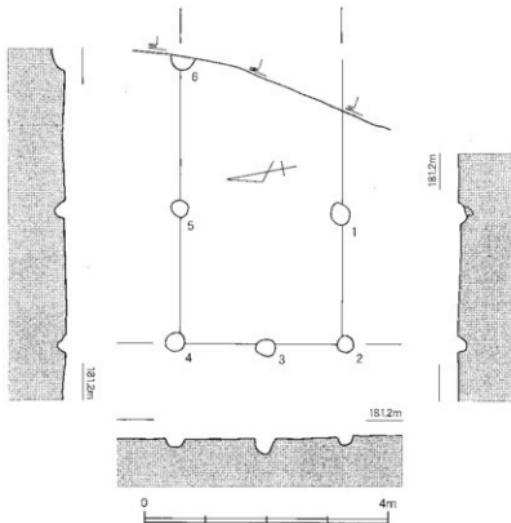
桁行2間以上×梁行2間の建物である。建物東側は調査区外へと続く。各柱穴間の距離は第7表の通りである。

#### 柱 穴

基本的に平面形は円形を呈する。

#### 出土 遺物 (第15図、写真図版29)

(S27)は使用痕のある剥片である。比較的大型の横長剥片で剥離軸に沿って縦折れしている。直線



第22図 SB07

第7表 SB07柱穴間距離

	柱間	柱穴間距離 (m)	側面距離 (m)	柱穴間平均距離 (m)
南桁行	P1-P2	2.10	2.10	2.10
西梁行	P2-P3	1.36	2.78	1.39
	P3-P4	1.42		
北桁行	P4-P5	2.20	4.60	2.30
	P5-P6	2.40		

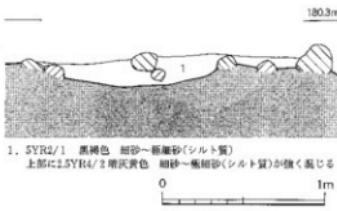
的な剥片端部に微細な剥離痕が連続している。

### 3. 土坑

#### SK01 (第23図)

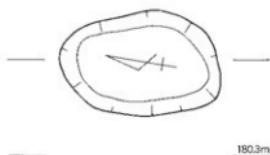
検出状況 2区南壁際で検出した。調査区際で検出し、その大半を擾乱土坑により壊されている。

規模・形態 検出した幅1.6m、検出面からの深さ18cmの土坑である。擾乱を受けており、土坑全体の形態は不明である。



第23図 SK01

SK02

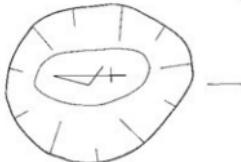


180.3m

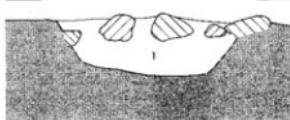


1. 2.5Y 4/2 墓灰黃色 細砂～極細砂(シルト質)
  2. 2.5Y 4/2 墓灰黃色 細砂～極細砂(シルト質)
- SYR2/1 黒褐色土  $\pm$  2~4cmのブロックが混じる

SK03

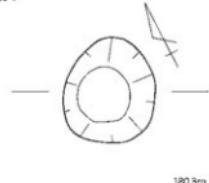


180.3m

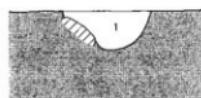


1. SYR2/1 黒褐色 細砂～極細砂(シルト質)

SK04



180.3m

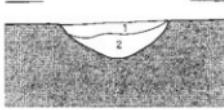


1. 2.5Y 4/2 墓灰黃色 細砂～極細砂(シルト質)

SK05

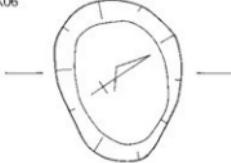


180.3m

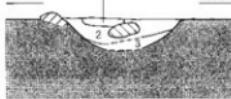


1. 2.5Y 4/2 墓灰黃色 細砂～極細砂(シルト質)
  2. 2.5Y 4/2 墓灰黃色 細砂～極細砂(シルト質)
- SYR2/1 黒褐色土  $\pm$  2~4cmのブロックが混じる

SK06



180.3m



1. 2.5Y 4/2 墓灰黃色 細砂～極細砂(シルト質)
  2. SYR2/1 黒褐色 細砂～極細砂(シルト質)
3. 10YR 3/3 藍褐色 細砂～極細砂(シルト質)



第24図 SK02・03・04・05・06

**出土遺物** (第27図、写真図版20) 弥生土器底面 (27) が出土した。体部外間にヘラミガキを施す。  
底部は上げ底状になる。

#### SK02 (第24図)

**検出状況** 2区南部で検出した。

**規模・形態** 平面形は楕円形を呈し、長径1m、短径66cm、検出面からの深さ最大22cmを測る。土坑の南側が一段深くなる。

**出土遺物** 土器小片が出土している。

#### SK03 (第24図、写真図版10)

**検出状況** 2区南部で検出した。

**規模・形態** 平面形は楕円形を呈し、長径1.14m、短径1m、検出面からの深さ最大36cmを測る。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

#### SK04 (第24図)

**検出状況** 2区南部で検出した。

**規模・形態** 平面形は楕円形を呈し、長径66cm、短径58cm、検出面からの深さ最大24cmを測る。

**出土遺物** 土器小片が出土している。

#### SK05 (第24図、写真図版10)

**検出状況** 2区南部で検出した。

**規模・形態** 平面形は楕円形を呈し、長径1m、  
短径70cm、検出面からの深さ最大22cmを測る。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

#### SK06 (第24図、写真図版10)

**検出状況** 2区南部で検出した。

**規模・形態** 平面形は楕円形を呈し、長径1m、  
短径80cm、検出面からの深さ最大20cmを測る。

**出土遺物** 土器小片が出土している。

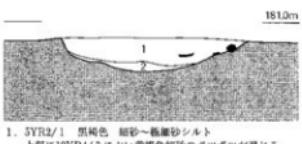


#### SK07 (第9図)

**検出状況** 2区南部で検出した。

**規模・形態** いびつな平面形を呈し、長さ1.8m、  
幅1mを測る。

**出土遺物** 遺物の出土はない。



#### SK08 (第9図、写真図版11)

**検出状況** 2区中央部東壁際で検出した。土坑

第25図 SK09

の大半は調査区外となる。

規模・形態 平面形は梢円形と考えられるが、土坑の一部は調査区外となるため全容は不明である。検出した長さ3m、幅50cmを測る。

出土遺物 弥生土器甕が出土している。

#### SK09 (第25図、写真図版10)

検出状況 2区中央部で検出した。SD06の東に位置する。

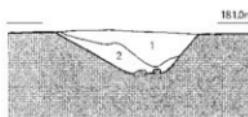
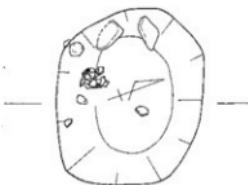
規模・形態 平面形は梢円形を呈し、長径1.6m、短径1.2m、検出面からの深さ最大20cmを測る。

#### 出土遺物 (第27図、写真図版20) 弥生土器甕 (28)

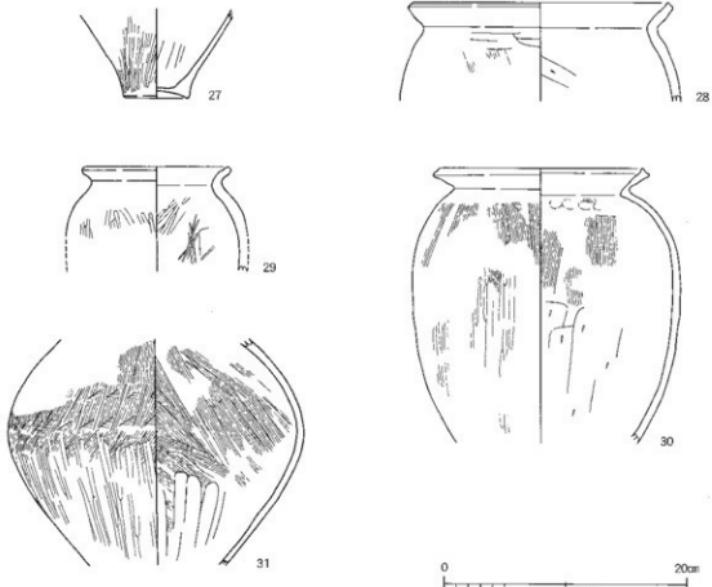
が出土した。口縁端部に凹線を1条施す。体部は綱ハケ後ナデ、体部内面はヘラ削りを施す。

#### SK10 (第26図、写真図版10)

検出状況 2区中央部西壁際で検出した。



第26図 SK10



第27図 SK01・09・10出土土器

**規模・形態** 平面形は梢円形を呈し、長径1.1m、短径90cm、検出面からの深さ最大24cmを測る。

#### 出土遺物（第27図、写真図版20）

弥生土器甕（29）、（30）、壺（31）が出土した。（29）は体部内外面ともにヘラミガキを施す。（30）は口縁端部をわずかに上方へつまみ上げる。体部外面は縦方向のハケを施し、体部下半はヘラミガキで仕上げる。体部内面はハケと下半部にヘラケズリを施す。体部外面には黒斑、煤が付着する。（31）は壺体部である。外面は縦方向のハケ目の後、体部下半にヘラミガキを施す。体部が一番張る部分に肩形文を意識したような列点文を施す。体部内面はハケの後、下半を板ナナによって仕上げる。

#### 4. 溝

##### SD05（第9図）

**検出状況** 2区南部で検出した。SH01の西側に位置する。北部は擾乱に切られる。

**規模・形態** 検出した長さ4.5m、幅70cmを測る。溝は南北方向に伸びる。

**出土遺物**（第28図、写真図版21） 弥生土器甕（32）、土器片（33）が出土した。体部外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面は下半部をヘラケズリ、上半部をハケの後ユビオサエを行う。口縁端部には凹線を1条いれる。体部外面には煤が付着する。（33）は内外面ともヘラミガキを施す。器種は不明である。

##### SD06（第29図）

**検出状況** 2区中央部西壁際で検出した。溝西部は調査区外へと伸びる。

**規模・形態** 検出した長さ6.8m、最大幅2m、深さ最大12cmを測る。溝は東西方向に伸び、西壁際で若干幅が拡がる。

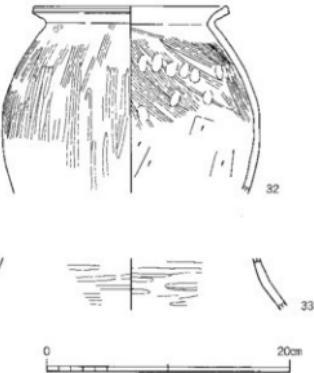
**出土遺物** 土器小片が出土している。

##### SD07（第29図）

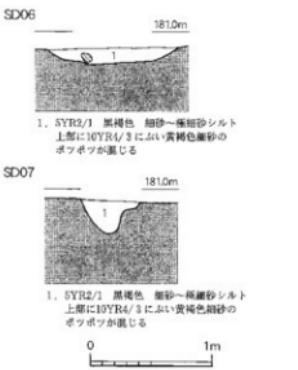
**検出状況** 2区中央部西部で検出した。SK10南側に位置する。溝西部は調査区外へと伸びる。

**規模・形態** 検出した長さ1.6m、最大幅50m、深さ最大26cmを測る。溝は東西方向に伸びる。

**出土遺物** 土器小片が出土している。



第28図 SD05出土土器



第29図 SD06・07



第30図 P05出土土器

## 5. 柱 穴

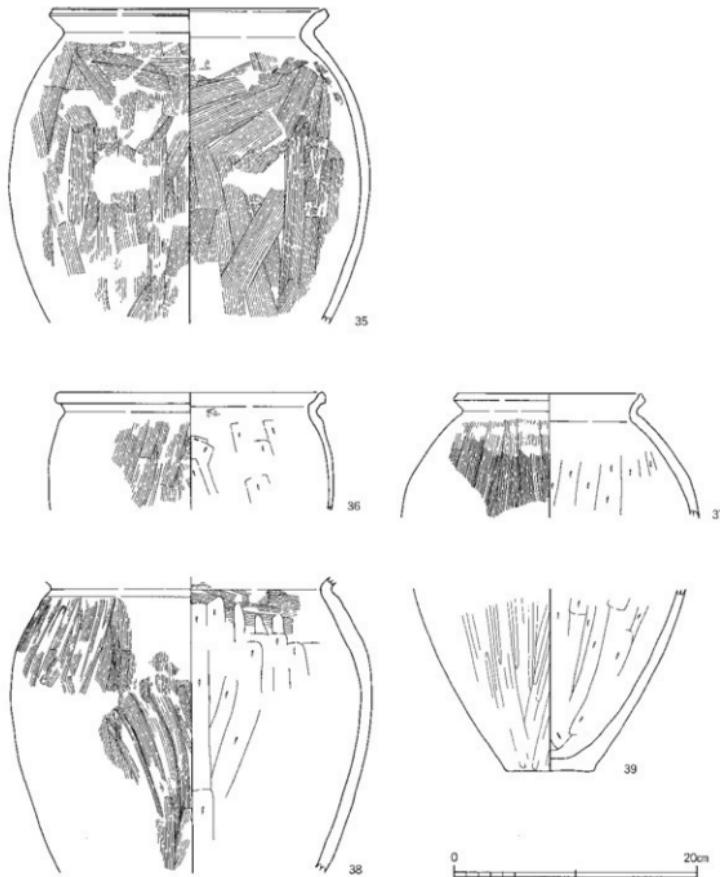
P05 (第9図)

検出状況 2区中央部で検出した。

規模・形態 直径35cm、検出した深さ7cm。

出土遺物 (第30図、写真図版21) 弥生土器類 (34) が出土した。(34) は口縁端部破片である。外  
面は綫方向のハケを施し、内面は口縁部部近くまでヘラケズリを行う。

P11 (第9図)



第31図 P11・12出土土器

検出状況 2区中央部で検出した

規模・形態 直径25cm、検出した深さ5cm。

出土遺物（第31図、写真図版21） 弥生土器甕（35）が出土した。（35）内外面とも縦方向のハケを施す。体部外面の下半部には煤が付着する。口縁端部に凹線を1条いれる。

#### P12（第9図）

検出状況 2区中央部で検出した

規模・形態 直径45cm、検出した深さ11cm。

出土遺物（第22図、写真図版9） 弥生土器甕（36）～（39）が出土した。（36）、（37）は外面に縦方向のハケ、内面に頸部近くまでヘラケズリを施す。（37）は外面に煤が付着する。（38）は外面に縦方向のハケ、内面は頸部近くに横方向のハケを施し、ヘラケズリを施す。（39）は甕底部である。外面に縦方向のヘラミガキを施し、内面にヘラケズリを行う。内面にはオコゲの跡が残り、外面には煤が付着する。

#### 6. 包含層出土土器（第32～34図、写真図版21～23）

土器 2区は包含層からの土器の出土が最も多かった。しかし、その多くは小片であり図化できるものは少なかった。その中で図化できたものを報告する。出土したのは、弥生土器甕（40）～（46）、甕（47）～（57）、鉢（58）～（60）、高坏（61）、（62）、紡錘車（64）、網文土器（65）～（67）である。（40）は壺口縁部破片である。外面にハケ、内面にヘラミガキを施す。口縁部端部には5条の凹線を施し、棒状浮文を貼り付け飾る。口縁部内面には3個を1単位とする穿孔を行っている。（41）は壺体部破片である。外面に波状文、直線文の装飾を施す。一部、直線文の上に円形浮文を貼り付け、最下段には列点文を施す。（42）は壺口縁部破片である。口縁部端部に3条の凹線を施し、円形浮文を貼り付け飾る。凹線文上面と口縁内部に廻る突帶には刻み目を施す。（43）は壺体部破片である。体部外面をハケ調整の後、波状文、直線文、斜格子文を施す。（44）、（45）は短頭壺である。（44）は体部内面にヘラケズリを施すが、外面の調整は不明である。（45）は体部外表面ともにナデ調整を行う。口縁部には2箇所を1単位とする穿孔を行っている。（46）は壺頸部である。体部外表面はハケの後ナデで調整を行うが、内面はナデ調整のみである。（47）は外表面ともにハケで調整を行う。口縁部端部は面を持ち、凹線を施す。（48）は体部外表面をヘラミガキ、内面はハケで調整を行う。（49）は口縁部端部をわずかに下斜め方向に拡張する。体部外表面はハケ、内面は体部中ほどまでヘラケズリを行い、上部はナデとユビオサエを施す。外面には煤が付着している。（50）は口縁端部に凹線を施す。体部外表面は縦方向のハケ、内面は口縁部近くまでヘラケズリを行う。（51）、（52）は体部外表面をハケ、内面にヘラケズリを施す。（53）は体部外表面を不定方向のナデ、内面を口縁部近くまでヘラケズリを施す。（54）は体部外表面の上部はナデ、下部にヘラミガキを施し、内面は上部にハケ、下部にヘラケズリを施す。（55）は体部外表面にハケを施す。内面は不明。（56）は甕底部である。体部外表面にはヘラミガキ、内面にはヘラケズリを施す。（57）は体部外表面に縦方向のハケ、内面にヘラケズリを施す。（58）は体部外表面ともにヘラミガキを施す。（59）は口縁部端部に刻み目を施す。体部外表面はナデで調整を行うが、外面に調整痕が残り、煤が付着する。（60）体部外表面はヘラでなでたような調整を行い、内面はヘラケズリを行う。（61）は高坏の坏部である。外表面ともにナデで調整を行う。底部はヘラ切りをナデで調整している。（62）は高坏脚部である。外面はヘラミガキを施す。（63）は甕底部である。体部外表面にはヘラミガキ、内面には



40



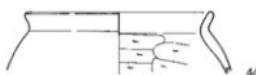
41



42



43



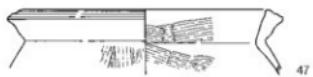
44



45



46



47



48



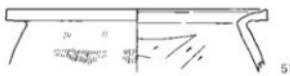
49



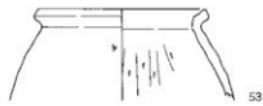
50



51



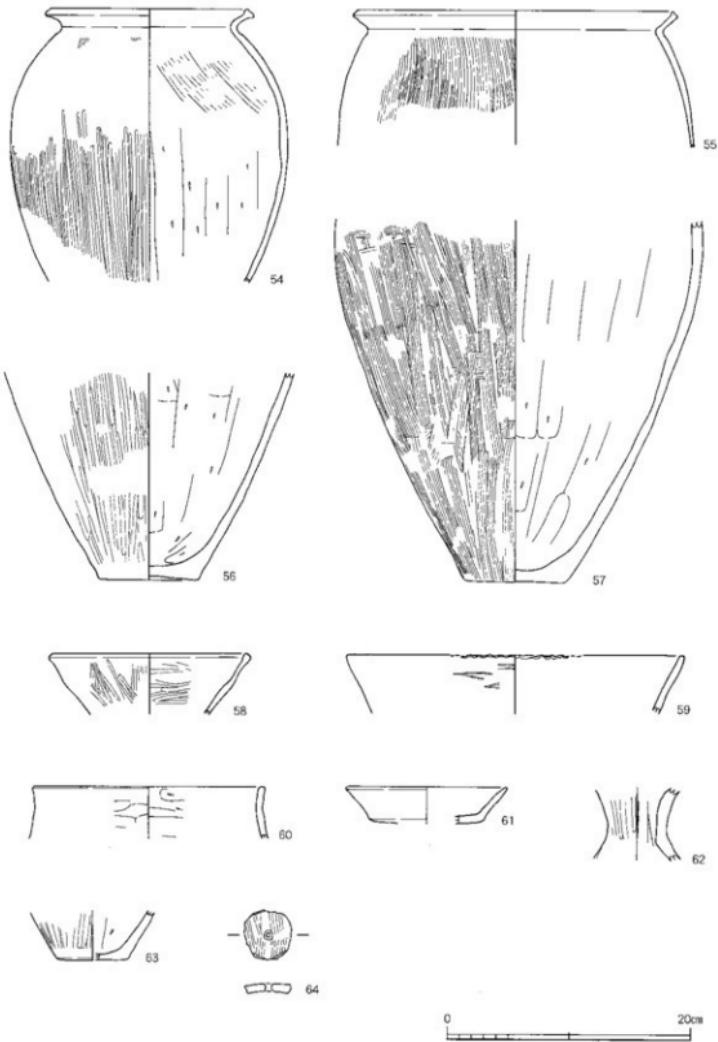
51



53



第32図 2区包含層出土土器 1



第33図 2区包含層出土土器 2



65

ヘラケズリを施す。(64)は瘦体部で作られた紡錘車である。直徑約4cm、中央の孔は4mmを測る。(65)は鉢の口縁部である。(66)、(67)は沈線が確認できるが、細片のため器種は不明であるが、紋様などから縄文時代中期と考えられる。

**石器** 石鏃(S28)、扁平両刃石斧(S29)、大型蛤刃石斧(S30)が出士している。(S28)は小形の平基式石鏃で長さ2.4cm、重量は1.2gである。(S29)は扁平な石斧で刃部は両刃となる。ほぼ全面が磨き残すことなく研磨され、薄手に仕上げられている。淡褐色を呈する石材で粘板岩かと思われる。(S30)は最大幅が体部のほぼ中央にあり、厚みは基部側が最大となって刃部に向かって楔形をなす。刃部は両面とも丁寧



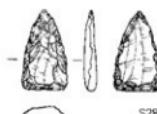
66



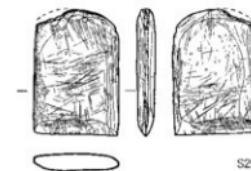
67

0 10cm

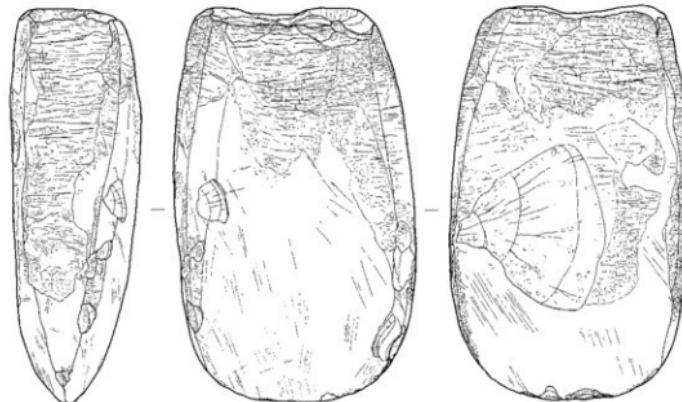
第34図 2区包含層出土土器 3



S28



S29



S30

0 10cm

第35図 2区包含層出土石器

に研磨されながらかな曲面をなすが、体部～基部は磨き残しが多く、滑り止めを意図したものと思われる。凝灰岩質砂岩か？

### 第3節 3区の遺構・遺物

3区は県道の北側の地区である。調査区は幅10m、長さ40mあり、今回の調査区では4番目の広さである。調査区全体に疊層が広がっており遺構の密度は低い。検出した遺構は土坑、溝、柱穴である。

#### 1. 土坑

##### SK11（第37図）

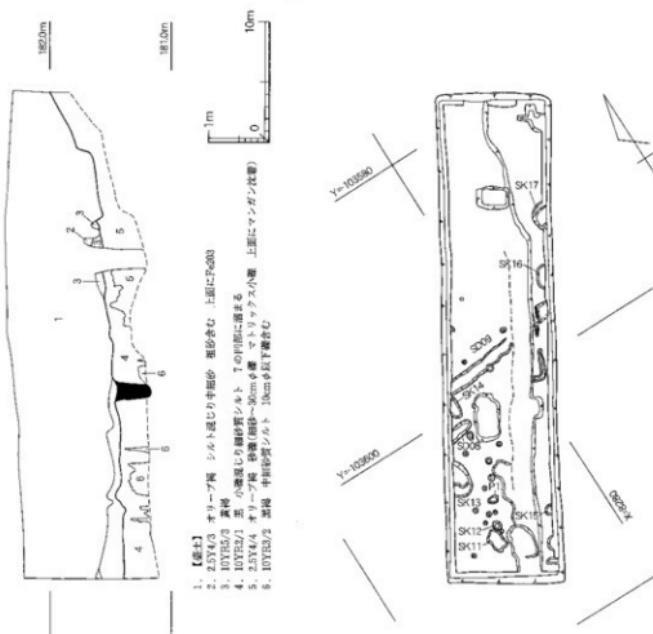
検出状況 3区南部で検出した。

規模・形態 平面形は直角三角形を呈し、長さ1.9m、幅1m、検出面からの深さ最大22cmを測る。

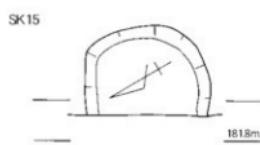
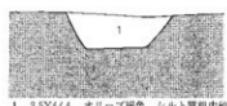
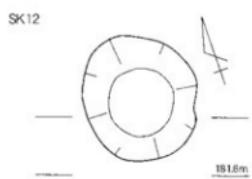
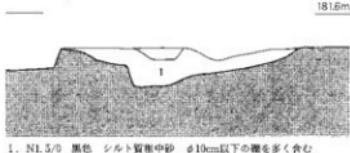
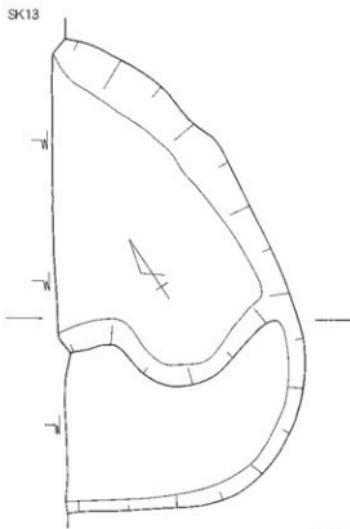
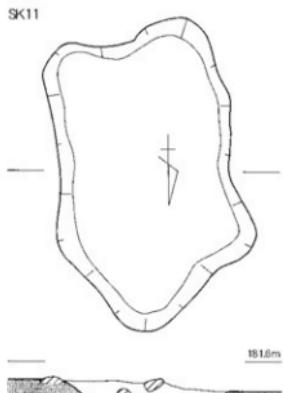
出土遺物 遺物の出土はない。

##### SK12（第37図）

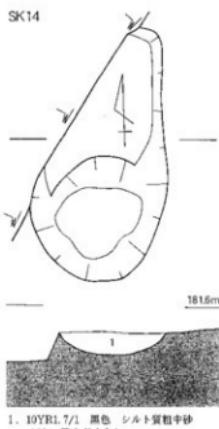
検出状況 3区南部で検出した。



第36図 3区平面図



0 1m



1. 10YR1.7/1 黒色 シルト質粗中砂  
 $\phi 10\text{cm}$ 礫を多く含む

第37図 SK11・12・13・14・15

**規模・形態** 平面形は円形を呈し、直径80cm、検出面からの深さ20cmを測る。横断面は台形を成し、土坑底部はほぼ水平である。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

**SK13（第37図）**

**検出状況** 3区南部西壁際で検出した。土坑の西側部分は調査区外となる。

**規模・形態** 平面形は楕円形と考えられるが、土坑の一部は調査区外となるため全容は不明である。検出した長さ2.94m、幅1.5m、深さ最大24cmを測る。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

**SK14（第37図）**

**検出状況** 3区南部西壁際で検出した。土坑の西側部分は調査区外となる。

**規模・形態** 平面形は長楕円形と考えられる。長径1.6m、短径83cm、検出面からの深さ14cmを測る。土坑南部は一段深く掘られている。

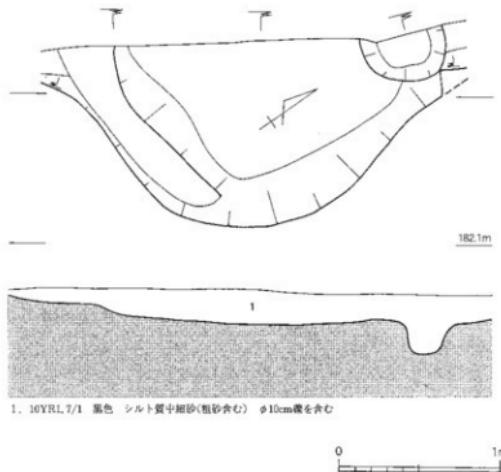
**出土遺物** 遺物の出土はない。

**SK15（第37図）**

**検出状況** 3区南部東壁際で検出した。土坑の東側部分は調査区外となる。

**規模・形態** 平面形は楕円形と考えられるが、土坑の一部は調査区外となるため全容は不明である。

**出土遺物** 遺物の出土はない。



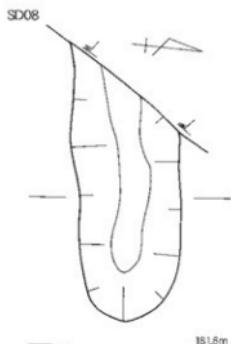
第38図 SK17

### SK16（第36図）

**検出状況** 3区北部東壁際で検出した。土坑の西側部分は調査区外となる。

**規模・形態** 平面形は長椭円形と考えられるが、土坑の一部は調査区外となるため全容は不明である。検出した長径2m、短径70cmを測る。

**出土遺物** 遺物の出土はない。



### SD09



1. 10YR1.5/1 黒色 シルト質粗中砂  
φ 5~10cmの礫を多く含む 小礫を多く含む

### SK17（第38図）

**検出状況** 3区北部東壁際で検出した。土坑に西側部分は調査区外となる。

**規模・形態** 平面形は長椭円形と考えられる。検出し

た長さ2.5m、幅2.3m、検出面からの深さ最大20cmを測る。土坑南部は柱穴に切られている。

**出土遺物** 土器小片が出土している。



第39図 SD08・09

## 2. 溝

### SD08（第39図）

**検出状況** 3区南部西壁際で検出した。SD09と平行する。溝西部は調査区外へと伸びる。

**規模・形態** 検出した長さ2m、幅80cm、深さ最大35センチを測る。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

### SD09（第39図）

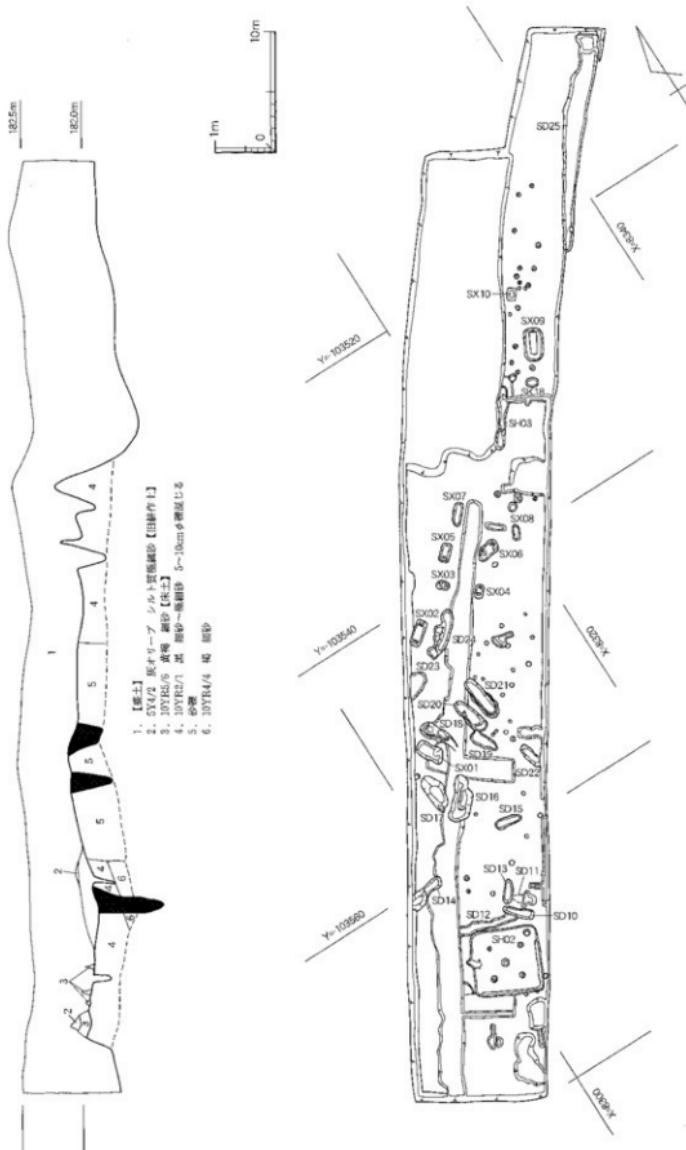
**検出状況** 3区南部で検出した。SD08と平行する。途中攪乱で削平を受けているが、調査区を東西に通る。

**規模・形態** 検出した長さ10.5m、幅最大1.2m、深さ最大18cmを測る。東西に直線に伸びる。

**出土遺物** 土器小片が出土している。

## 第4節 4区の遺構・遺物

4区は北端の調査区あたり、幅11m、長さ88mをはかり、今回の調査区の中で1番大きな調査区となる。検出した遺構は竪穴住居2棟、土坑1基、溝16条、木棺墓・土坑墓10基、柱穴である。



第40図 4区平面図

## 1. 坑穴住居

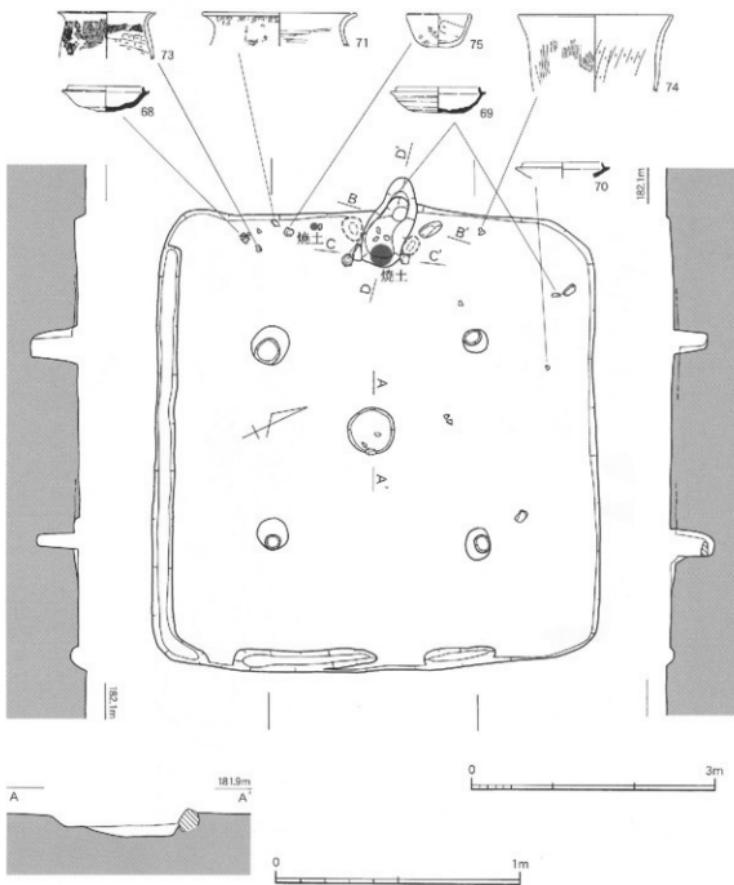
SH02 (第41、42図、写真図版 6、7)

### 検出状況

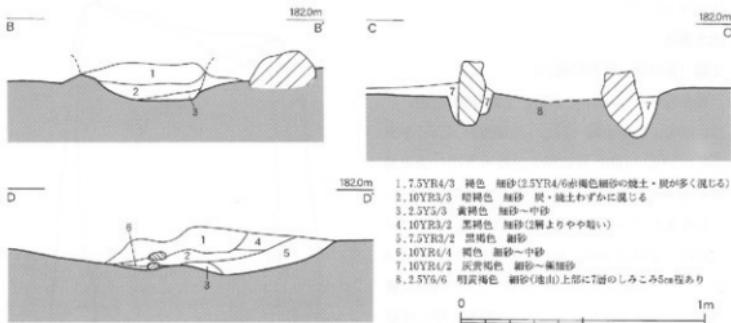
4区中央で検出した。住居の残りは浅いが、周壁溝、カマド、柱穴を検出できた。住居西側のカマドを中心によつて土器が出土している。住居内から弥生土器(72)が出土しているが混入である。

### 規模・形態

平面形は隅丸方形を呈し、一辺は5.5mを測る。検出面から床面までは、最大10cmの深さを測る。住居の中央部分、主柱穴に囲まれた範囲を中心に張り床となっており、その厚さは10cm前後である。



第41図 SH02



第42図 SH02カマド

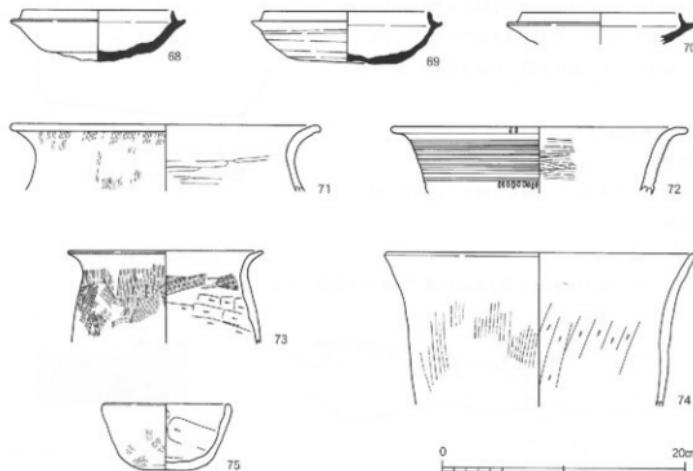
屋内施設 カマド、周壁溝、主柱穴、土坑からなる。

カマド 住居西辺中央で検出した。煙道部分を屋外へ伸ばし、両袖には川原石を据えている。検出した長さ1.1m、焚き口の幅は60cmを測る。

周壁溝 住居の南辺及び東辺の一部に検出した。幅約25cm、深さ約10cmを測り、東辺の周壁溝は浅くなる。北辺、西辺では周壁溝を検出していない。

主柱穴 住居床面で4本検出した。柱穴の直径は20~30cm、深さは約30cmである。北東の柱穴底には柱の沈下を防ぐ石が入れられている。

土坑 住居中央に直径55cm、深さ15cmの円形土坑がある。土坑内からは炭や焼土など出土しておらず、



第43図 SH02出土土器

用途は不明である。

#### 出土遺物

##### 土器（第43図、写真図版24）

須恵器壺身（68）～（70）、土師器壺（71）、（73）、（74）、弥生土器（72）、土師器壺（75）が出土している。（68）は底部を回転ヘラ切り後未調整である。口径は12.3cm。（69）は底部を回転ヘラ切り後にナデ調整を施す。口径は13.4cm。（70）は底部の調整は不明である。復元した口径は12.8cm。（71）は体部外面に縦方向のハケ、内面に横方向のヘラナデを行なう。（72）は肩部上部に沈線と刺突文を施し、口縁端部には刻み目を施す。体部外面はナデ、内面は横方向のハケで調整を行う。（73）は、体部外面にハケ、内面はヘラケズリを行い、口縁部近くはハケを施す。（74）は緩やかに屈曲する口縁を持つ。体部外面にはハケ、内面にはヘラケズリを口縁部近くまで施す。（75）は体部外面にハケ、内面に板ナデ、ナデを施す。

##### 石器（第44図、写真図版29）

砥石（S31）が出土している。直方体状を呈する砥石で、端面以外の4面のうち、最も使用の著しい1面は緩やかな凹面、2面は平坦、1面は凸面を成す。凹面以外の3面の使用の有無は風化によってわかりにくいが、使用されていたとしてもごく軽微である。凝灰岩質の石材と思われる。

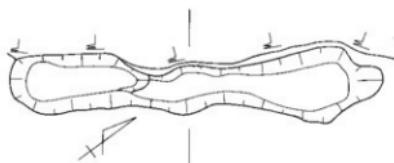
##### SH03（第45図）

#### 検出状況

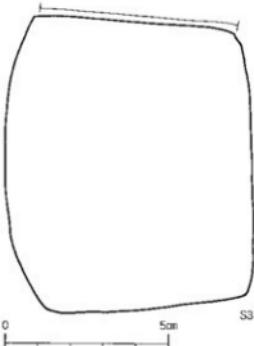
4区北部で検出した。擾乱に接して、溝状の遺構が検出された。

#### 規模・形態

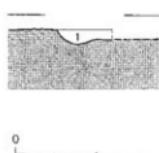
長さ4.6m、幅40～90cm、深さ20cmの溝で南半が1段深くなる。



第45図 SH03



第44図 SH02出土石器



堅穴住居の周壁溝と考えたが、溝状遺構とした方が妥当か。

#### 出土遺物（第46図、写真図版24）

弥生土器甕（76）が出土した。（76）は体部外面にタキを行った後、縦方向のハケ調整を施す。内面はヘラケズリを行う。口縁部端部に凹線を1条入れる。

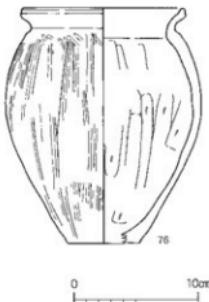
### 2. 土坑

#### SK18（第47図、写真図版10）

検出状況 4区北部で検出した。SX09の南側に位置する。

規模・形態 平面形は橢円形を呈し、長径1m、短径70cm、検出面からの深さ12cmを測る。

出土遺物 遺物の出土はない。



第46図 SH03出土土器

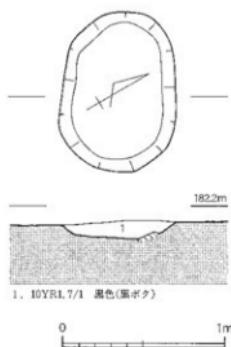
### 3. 溝

#### SD10（第48図、写真図版12）

検出状況 4区南部で検出した。SD12を切る。

規模・形態 検出した長さ2.56m、幅最大76cm、深さ最大30cmを測る。北西から南東へ直線に伸びる。

出土遺物 土器小片が出土している。



第47図 SK18

#### SD11（第48図）

検出状況 4区南部で検出した。溝の大部分は擾乱による削平をうける。

規模・形態 検出した長さ1.95m、幅1.3m、深さ最大45cmを測る。埋土から、溝の東側から埋まっていたことがわかる。

出土遺物 遺物の出土はない。

#### SD12（第40図）

検出状況 4区南部で検出した。溝西部は擾乱により削平を受ける。SD10に切られる。

規模・形態 検出した長さ5m、幅最大80cmを測る。ほぼ東西に直線に伸びる。

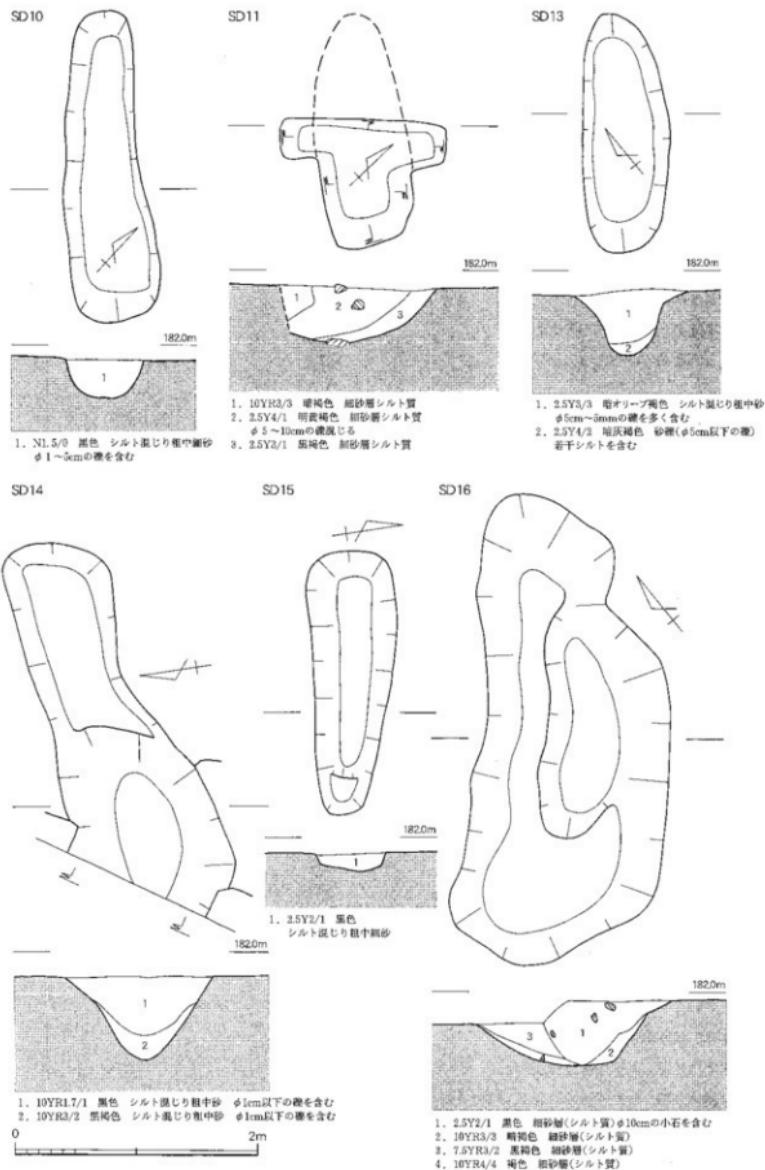
出土遺物 遺物の出土はない。

#### SD13（第48図）

検出状況 4区南部で検出した。

規模・形態 検出した長さ2m、幅最大70cm、深さ最大55cmを測る。

出土遺物 遺物の出土はない。



第48図 SD10・11・13・14・15・16

SD14 (第48図、写真図版12)

検出状況 4区南部西壁際で検出した。溝西部は調査区外へと伸び、東部は擾乱により削平される。

規模・形態 検出した長さ3m、幅最大1.2m、深さ最大70cmを測る。西壁際で幅が広くなる。

出土遺物 (第50図、写真図版25) 弥生土器甕(77)、壺(78)が出土した。(77)は口縁部が短く水平に曲がる。体部外面にはハケ、内面には板ナデを施す。(78)は3条の突帯を貼り付け、その一つには刻み目をつける。

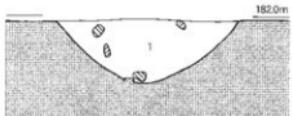
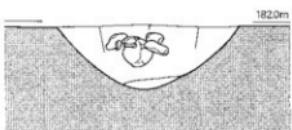
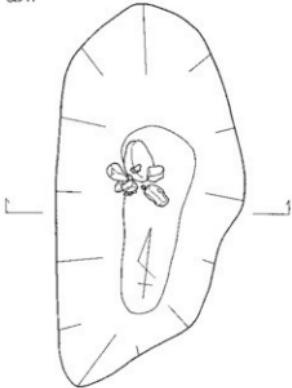
SD15 (第48図)

検出状況 4区南部で検出した。

規模・形態 検出した長さ2.2m、幅最大70cm、深さ最大15cmを測る。幅は東へ行くに従い細くなる。

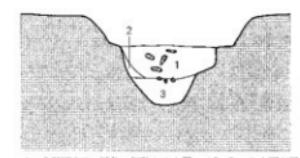
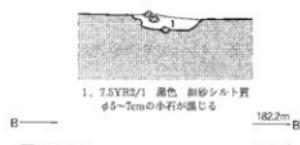
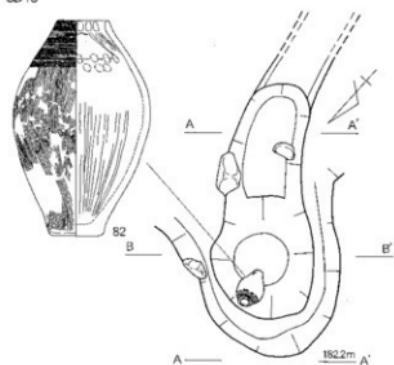
出土遺物 遺物の出土はない。

SD17



1. N1.5/0 黒色 シルト混じり粘土細砂 多10cm以下の中塊を含む

SD18



1. 7.5YR2/1 黒色 粘砂シルト質  
φ5~7cmの小石が混じる  
2. 10YR3/3 茶褐色 粘砂シルト質  
3. 10YR4/1 咖啡色 粘砂一中砂層シルト質  
φ3~5cmの小石上跡に残じる



第49図 SD17・18

#### SD16（第48図、写真図版12）

検出状況 4区南部で検出した。溝は部分的に搅乱で削平を受ける。

規模・形態 検出した長さ3.9m、幅最大1.6m、深さ最大53cmを測る。北東から南西へ直線に伸びる。溝は埋没した後に再び掘削が行われている。

出土遺物 土器小片が出土している。

#### SD17（第49図、写真図版12）

検出状況 4区南部で検出した。溝は部分的に搅乱で削平を受ける。

規模・形態 検出した長さ3.2m、幅最大1.5m、深さ最大52cmを測る。土坑南部は搅乱によって削平される。近接するSD16と一つの溝であった可能性がある。土坑中央に川原石が入れられている。

出土遺物（第50図、写真図版25） 弥生土器壺（79）、底部（80）が出土している。（79）はいわゆる逆L字状口縁の壺である。口縁端部に刻み目を施し、体部外面には沈線、刺突文を入れる。内面はヘラミガキを行う。外面には煤が付着している。（80）は壺の底部と考えられる。外面は縱方向のハケ、内面は横方向のハケを施す。

#### SD18（第49図、写真図版13）

検出状況 4区中央部で検出した。溝南部は搅乱で削平を受ける。

規模・形態 検出した長さ2.2m、幅1m前後、深さ最大70cmを測る。溝は北部が一段深くなり、（82）が置かれていた。

出土遺物（第50図、写真図版25、26） 弥生土器鉢（81）、直口壺（82）、底部（83）が出土している。（81）は緩やかに屈曲した口縁部を持ち、端部には刻み目を入れる。磨耗が激しく調整は不明である。（82）は体部外面にハケを施し、口縁部から肩部に直線文、波状文と交互に施す文様帶を持つ。体部内面下半部は粗いミガキのような痕跡が残り、口縁部近くにはユビオサエの跡が残る。口縁部端部が打ち欠かれており、意図的に片口状にしている可能性がある。（83）は底部である。体部外面にハケを施す。

#### SD19（第40図）

検出状況 4区中央部で検出した。SD20に切られる。溝北部は搅乱で削平を受ける。

規模・形態 検出した長さ2.4m、幅最大1mを測る。

出土遺物 遺物の出土はない。

#### SD20（第51図、写真図版14）

検出状況 4区中央部で検出した。SD19を切る。SD21と平行する。

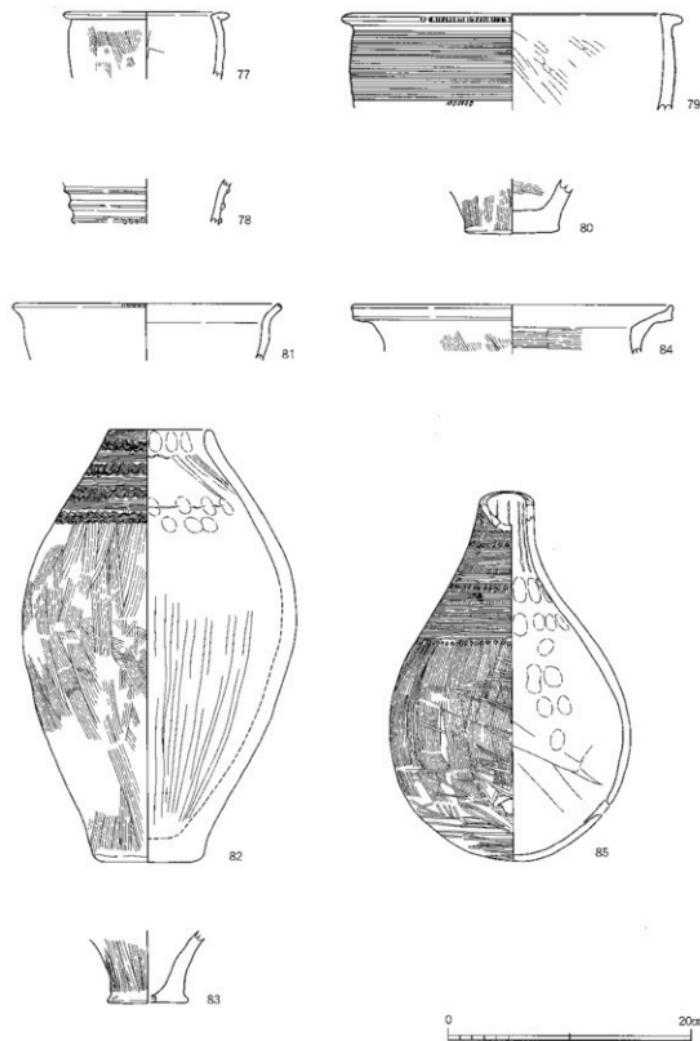
規模・形態 検出した長さ3.3m、幅最大1.2m、深さ最大34cmを測る。溝の底は平らに掘られ、中央部に壺（85）が傾いた状態で置かれていた。

出土遺物（第50図、写真図版25、26） 弥生土器壺（84）、ひさご壺（85）が出土した。（84）は口縁部小片である。外面にはハケ、内面には板ナデを施す。（85）は丸底で口縁部がまっすぐ立ち上がる。体部外面はハケの後ヘラミガキを行い、口縁部から肩部にかけて、波状文、竹管文、直線文を施す。体部内面は、ユビオサエとナデで仕上げ、一部に板ナデを行う。口縁部内面には、しぶりの痕跡が残る。焼成後、底部近くに穿孔を1箇所行う。

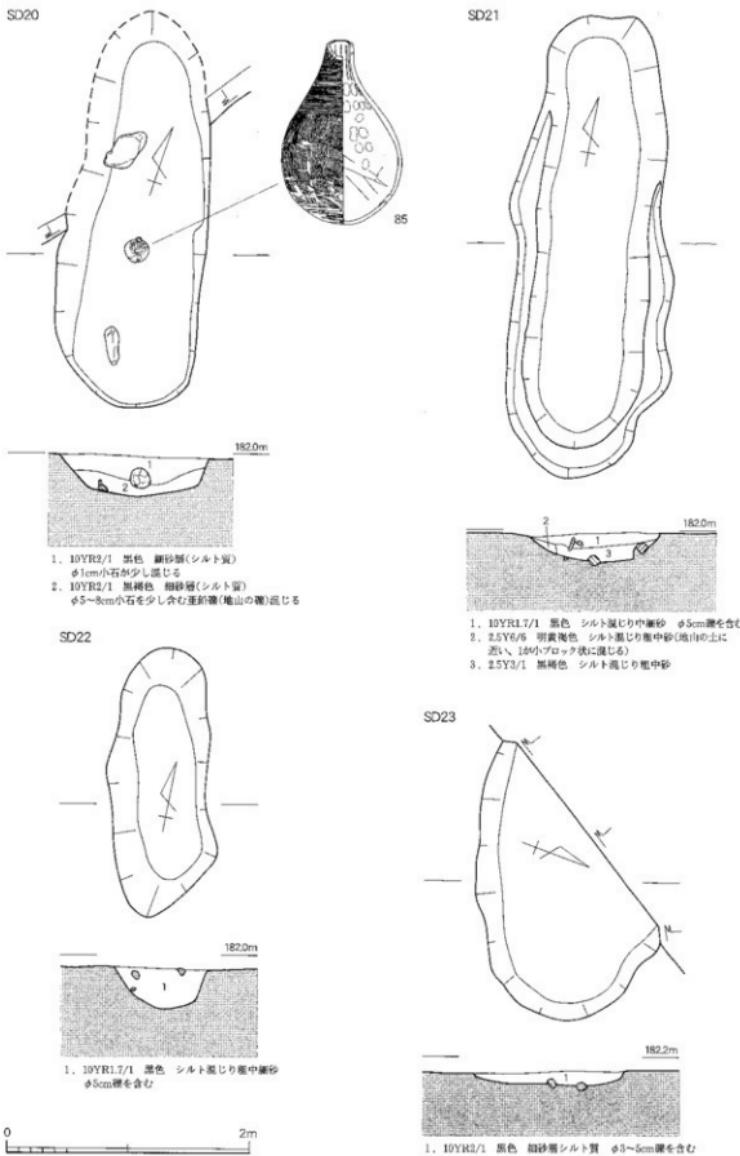
SD21 (第51図)

検出状況 4区中央部で検出した。SD20と平行する。

規模・形態 検出した長さ3.8m、幅最大1.2m、深さ最大25cmを測る。南北に直線的に伸びる溝である。



第50図 SD14・17・18・20出土土器



第51図 SD20・21・22・23

溝の横断面は半円形になり、全体の深さはほぼ一定であるが、南側の裾形はゆるやかな段がつく。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

#### SD22 (第51図、写真図版15)

**検出状況** 4区中央部で検出した。SD21の南側に位置する。規模・形態 検出した長さ2.2m、幅最大85cm、深さ33cmを測る。南北に直線的に伸びる溝である。

**出土遺物** 遺物の出土はない

#### SD23 (第51図)

**検出状況** 4区中央部西壁際で検出した。溝西部は調査区外へ伸びる。

**規模・形態** 検出した長さ2.2m、壁際での幅2.1m、深さ20cmを測る。溝の底は平らに掘られ、全体の深さもほぼ一定である。

**出土遺物 (第52図、写真図版26)** 弥生土器甕 (86)

が出土した。(86)は小型の甕で、体部外面にハケ、内面にナデを施す。

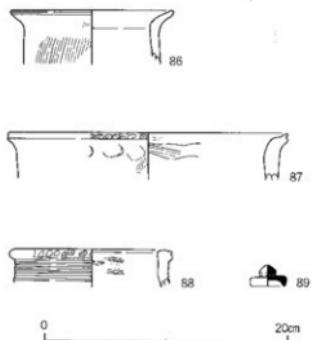
#### SD24 (第53図)

**検出状況** 4区中央部で検出した。SD23の東に位置する。

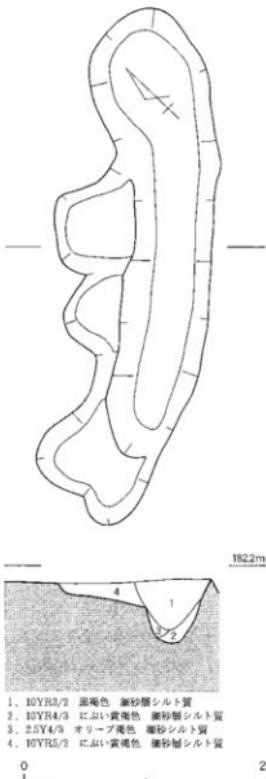
**規模・形態** 検出した長さ4.3m、幅最大1.3m、深さ最大50cmを測る。溝は緩やかな弧を描き、西側部分が一段浅く掘られる。

**出土遺物 (第52図、写真図版26)** 弥生土器甕 (87)

が出土した。(87)は短く外反する口縁部を持ち、端部には刺突文をいれる。体部外面はハケを施すが、口



第52図 SD23・24・25出土土器



第53図 SD24

縁部にはユビオサエの跡が残る。内面はナデで仕上げる。

#### SD25 (第40図)

検出状況 4区北部東壁際で検出した。溝の西側は調査区外となり全容は不明である。

規模・形態 検出した長さ18m、検できた幅1.2m、深さ20~30cmを測る。北東から南西へ直線的に伸びており、底面の高さはほぼ水平である。

出土遺物 (第52図、写真図版26、27) 弥生土器甕(88)、須恵器蓋(89)が出土した。(88)は口縁端部に刺突文をいれる。体部には沈線と突帯が1条廻る。体部内面は横方向のハケで仕上げる。(89)はつまみのついた蓋である。直径2.6cmと小型で短頸壺の蓋かと思われる。時期は8世紀前半であろう。

#### 4. 木棺墓・土坑墓

##### SX01 (第55図、写真図版16)

検出状況 4区南部で検出した。SD18の南側に位置する。

規模・形態 墓坑は長さ2.16m、幅1.12m、深さ34cmを測る。墓坑断面は台形を呈し、底は水平である。南東隅が若干深くなる。棺の痕跡は確認できなかった。

出土遺物 遺物の出土はない。

##### SX02 (第55図、写真図版16)

検出状況 4区中央部西壁際で検出した。SD24の西に位置する。

規模・形態 墓坑は長さ2.4m、幅98cm、深さ40cmを測る。墓坑横断面は台形を呈し、底は水平である。墓坑床面の短辺部が20cmほど深く掘られており小口穴と考えられる。土層断面の観察から木棺の痕跡が確認できた。検出した木棺痕跡は幅36~46cm、長さ150~164cm、深さ36cm程度である。

出土遺物 (第54図、写真図版27) 鉢(90)が出土した。体部内面にヘラミガキを施す。

##### SX03 (第56図、写真図版17)

検出状況 4区中央部で検出した。

規模・形態 墓坑は長さ96cm、幅66cm、深さ28cmを測る。墓坑横断面は台形を呈し、底は水平である。

墓坑床面の短辺部には溝があり、小口穴と考えられるが

棺の痕跡は確認できなかった。

出土遺物 遺物の出土はない。



90

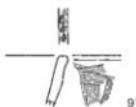
##### SX04 (第56図、写真図版17)

検出状況 4区中央部で検出した。

規模・形態 墓坑は長さ98cm、幅60cm、深さ8cmを測る。

墓坑横断面は皿状を呈し、底は水平である。墓坑床面の短辺部には溝があり、小口穴と考えられるが棺の痕跡は確認できなかった。

出土遺物 土器小片が出土している。

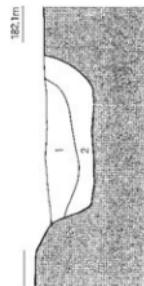
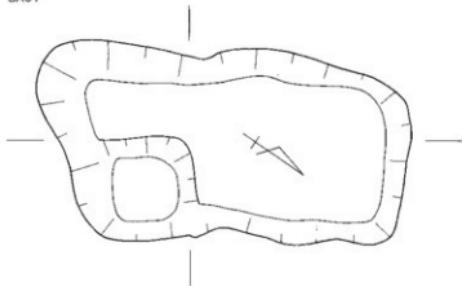


91

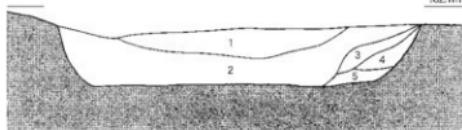


第54図 SX02・09出土土器

SX01

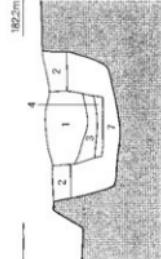
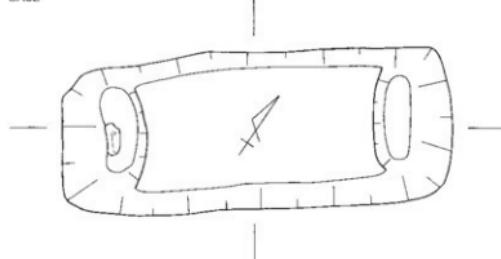


182.1m

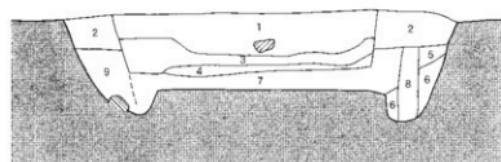


1. 7.5YR2/1 黒褐色 細砂層シルト質  
2. 7.5YR2/2 黒褐色 細砂～中砂層シルト質  
3. 7.5YR2/3 塔褐色 中砂シルト質  
4. 10YR4/4 褐色 牛膝層シルト質  
5. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 中砂層

SX02



182.2m

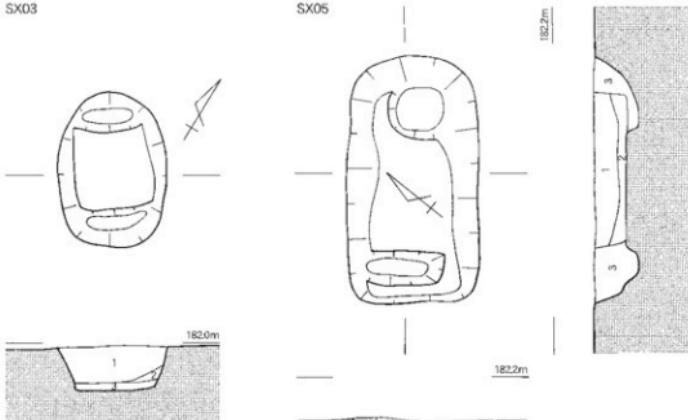


1. 7.5YR3/1 黒褐色 細砂層シルト質  
2. 5YR2/1 黒褐色 細砂シルト質  
3. 2.5Y2/1 赤褐色 相砂～中砂層シルト質  
4. 5YR2/1 黒褐色 細砂層シルト質  
5. 7.5YR3/1 黒褐色 地山の黄褐色細砂が粉状に混じる  
6. 7.5YR3/1 黒褐色 地山の黄褐色細砂が粉状に混じる  
7. 7.5YR3/1 黒褐色  
8. 7.5YR3/1 黒褐色 地山の黄褐色細砂が粉状に混じる



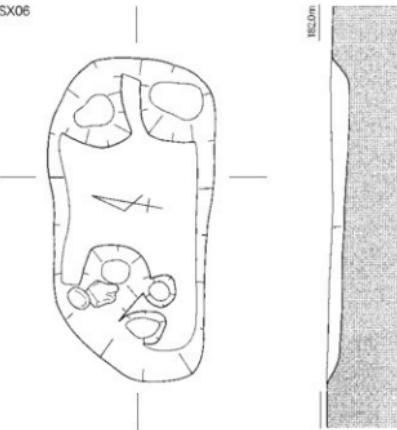
第55図 SX01・02

SX03



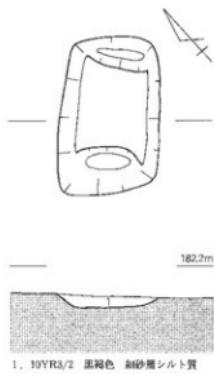
1. 10YR2/1 黒色 細砂層シルト  
φ2~3mm小石混じる
2. 10YR2/1 黒褐色 細砂層シルト
3. 2.5Y1/3 オリーブ褐色 細砂層シルト  
(2層に地山黄砂が混じりあった上)

SX05



1. 10YR3/2 深緑色 細砂層シルト質  
φ2~4mmの小石が混じる
2. 7.5YR3/3 地褐色 細砂層
3. 10YR4/3 に近い黄褐色 細砂層

SX04



第56図 SX03・04・05・06

#### SX05 (第56図、写真図版17)

**検出状況** 4区中央部で検出した。

**規模・形態** 墓坑は長さ1.54m、幅80cm、深さ20cmを測る。墓坑横断面は台形を呈し、底は水平である。墓坑床面の短辺部が8cmほど深く掘られており小口穴と考えられる。土層断面の観察から木棺の痕跡が確認できた。検出した木棺痕跡は幅46cm、長さ92~97cm、深さ20cm程度である。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

#### SX06 (第56図)

**検出状況** 4区中央部で検出した。

**規模・形態** 墓坑は長さ2m、幅1.02m、深さ8cmを測る。墓坑横断面は皿状を呈し、底は水平である。削平がひどく、棺の痕跡は確認できなかった。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

#### SX07 (第57図、写真図版17)

**検出状況** 4区中央部で検出した。

**規模・形態** 墓坑は長さ1.84m、幅56cm、深さ14cmを測る。墓坑横断面は台形を呈し、底は水平である。土層断面の観察から木棺の痕跡が確認できたが平面では検出しえなかった。検出した木棺痕跡は幅38cm、長さ1.3m以上、深さ14cm程度である。墓坑床面に小口穴を確認できなかったため、木棺は底板に小口板を立てるタイプであったと考えられる。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

#### SX08 (第57図)

**検出状況** 4区中央部で検出した。

**規模・形態** 墓坑は長さ1.2m、幅50cm、深さ10cmを測る。墓坑横断面は皿状を呈し、底は水平である。墓坑床面の短辺部には溝があり、小口穴と考えられるが棺の痕跡は確認できなかった。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

#### SX09 (第58図、写真図版18)

**検出状況** 4区北部で検出した。墓坑を検出した面で木棺の痕跡も検出した。

**規模・形態** 墓坑は長さ2.6m、幅1.4m、深さ30cm前後を測る。墓坑横断面は台形状を呈し、底は若干北側が下がる。検出した木棺痕跡は平面で長さ1.84m、北小口幅48cm、南小口幅40cm、横断面での深さ26cmを測る。墓坑床面の短辺部には小口穴が掘られ、北小口で長さ78cm、幅18cm、深さ10cm、南小口で長さ70cm、幅28cm、深さ10cmを測る。小口穴周辺からは多数の小石を検出した。

**出土遺物** (第54図、写真図版27) 鉢(91)が出土した。(91)は口縁端部に刻み目を入れ、体部外側はハケで仕上げる。

#### SX10 (第57図、写真図版18)

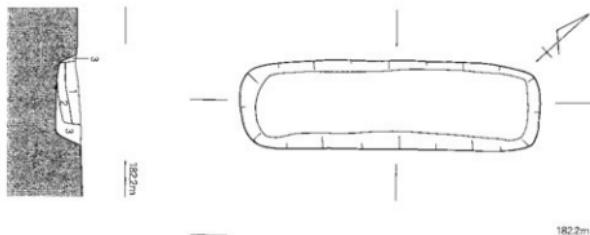
**検出状況** 4区北部で検出した。

**規模・形態** 墓坑は長さ1.03m、幅67cm、深さ22cmを測る。墓坑横断面は台形を呈し、底は水平である。

土層断面の観察から木棺の痕跡が確認できたが、平面では検出しえなかった。検出した木棺痕跡は幅30~42cm、長さ62cm、深さ22cm程度である。墓坑床面の短辺部には小口穴が掘られ、両小口とも長さ40cm、幅14cmを測る。深さは北小口で6cm、南小口で10cmである。小口穴周辺には石が多く入れられており、小口板を保持するために埋められたと考えられる。

**出土遺物** 遺物の出土はない。

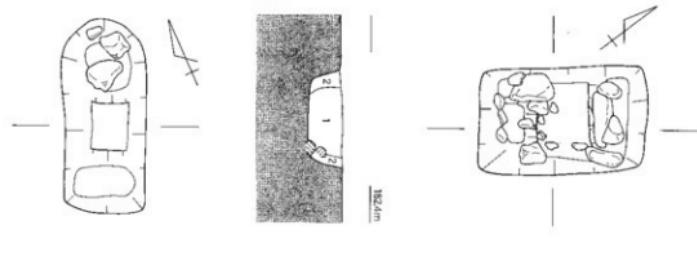
SX07



トレンチ



SX10

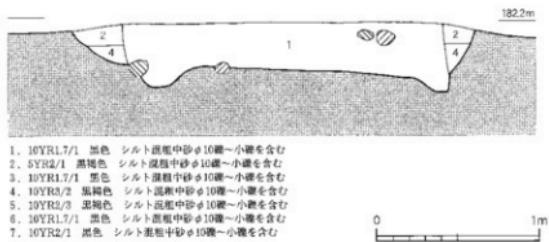
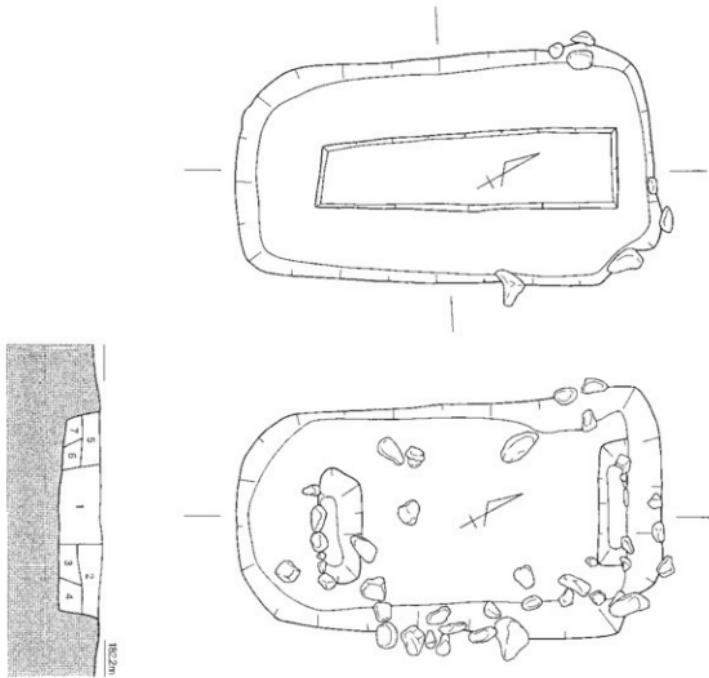


1. 10YR2/1 黒色 シルト質細砂

1. 10YR2/1 黒色 シルト混じ中砂  $\phi$  10~20mmの礫を含む  
2. 10YR3/1 黒褐色 シルト混じ中砂  $\phi$  10~20mmの礫を含む  
(地山の黄褐色土をブロック状に含む)



第57図 SX07・08・10



第58図 SX09

### 出土鉄器（第59図、写真図版27）

1区～4区の包含層から鉄器が出土している。出土した鉄器は、釘（M1、M2）、錐（M4）、不明鉄器（M3）である。

M1は1区で出土した。断面が四角形の鉄釘であり、両端が欠ける。残存する長さ4.9cm、厚さ0.95cm、幅0.85cmを測る。

M2は1区で出土した。断面が四角形の鉄釘である。先端部分の小片であるが、先端は欠ける。残存する長さ2.2cm、厚さ0.35cm、幅0.4cmを測る。

M3は2区で出土した。用途不明の鉄器であるが、何かの工具の一部だと考えられる。横から見た形が数字の「9」に似ており、頭部は円形で真っ直ぐに伸びた先端部分が細くなる。長さ4.9cm、厚さ1cmを測り、頭部の直径は約2cmである。頭部の中央には直径約1cmの孔があり、木質の棒が刺さっている。棒の両端は欠けている。

M4は3区で出土した。上部に握りがある四方錐である。残存する長さ4.65cm、最大幅0.75cmを測る。残存する握りの部分は長さ1cmを測り、錐の先端部分は欠けている。



第59図 出土鉄器

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薰・小林鉄一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani

#### 1.はじめに

兵庫県佐用郡佐用町に所在する上三河遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第8表のことおりである。試料は土壌2点である。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、曆年代を算出した。

第8表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-9623	調査区：1区 試料No.：A	試料の種類：土壌 状態：dry	湿式篩分 106 μm 酸洗浄（塩酸：1.2N） サルフィックス
PLD-9624	調査区：1区 試料No.：B	試料の種類：土壌 状態：dry	湿式篩分 106 μm 酸洗浄（塩酸：1.2N） サルフィックス

（試料の採取位置は第64図を参照）

#### 3. 結果

第9表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ<sup>13</sup>C）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代範囲を、図60に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

## 暦年較正

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年年代範囲は95.4%信頼限界の暦年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

第9表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

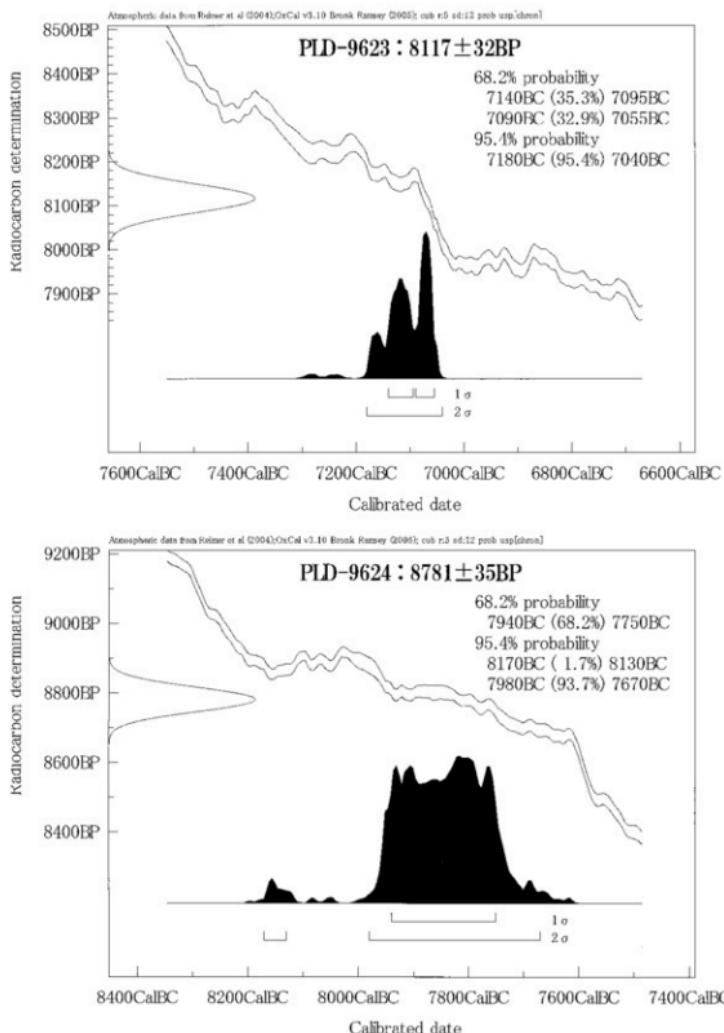
測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年年代範囲	$2\sigma$ 暦年年代範囲
PLD-9623 試料No. : A	-24.67 $\pm$ 0.20	8117 $\pm$ 32	8115 $\pm$ 30	7140BC(35.3%)7095BC 7090BC(32.9%)7055BC	7180BC(95.4%)7040BC
PLD-9624 試料No. : B	-24.92 $\pm$ 0.24	8781 $\pm$ 35	8780 $\pm$ 35	7940BC(68.2%)7750BC	8170BC(1.7%)8130BC 7980BC(93.7%)7670BC

## 4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

## 参考文献

- Bronk Ramsey, C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 2000 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代. 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmeli, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第60図 历年較正結果

## 第2節 上三河遺跡における自然科学分析

株式会社古環境研究所

### I. 花粉分析

#### 1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

#### 2. 試料

分析試料は、2区の西壁・黒ボク（B-①）から採取された試料1、東壁・A-①から採取された試料2、西壁・黒ボクB-②から採取された試料3、東壁・黒ボク（A-②）から採取された試料4の計4点である。

#### 3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5% リン酸三ナトリウム(12水) 溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・孔層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

#### 4. 結果

##### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉9、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉8、シダ植物胞子2形態の計23である。これらの学名と和名および粒数を第10表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図61に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるとため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真

に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亞属、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クリ、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アガシ亞属、ニレ属—ケヤキ、サンショウ属、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属—ガマズミ属

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、セリ亞科、タンボボ亞科、キク亞科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

2 区の黒ボク層の 4 試料は、いずれも花粉密度は低い。

1) 西壁 黒ボク (B-①)・試料 1

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、ヨモギ属とイネ科が高率に出現し、タンボボ亞科、キク亞科、アカザ科—ヒユ科、セリ亞科などが出現する。樹木花粉では、トチノキ、コナラ属アガシ亞属、クリ、コナラ属コナラ亞属などが低率に出現する。

2) 東壁 A-①・試料 2

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、ヨモギ属とイネ科が高率に出現し、キク亞科。タンボボ亞科、アカザ科—ヒユ科などが出現する。樹木花粉では、トチノキ、クリ、コナラ属コナラ亞属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科などが低率に出現する。樹木花粉と草本花粉を含むマメ科、クワ科—イラクサ科が低率に出現する。

3) 西壁 黒ボク B-②・試料 3

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、ヨモギ属とイネ科が高率に出現し、タンボボ亞科、キク亞科などが出現する。樹木花粉では、トチノキ、クリ、コナラ属コナラ亞属などが低率に出現する。樹木花粉と草本花粉を含むマメ科などが低率に出現する。

4) 東壁 黒ボク (A-②)・試料 4

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科とヨモギ属が高率に出現し、タンボボ亞科、カヤツリグサ科、キク亞科、セリ亞科などが出現する。樹木花粉では、トチノキ、クリ、コナラ属コナラ亞属が低率に出現する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

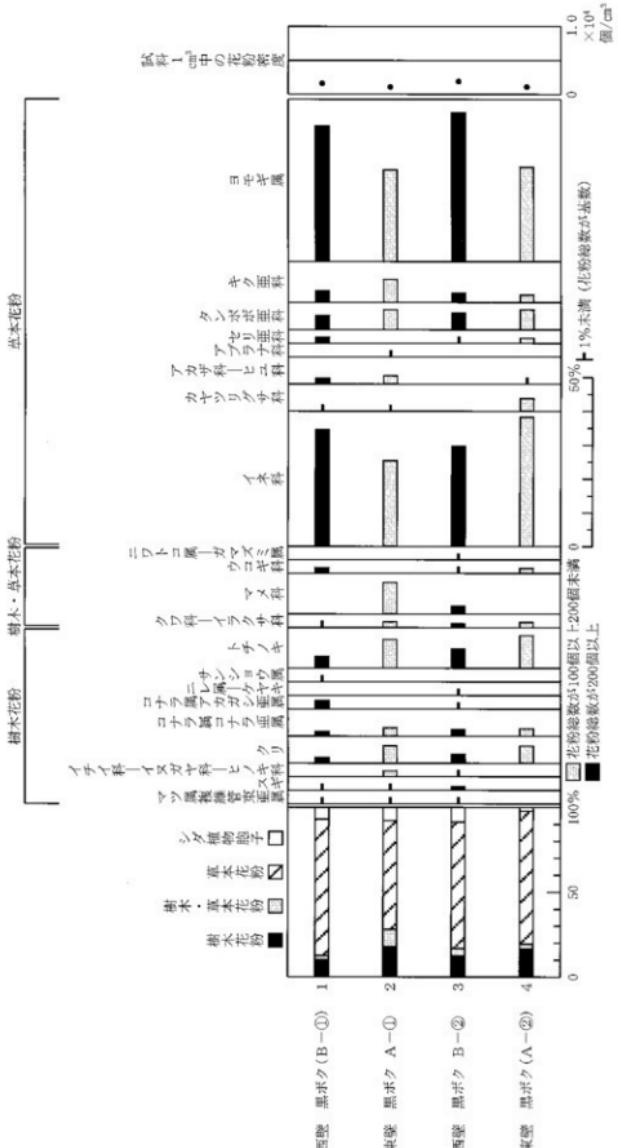
2 区の黒ボク層の 4 試料は、いずれも花粉密度は低く、草本花粉の占める割合が高く類似した花粉群集を示す。乾燥を好むヨモギ属とイネ科が優占し、ススキ原などの乾燥した草原の花粉組成を示す。他に出現した草本花粉もキク亞科やタンボボ亞科、アカザ科—ヒユ科の乾燥を好む人里雑草、耕地雑草の性格を持つものばかりであり、堆積地周辺は日当たりのよい乾燥した開地が分布していたと考えられる。近隣の比較的乾燥したところにクリ、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アガシ亞属が生育し、近隣の谷沿いや河川沿いにトチノキなどが生育していたと考えられる。

## 参考文献

- 金原正明 1993 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法. 角川書店. p.248-262.
- 島倉巳三郎 1973 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集. 60p.
- 中村純 1973 花粉分析. 古今書院. p.82-110.
- 中村純 1974 イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究. 13, p.187-193.
- 中村純 1977 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学. 第10号. p.21-30.
- 中村純 1980 日本産花粉の標識. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集. 91p.

第10表 2区における花粉分析結果

学名	和名	西壁 東壁 西壁 東壁			
		黒ボク (B-①)	A-①	黒ボク (B-②)	A-②
		1	2	3	4
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Pinus subgen. Diploxyylon</i>	マツ属複維管束亞属	1	1	1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2	1	3	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		2	1	
<i>Castanea crenata</i>	クリ	4	6	7	7
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	3	3	5	3
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	6		2	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ			2	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属	2			
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	8	10	15	13
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	2	2	3	2
Leguminosae	マメ科			11	6
Araliaceae	ウコギ科	4		1	2
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属			2	
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科	82	30	78	52
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2	1		5
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	4	3		1
Cruciferae	アブラナ科			1	
Apioidae	セリ亞科	4		1	2
Lactucoideae	タンポポ亜科	10	7	13	8
Asteroidae	キク亜科	8	8	7	3
Artemisia	ヨモギ属	95	32	116	38
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	單条溝胞子	9	6	6	3
Trilate type spore	三条溝胞子	9	4	19	
Arboreal pollen	樹木花粉	26	23	36	23
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	6	13	12	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	205	82	215	109
Total pollen	花粉総数	237	118	263	136
Pollen frequencies of 1cm <sup>2</sup>	試料1cm <sup>2</sup> 中の花粉密度	1.6	1.1	1.9	1.1
		×10 <sup>3</sup>	×10 <sup>3</sup>	×10 <sup>3</sup>	×10 <sup>3</sup>
Unknown pollen	未同定花粉	12	7	14	2
Fern spore	シダ植物胞子	18	10	25	3
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(++)	(++)	(++)	(+++)



第61図 2区における花粉ダイアグラム

## II. 炭化種実同定

### 1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

### 2. 試料

試料は、上三河遺跡（弥生時代中期後半）から検出された遺構SX09南北の1点ずつと、SH01（上層1点、4区1点、1区下層1点、2区下層2点、3区下層2点、4区下層4点）<sup>(1)</sup>の計13点である。すべて水洗選別済みである。

### 3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

### 4. 結果

#### （1）分類群

樹木2、草本3の計5分類群が同定される。学名、和名および粒数を第11表に、100個を超えたSH01・2区下層、3区下層のイネを50個ずつ計測し、第12表に計測表、第13表に粒形とその大きさを示した。主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。

##### 〔樹木〕

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核（破片） クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。

モモ *Prunus persica* Batsch 核（破片） バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

##### 〔草本〕

イネ *Oryza sativa* L. 炭化果実（完形・破片） イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には數本の筋が走る。破片もみられた。

オオムギ *Hordeum vulgare* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。

側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

ササゲ属 *Vigna* 子葉（完形・半形・破片） マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、へその形態からアズキないしリョクトウと考えられる。

#### （2）種実群集の特徴

- SX09
  - 1) 北  
同定されなかった。
  - 2) 南  
同定されなかった。
- SH01
  - 1) 上層  
オニグルミ 3、モモ 8 が同定された。
  - 2) 4 区上層  
モモ 1、イネ 6 が同定された。
  - 3) 1 区下層  
同定されなかった。
  - 4) 2 区下層  
モモ 5、イネ 108、ササゲ属 6 が同定された。  
イネを 50 個計測したところ、粒大（長さ mm × 幅 mm）の最大値は 5.3mm × 3.3mm、最小値は 3.5mm × 2.1mm、平均値は 4.5mm × 2.6mm で、佐藤敏也（1988）より粒形とその大きさは短粒の極小が多かった。
  - 5) 3 区下層  
モモ 4、イネ 183、オオムギ 1、ササゲ属 6 が同定された。  
イネを 50 個計測したところ、粒大（長さ mm × 幅 mm）の最大値は 5.1mm × 3.1mm、最小値は 4.0mm × 2.0mm、平均値は 4.5mm × 2.6mm で、佐藤敏也（1988）より粒形とその大きさは短粒の極小から小が多かった。
  - 6) 4 区下層  
オニグルミ 22、モモ 3、イネ 79、ササゲ属 1 が同定された。

## 5. 種実同定から推定される植生と農耕

種実の同定された 2 区の弥生時代中期後半の SH01 では、多いものから、イネ、オニグルミ、モモ、ササゲ属、オオムギであった。イネ（炭化米）は比較的多く、短粒の極小から小が多く、佐藤（1988）に示される弥生時代では普通の形態のものである。オニグルミは野生のものを採取し、モモ、ササゲ属、オオムギは栽培植物であり、モモとササゲ属は弥生時代では比較的よく検出されるが、オオムギの出土は珍しい。

### 【註】

（1）住居跡を南北に 4 分割し、南から 1 区、2 区、3 区、4 区と呼ぶ。

### 参考文献

- 佐藤敏也 1988 弥生のイネ、弥生文化の研究第 2 卷生業、雄山閣出版株式会社、p.97-111.  
吉崎昌一 1992 古代雑穀の検出、月刊考古学ジャーナル No.355、ニューサイエンス社、p.2-14.  
金原正明 1996 古代モモの形態と品種、月刊考古学ジャーナル No.409、ニューサイエンス社、p.15-19.

第11表 炭化種実同定結果

学名	和名	部位	4区			2区			SH01
			北	南	上層	4区上層	1区下層	2区下層	
Arbor	樹木								
<i>Juglans ailanthifolia Carr</i>	カニナル:	核(破片)			3				22
<i>Prunus persica Batsch</i>	モモ	核(破片)			8	1			3
Herb	草本								
<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	果実			6				
<i>Hordeum vulgare L.</i>	オオムギ	果実							
<i>Vigna</i>	ササゲ属	子葉(完形) (半形)							
		(破片)							
Total	合計		0	0	11	7	0	119	105
Unknown	不明種実							2	

第12表 イネ炭化果実計測値

SH01 (2区下層)			SH01 (3区下層)		
試料	長さ (mm)	幅 (mm)	試料	長さ (mm)	幅 (mm)
1	4.2	2.6	1	4.9	3.0
2	4.2	3.1	2	4.5	2.7
3	4.8	2.5	3	4.5	2.7
4	4.6	3.0	4	4.5	3.2
5	4.2	2.5	5	4.8	2.5
6	4.3	2.3	6	4.7	2.2
7	4.4	2.8	7	5.0	2.6
8	3.5	2.7	8	4.2	2.4
9	4.0	2.8	9	4.3	2.6
10	4.5	2.6	10	5.0	2.5
11	4.5	3.0	11	4.6	2.7
12	4.4	2.6	12	4.3	2.8
13	4.4	2.1	13	4.3	2.6
14	5.0	2.6	14	4.1	2.0
15	4.6	2.7	15	4.7	2.5
16	4.5	2.3	16	5.1	2.4
17	4.6	2.4	17	4.5	2.5
18	4.1	2.1	18	4.3	3.0
19	4.5	2.5	19	4.6	2.7
20	4.3	2.6	20	4.6	2.6
21	4.5	2.5	21	4.5	2.6
22	4.5	2.6	22	4.6	2.8
23	4.7	3.3	23	4.5	2.7
24	4.5	2.6	24	4.4	2.5
25	4.3	2.8	25	4.6	2.6
26	4.6	2.7	26	4.0	2.4
27	4.8	2.6	27	4.3	2.7
28	5.3	2.4	28	4.5	2.0
29	4.0	2.1	29	5.0	2.5
30	4.6	2.6	30	4.4	2.5
31	4.5	2.7	31	4.7	2.9
32	4.8	2.2	32	4.3	3.0
33	4.6	2.5	33	4.5	3.0
34	4.5	2.8	34	4.4	2.5
35	4.5	2.5	35	4.3	2.4
36	5.1	3.0	36	4.5	2.7
37	4.6	2.1	37	4.5	2.8
38	4.6	2.5	38	4.6	2.5
39	4.5	2.1	39	4.3	3.0
40	4.3	2.5	40	4.2	2.8
41	4.5	2.6	41	4.7	2.7
42	4.9	2.8	42	4.5	2.4
43	4.4	2.5	43	4.4	2.5
44	4.7	2.5	44	4.4	2.6
45	4.2	2.5	45	4.0	2.8
46	4.5	2.4	46	4.5	2.6
47	4.3	2.6	47	4.0	2.5
48	4.5	3.0	48	4.8	3.1
49	4.1	3.1	49	4.1	2.4
50	4.6	2.6	50	4.7	2.4
最大	5.3	3.3	最大	5.1	3.1
最小	3.5	2.1	最小	4.0	2.0
平均	4.5	2.6	平均	4.5	2.6

第13表 イネの粒形とその大きさ

・SH01 (2区下層)

粒形	粒大	極々小 ~ 8	極小 ~ 12	小 ~ 16	中 ~	合計
長粒 L	2.6-3.0 Ll					0
	2.3-2.6 Lm					0
	2.0-2.3 Ls		4	1		5
短粒 S	1.8-2.0 Sl		10	2		12
	1.6-1.8 Sm		17	6		23
	1.4-1.6 Ss		1	6		7
円粒 R	1.2-1.4 Rl		1	2		3
	1.0-1.2 Rm					0
合計		0	33	17	0	50

・SH01 (3区下層)

粒形	粒大	極々小 ~ 8	極小 ~ 12	小 ~ 16	中 ~	合計
長粒 L	2.6-3.0 Ll					0
	2.3-2.6 Lm					0
	2.0-2.3 Ls		3	1		4
短粒 S	1.8-2.0 Sl		5	3		8
	1.6-1.8 Sm		18	9		27
	1.4-1.6 Ss		4	7		11
円粒 R	1.2-1.4 Rl					0
	1.0-1.2 Rm					0
合計		0	30	20	0	50

\* 計測は表3にそって行う。粒長/粒幅で粒形を表し、粒長×粒幅で粒の大きさを表す。

## 第3節 上三河遺跡の地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

### 1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。なかでも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の発掘調査区では、地形環境と人間生活の関わりについても考察できるのである。

本稿では、上三河遺跡における地形環境について明らかにしたい。調査では、1万分の1空中写真の判読と現地踏査にもとづいて遺跡周辺の地形を分類するとともに、遺跡の各調査区（1区・2区・4区）における堆積物の観察を行った。堆積物については、遺構検出面以浅の地質断面とそこからさらに掘削したトレンチ断面の観察によって把握し、これらの観察を通して微地形の状況も確認した。こうして得られた調査結果に発掘調査の成果を加えて、遺跡における地形環境を考察した。

### 2. 地形の分布と特徴

#### （1）調査区周辺における地形の分布

本遺跡の調査区は千種川の上流部に位置する。ここでは、山地を刻む狭長な谷が千種川に沿って延び、150～250mの谷幅が所々で広がる。谷中には、丘陵がみられず、平野が発達する。調査区周辺の平野<sup>1)</sup>は、標高約350～500mの山地を下刻してきた谷の中に分布し、長さ約2kmにわたって500～600mの幅で開けている。

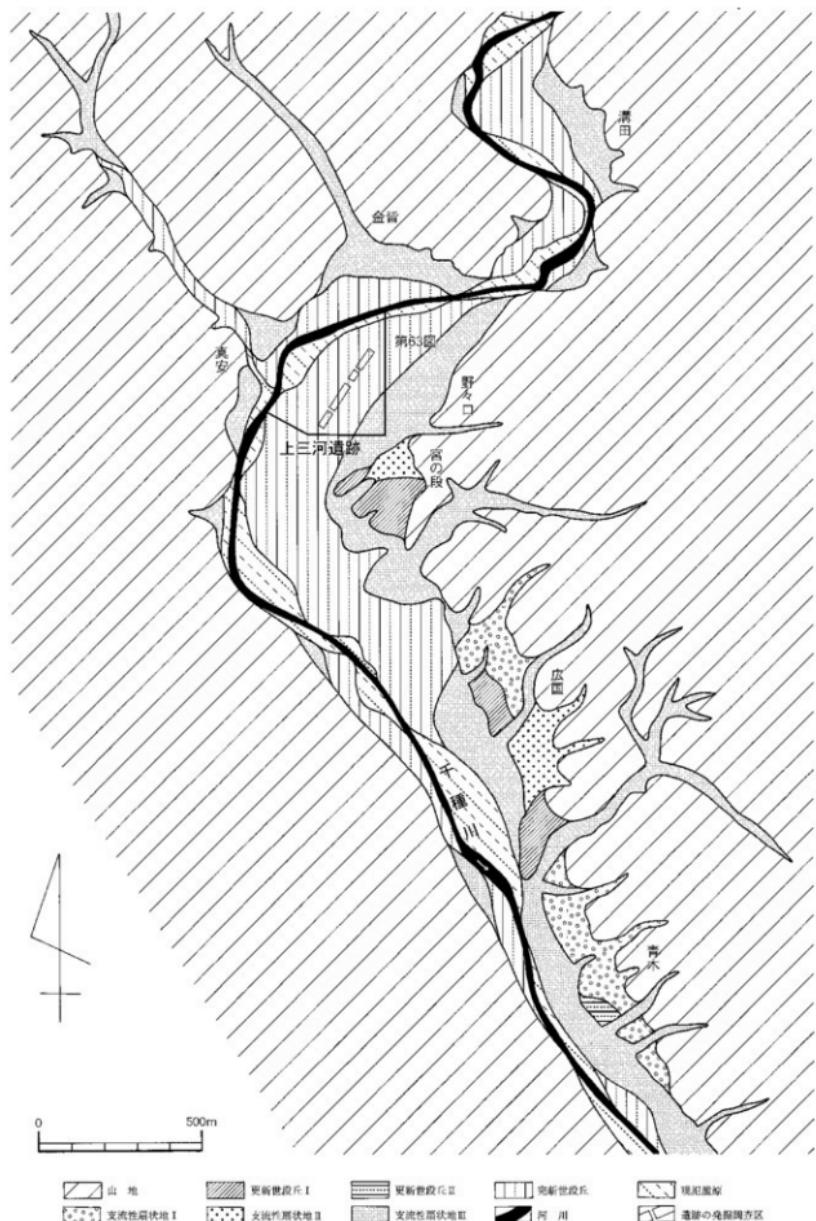
この平野では、2面の更新世段丘、完新世段丘、現氾濫原、および3面の支流性扇状地が認められる（第62図）。本稿では、便宜的に更新世段丘と支流性扇状地を高位のものから更新世段丘Ⅰ・Ⅱ、ならびに支流性扇状地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと呼ぶ。各地形の特徴は次のとおりである。

〔更新世段丘Ⅰ〕 これは、山麓や支流性扇状地Ⅰの前面に分布する。調査区周辺では、面積の小さいものが宮の段や広国付近で断続的に認められる。比高およそ10mの段丘崖をもち、段丘面の開析は比較的激しい。

〔更新世段丘Ⅱ〕 調査区周辺では、この段丘がほとんど発達しておらず、青木付近にわずかに分布するのみである。そこでは、これが支流性扇状地Ⅰの段丘崖下にみられる。支流性扇状地Ⅱは段丘化しており、段丘崖は6m前後の比高をもつ。

〔完新世段丘〕 これは千種川に沿って最もよく発達する段丘である。とくに、平野が開ける調査区近では、その面積が大きい。段丘面は、比較的平坦で、千種川の現河床とほぼ同じ傾斜で下流へ高度を下げる。段丘崖の比高は約2mである。調査区はこの段丘上に位置する。

〔現氾濫原〕 この地形は、最も低平で、千種川沿いに細長く分布する。これは、洪水の及ぶ地形であ



第62図 調査区周辺の地形分類図

り、河川の氾濫時に冠水する危険性が高い。

〔支流性扇状地Ⅰ〕 支流性扇状地<sup>3)</sup>は、山麓に分布し、背後の山地から堆積物が供給されてできた地形である。調査区周辺の支流性扇状地Ⅰは、広国や青木付近の山麓でみられる。これらは、段丘化しており、比高およそ10mの崖をもつ。地表は約11.4%で傾斜し、更新世段丘Iと傾斜変換線で接する。

〔支流性扇状地Ⅱ〕 調査区周辺では、この扇状地がわずかしかみられず、宮の段と広国付近の山麓に存在するのみである。地表傾斜は約14.6%と急で、比高6~7mの段丘崖をもつ。

〔支流性扇状地Ⅲ〕 これは、支流性扇状地のなかで最も発達がよく、溝田、金皆、野々口、宮の段、広国、および青木付近に分布する。この扇状地は、山麓だけでなく、更新世段丘や支流性扇状地Ⅰ・Ⅱの段丘崖下にも認められる。地表傾斜は約7.3%と支流性扇状地のなかで最も緩く、完新世段丘と傾斜変換線で接する。

## (2) 調査区付近の微地形について

調査区は千種川東岸の完新世段丘上に位置する。この付近では、平野の幅が上流側や下流側と比べて広く、千種川はその西端付近を流れている。調査区より約100m東方には支流性扇状地Ⅲが分布し、およそ100m西方には千種川に沿う狭長な現氾濫原が認められる。この付近の完新世段丘は、よく発達しており、約250mの幅をもつ。

このような完新世段丘は扇状地の埋没後に段丘化した地形であり、そこには埋没した旧中州と旧河道が分布する。調査区付近では、3つの埋没旧中州と2つの埋没旧河道が認められる(第63図)。埋没旧中州は、その一部が調査区の2ヶ所でみられる。ひとつは1区北東端から2区中央付近にかけてで、他の一つは3区から4区にかけてである。これらのうち、後者は埋没旧中州の末端にある。一方、埋没旧河道は緩やかに蛇行する千種川の流路跡である。調査区では、これが1区中央付近と2区北東部から3区南西端にかけての2ヶ所で北から南へ横断する。

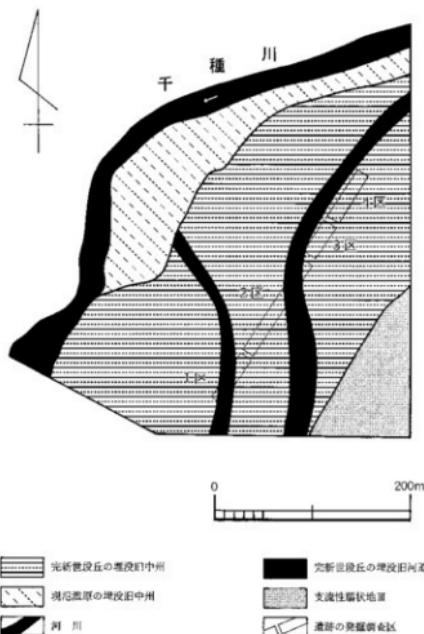
## 3. 各調査区における堆積物の層序と特徴

### (1) 1区の堆積物

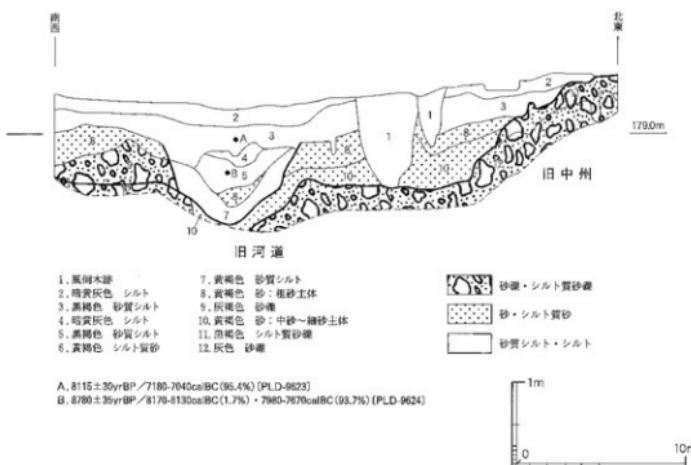
1区では、遺構検出面以深の堆積物が下位から順に灰色の砂礫、黒褐色のシルト質砂礫、旧河道堆積物、黒褐色の砂質シルト、暗黄灰色のシルト、およびクロボクである(第64図)。また、それより上位には、黒褐色のシルト、褐灰色のシルト、ならびに近年の盛土が認められる。

最下位で観察される灰色の砂礫と黒褐色のシルト質砂礫は扇状地を構成する堆積物である。礫は、径4~23cmの亜角~亜円礫を主体とし、径39cmの巨礫が含まれる。その上位にみられる黒褐色のシルト質砂礫は、約20cmの厚さをもち、最下位の砂礫上部が土壤化した旧表土と考えられる。1区中央付近では、旧河道が分布するため、これらの砂礫とシルト質砂礫の上面が約2m低くなる。

砂礫の上位にみられる旧河道堆積物は、旧河道が2つ存在するため、大きく2種類に分けられる。旧河道のひとつは30m以上の幅をもつ大規模なもので、他の一つはその旧河道堆積物を切ってみられる幅およそ8mの小規模なものである。大規模な旧河道は黄褐色の砂と径1~4cmの亜角~亜円礫を主体とする灰褐色の砂礫によって埋積されている。他方、小規模な旧河道の堆積物は黄褐色の砂質シルトやシルト質砂、黒褐色の砂質シルト、および暗黄灰色のシルトである。これらのうち、土壤化の著しい黒褐色の砂質シルトからは8780±35yrBP (PLD-9624) の放射線炭素年代測定値が得られ、その曆年範囲は8170~8130calBC (1.7%) および7980~7670calBC (93.7%) を示す<sup>3)</sup>。



第63図 調査区付近の微地形分類図



第64図 1区における遺構検出面からのトレーンチ断面

その上位に位置する堆積物は旧中州と旧河道を被覆する。クロボクと盛土を除くこれらは洪水堆積物に該当し、数度の洪水によって微地形が埋没したことが知られる。他方、クロボクは荒地で生成される土壤で、その生成期間には洪水が及ばなかったと考えられる。クロボクより上位の堆積物は過去の農地造成や近年の圃場整備時に削り取られ、断続的にしか観察できない。

こうした堆積物のうち、旧河道堆積物の上にのる黒褐色の砂質シルトは土壤化の進んだ旧表土にあたる。その放射性炭素年代測定値は $8115 \pm 30$ yrBP (PLD-9623) で、曆年代範囲は7180-7040calBC (95.4%) である<sup>1)</sup>。また、クロボクの上位にみられる黒褐色シルトの下面からは、弥生時代から中世に至るある時期の掘立柱建物跡や溝、さらにその上面では中世の鰐溝が検出されている。

### (2) 2区の堆積物

2区における遺構検出面以深の堆積物は、下位から黄灰色の砂礫、暗黄灰色のシルト質砂礫、褐色の砂、黄灰色の砂礫、旧河道堆積物、黄灰色のシルト、暗褐色のシルト、およびクロボクであり（第65図）、それ以浅には灰黄褐色のシルト、旧耕土、ならびに近年の盛土がみられる。

これらのうち、下部で観察される黄灰色の砂礫と暗黄灰色のシルト質砂礫、灰色の砂、黄灰色の砂礫は扇状地堆積物に相当する。なかでも最下位の黄灰色砂礫は、径8~34cmの亜角~亜円礫を主体とし、最大で径1.1mの礫を含む。また、その上にのる暗黄灰色のシルト質砂礫はそれが土壤化した旧表土と考えられる。北東部を除く2区の範囲には、埋没旧中州が分布しており、扇状地堆積物の上面が盛土の下面より約40cm下の浅所にみられる。

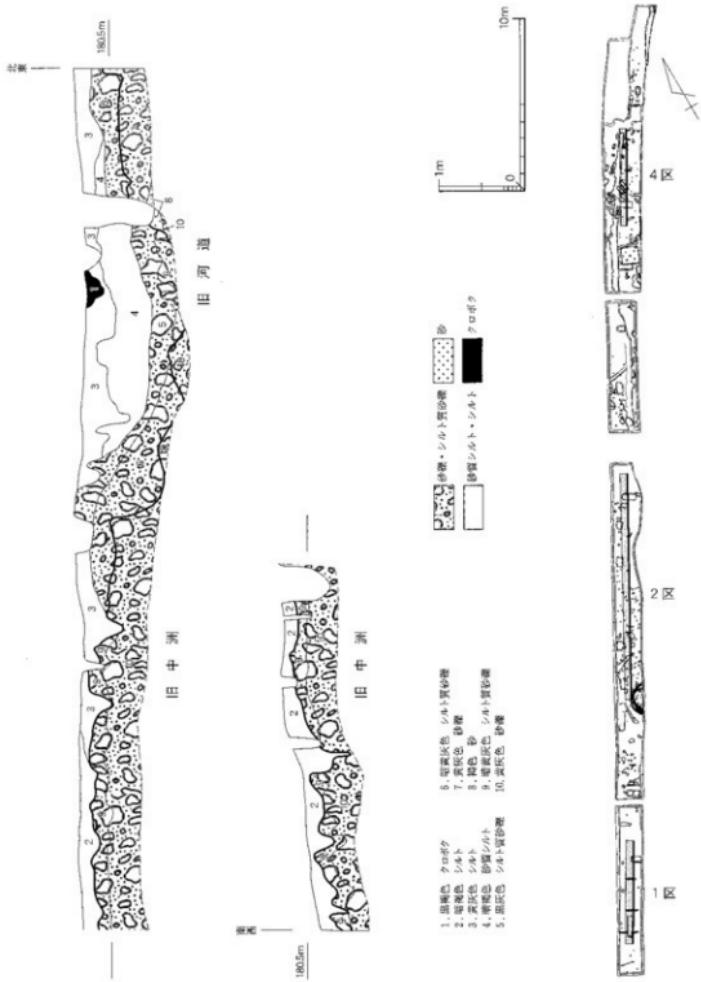
他方、2区北東部ではこれらの上面から切り込む旧河道が認められる。旧河道の幅はおよそ20mで、約1mの深さをもつ。旧河道堆積物の下部は黒灰~暗黄灰色のシルト質砂礫であり、これは径5~18cmの礫からなる。上部には、暗褐色の砂質シルトがみられる。これより上位の堆積物は旧中州と旧河道を覆う。それらのうち、クロボクと盛土以外のものは洪水堆積物である。

遺構検出面にあたる灰黄褐色シルトの下面からは、弥生時代中期後半の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、および土坑などが検出されており、とくに竪穴住居跡と掘立柱建物跡は埋没旧中州上に分布する。なお、クロボクより上位の堆積物は、過去の農地造成や近年の圃場整備時に削られたため、連続して観察できない。

### (3) 4区の堆積物

4区では、下位から黄灰色の砂礫、黄灰色の砂、黄灰色の砂礫、黄灰色の砂、黄灰色の砂礫、黄灰色の砂、暗黄灰色の砂、黄灰色のシルト質砂礫、暗黄灰色の礫混じりシルト質砂、およびクロボクが観察され（第66図）、遺構検出面より上位の堆積物は旧耕土と近年の盛土である。これらのうちクロボクは、過去の農地造成や近年の圃場整備時に削り取られたため、断続的にみられる。

下半部で観察される黄灰色の砂礫と砂、扇状地の旧中州堆積物にあたり、なかでも下から3つ目の砂礫は厚さ70cm以上にわたって堆積する。これは、径4~17cmの亜角~亜円礫を主体とし、最大で径51cmの巨礫を多く含む。その上面は近年に施された盛土の下面から50~70cm下の浅所で認められる。この砂礫より上位に位置する砂礫や砂などは旧中州を覆う堆積物である。上位の砂礫を構成する礫は、下半部のものより粒径が小さく、径2~6cmの亜角~亜円礫を主体とする。これらの堆積物は、クロボクと盛土を除くと洪水に伴うもので、1区と2区の旧中州や旧河道を被覆する堆積物に比して粒径が大きい。このような状況は南西側の3区中央付近まで続くと推定される。



第65図 2区における造構検出面からのトレンチ断面

なお、4区では、クロボクの上面から弥生時代中期前半の墓跡（木棺墓と土坑墓）、溝、ならびに土坑と、古墳時代後期（6世紀後半～7世紀前半）の堅穴住居跡が検出されている。

#### 4. 地形環境の変遷について

ここでは、これまでの事柄から考察される地形環境の変遷に関して、6つのステージに分けて述べる。

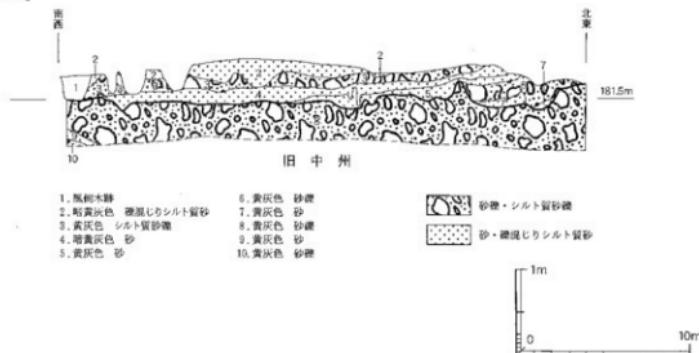
〔ステージ1〕 調査区付近では、巨礫を多く含む砂礫が7980-7670calBC以前に堆積し、扇状地が発達した。その結果、1区北東端から2区中央付近にかけてと3区から4区に至る範囲には、中州が形成された。また、この時期には、千種川が1区中央付近と2区北東部から3区南西端とを相ついで南北方向に流下した。

〔ステージ2〕 千種川の流路はその形成後にそれぞれ洪水堆植物によって埋積された。1区中央付近の流路では、そのほとんどが砂礫と砂の堆積によって埋積された後、小規模な流路がつくられた。この流路では、7980-7670calBCころに砂質シルトやシルト質砂などの堆積がみられた。一方、2区北東部から3区南西端にかけて形成された流路では、まず下半部にシルト質砂礫が、ついでその上にシルトが堆積した。これによって流路はほぼ完全に埋積された。

〔ステージ3〕 7180-7040calBC前後には、旧中州と旧河道が洪水に伴う堆植物によって被覆されじめた。1区と2区では、これらの微地形上にシルトが堆積し、それらは埋没した。また4区では、1区と2区におけるシルトの堆積に前後して洪水が5度ほど及んだ。ここでは、これらの洪水に伴う砂や砂礫の堆積によって旧中州は埋もれていった。

〔ステージ4〕 旧中州と旧河道の埋没後、洪水の発生しない安定した環境が訪れた。この時期、調査区付近は荒地となり、そこではクロボクが生成された。

〔ステージ5〕 洪水の発生に伴って、クロボクの上にはシルトが堆積した。その後、弥生時代中期前半から7世紀前半にかけて調査区付近は再び安定した環境となった。こうした環境の下、弥生時代中期前半には、4区の埋没旧中州上が墓域となり、そこには木棺墓や土坑墓がつくられた。弥生時代中期後半になると、2区の埋没旧中州上に堅穴住居や掘立柱建物が建てられ、居住域が形成された。さらに、6世紀後半から7世紀前半にかけては、4区の埋没旧中州上が居住域となり、そこに堅穴住居がつくられた。



第66図 4区における遺構検出面からのトレンチ断面

〔ステージ6〕 7世紀前半から中世までのある時期に、洪水が発生し、1区ではシルトが堆積した。その後、調査区付近は千種川の下刻によって段丘化し、洪水が及ばなくなった。また中世には、鎌を使つた農業が1区で行われた。

## 5. おわりに

本遺跡の調査区は千草川上流部の完新世段丘上に位置する。これは埋没した扇状地が7世紀前半から中世までのある時期に段丘化したものである。そのため、調査区付近には扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で認められる。

埋没旧中州は1区北東端から2区中央付近および3区から4区にみられる。他方、埋没旧河道は、千種川の流路跡で、1区中央付近と2区北東部から3区南西端とに分布する。こうした2種類の微地形は巨礫を多く含む砂礫が7980—7670calBC以前に堆積した際に形成されたものである。その後7980—7670calBC前後には、2つの旧河道がそれぞれ埋積され、さらに7180—7040calBCころからは洪水に伴う堆積によって旧中州と旧河道が埋没していった。

人間は、このようにして形成された微地形を利用して、安定した環境下で活動した。埋没旧中州上は、埋没旧河道上に比べてわずかに高く、比較的高燥な環境にある。2区の埋没旧中州上では、弥生時代中期後半に堅穴住居と掘立住建物が建てられ、そこは居住域となった。また、4区の埋没旧中州上は、弥生時代中期前半に墓域であったものの、6世紀後半から7世紀前半にかけては居住域に変わり、そこでは堅穴住居がつくられた。こうした人間生活がみられた弥生時代中期前半から7世紀前半にかけては、調査区付近が現泡瀬原であったにもかかわらず、そこでは洪水の発生がみられなかった。

以上のように、人間は地形環境と密接に関わって生活したのである。

### 【注】

- 1) 調査区付近の平野を山崎断層が北西—南東方向に横断する。調査では、この断層に関連する地形や堆積物の状況が確認されなかった。
- 2) 支流性扇状地は、田中眞吾ほか(1986)「兵庫県・多紀連山地域の麓面」地理学評論59—5で述べられた麓面とほぼ一致する地形である。
- 3) この放射性炭素年代測定値は(株)バレオ・ラボの測定による。
- 4) 前掲1)



調査風景

## 第5章 総括

### 第1節 遺物

#### 1. 繩文土器

2区のSH01、包含層から中期～後期と考えられる縄文土器片が出土した。特に(65)は、破片ではあるがその特徴から元住吉山式I式と考えられる。

上三河遺跡ではこれまでの調査によって縄文時代の遺構・遺物が検出されている。主なものとして、佐用町教育委員会が平成11年度に行った上三河遺跡D区<sup>10</sup>の調査では、縄文時代後期の浅鉢や注口土器、綠泥片岩製の石棒などが出土し、遺構面も検出されている。続く平成12年に発掘調査を行った千種川西岸にある鍋倉地区で、縄文時代中期末の堅穴住居跡が検出され、住居内から深鉢などの縄文土器が多数出土している。

上三河遺跡周辺では上流域の川崎地区から上三河にかけて縄文時代後期の土器が出土し、中流域となる中三河遺跡からは縄文時代早期の土器片が出土している。

#### 2. 弥生土器

今回の調査で最も多く出土しているのが弥生土器である。器種では、壺、甕、高杯、鉢が出土している。これらの弥生土器は、長友朋子・田中元浩<sup>11</sup>の編年によると、弥生時代中期に位置づけられるII期～IV期にあたる。出土数では特にIV期の土器が多い。地区別では、2区でIV期、4区でII期の土器が最も多く出土している。

一番多く出土している器種は壺である。壺は、SD14出土の(77)やSD17出土の(79)のような逆L字口縁の壺、SH01出土の(12)やSK10出土の(30)、2区包含層出土の(54)、(55)など多くの字口縁の壺に大きく分類できる。逆L字口縁の壺は編年のII期、くの字口縁の壺は編年のIII期～IV期にあたる。また、内面の頸部までヘラケズリが施された壺(9)はV期初頭までくだる。次に出土数のある壺では、SD18出土の(82)、SD20出土の(85)など直線文や波状文などで構成される施文帯を持つ壺と、SH02出土の(4)や(5)、SB04出土の(26)など、口縁部に凹線を施し浮文を貼り付け装飾する壺に大きく分けられる。時期としては(82)、(85)がII期、(4)、(5)、(26)がIV期にあたる。

佐用町教育委員会が行った調査でも、同様に弥生時代中期の遺構・遺物が見つかっている。平成10年度に行なったC区の調査では、円形住居跡から口縁部が外反し、端部に刻み目の入った壺が出土している。平成11年度に行なったD区の調査では、逆L字口縁の壺やくの字口縁の壺が出土している。また、SD18出土の直口壺と同時期と考えられる短頸壺も出土している。

#### 3. 須恵器

須恵器・土師器はSH02からまとまって出土している。住居内から出土した須恵器(68)、(69)は、田辺編年<sup>12</sup>のII期と平行すると考えられ、年代として6世紀後半から7世紀前半と考えられる。

佐用町教育委員会による平成11年度調査のA区方形堅穴住居(住居1)、C区方形堅穴住居(住居3)、平成12年度調査のD区方形堅穴住居(住居2)において古墳時代後期の須恵器が出土している。

#### 4. 石器

堅穴住居SH01から出土した石器が中期後半の一括資料として扱うことができよう。器種は少なく、石斧類が含まれていないが、打製石器では石鎌、石錐、楔形石器などが、磨製石器では磨製石包丁がある。石鎌には末製品があり、チップ類も多数出土していることから、住居内で製作が行われたと考えてよいだろう。戦闘的な性格を有する大型の石鎌は郡内では平福遺跡に次ぐ例となり、当遺跡も弥生時代の争乱とは無関係でなかったことがうかがえる。

#### 5. 鉄器

鉄器は4点出土しているが、いずれも包含層からの出土である。出土しているのは鉄釘2点と錐1点、不明鉄器1点である。上三河遺跡では、平成10年度調査のC区において中世の鍛冶遺構が検出されているが、今回の調査では鍛冶に関連する遺物は出土していない。

### 第2節 遺構

#### 1. 縄文時代の遺構

遺物の出土はあるが、遺構の検出はない。前述したが、佐用町教育委員会が行った平成11年度調査のD区では、明確な遺構は確認できていないが遺構面は検出され、平成12年調査の鍋倉地区では縄文時代中期末の堅穴住居が発見されている。

今回、縄文土器が出土した2区はD区の東80mに位置する。D区と2地区では、黒ボクが二次堆積しており、これら土層の堆積状況が似ている。そのため、同一の遺構面が広がっていると考えられる。そのため、2区では遺構から遺物が出土していないため不確定ではあるが、検出した柱穴に縄文時代にまでさかのぼるものがある可能性が考えられる。

#### 2. 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構、遺物は2区～4区で見つかっている。2区では、堅穴住居、掘立柱建物、土坑、溝などを見つかり、3区、4区では木棺墓・土坑墓、溝が見つかっている。

2区では復元できた掘立柱建物が6棟ある。復元できた柱穴以外にも多数の柱穴を検出しているため、掘立柱建物はまだ他に存在していたと考えられる。これら、掘立柱建物はほとんどが東西に長い側柱建物である。1棟検出した円形の堅穴住居SH01からは大量のサヌカイト片が出土している。サヌカイト片は住居の床面からも出土しているが、住居埋土からの出土も多い。このことから、SH01は住居内で石器の製作が行われており、住居廃絶後も石器の製作現場、またはサヌカイト片の捨て場として利用された可能性が考えられる。

3区、4区では、多くの溝と木棺墓・土坑墓を検出した。4区に隣接するC区では平成10年度に佐用町教育委員会によって発掘調査が行われている。このときの調査では溝状遺構が検出されている。今回の4区でも多くの溝を検出した。これらの溝のうち4区のSD17、SD14、C区の溝状遺構2とが方形、4区のSD18、SD16、C区の溝状遺構1が円形につながる可能性が指摘できる。どちらも4区の搅乱によって途切れるが、方形周溝墓・円形周溝墓が存在した可能性が考えられる。

弥生時代の遺構は、出土した土器から4区および佐用町教育委員会調査のC区を中心とする弥生時代中期前半と2区を中心とする弥生時代中期後半の2時期に大きくわけることができる。



第67図 町教委調査C区と4区

4区は主に墓域として利用されており、西隣りのC区では竪穴住居2棟が検出されているため居住域としても利用されていることがわかる。2区は竪穴住居、掘立柱建物が建つ居住域として利用される。

### 3. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構、遺物は4区で見つかっている。検出した遺構はSH02である。SH02は住居全体を検出できた。住居の西側にはカマドがつき、床面から須恵器の环や十師器の壺などが出土している。SH03は竪穴住居からは除外しておく。4区に隣接する、平成10年度に佐用町教育委員会が調査したA区、C区からは、古墳時代後期の方形竪穴住居跡が計3棟見つかっている。4区とA区では直線距離で100mほどであり、4区とC地区は隣接している。これらの範囲に古墳時代後期の竪穴住居跡が計4棟発見されたことになる。のことから、4区周辺に古墳時代後期の集落があったと考えられる。

## 第3節 まとめ

上三河遺跡は、千種川上流域の段丘上に築かれた集落である。

自然科学分析から、この地はBC.7200年頃以降に安定した環境となるが、段丘化するのは7世紀前半以降のことである。

その間に上三河遺跡では、縄文時代中期から人類の活動の痕跡が発見されている。これまで行われた調査から縄文時代の中期～後期、弥生時代中期～後期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世の遺構が千種川を挟んで上三河地区一帯に広がっていることが判明した。今回の調査において、奈良・平安時代以降の遺構は検出していないが、4区で遺物が出土している。古墳時代以降、4区周辺が居住域として利用されていたことがわかる。

藤木氏の指摘<sup>(6)</sup>にあるように、「上三河遺跡は千種川と山崎断層沿いを通る東西の道の接点に位置する。そのため、古くから人々の往来があり、交通の要所として重要な地であったと言える。このような、地理的な要因と、千種川による自然環境の豊かさによって上三河遺跡は発展してきたのである。今回の調査は、これまでの調査の結果を補強し、上三河遺跡が千種川上流域を代表する遺跡であることを認識できる調査結果となった。

### 【注】

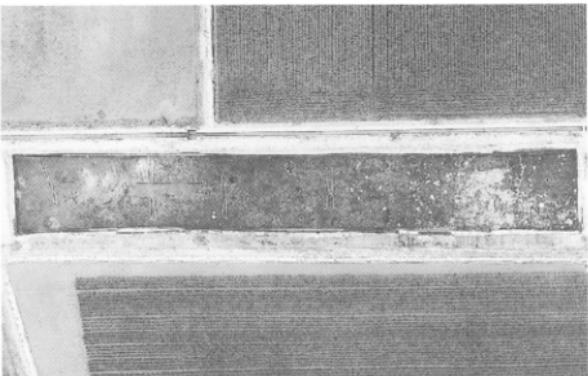
- (1) A区～D区は佐用町教育委員会の調査区。(第3図参照)
- (2) 長友朋子・田中元浩 2007 「3. 西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年－播磨編－』大手前大学史学研究室
- (3) 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- (4) 兵庫県佐用郡教育委員会 2001 『平成12年度 埋蔵文化財調査年報』

### 参考文献

- (1) 兵庫県佐用郡教育委員会 2000 『平成10年度 埋蔵文化財調査年報』
- (2) 兵庫県佐用郡教育委員会 2001 『平成11年度 埋蔵文化財調査年報』
- (3) 兵庫県佐用郡教育委員会 2001 『平成12年度 埋蔵文化財調査年報』

# 写 真 図 版

1区下面全景 南東から



1区上面全景 北東から



1区下面全景 北東から



写真図版 2



2区全景

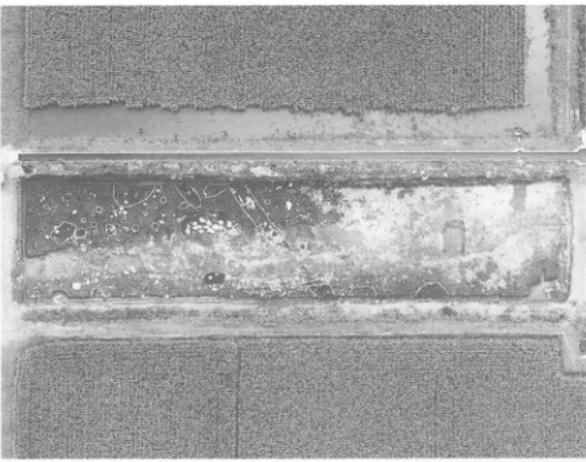


2区全景 南西から



2区全景 北東から

3区全景 南東から



3区全景 南西から



4区全景 南東から



写真図版 4



4区 北部 南東から



4区 全景 南西から



4区 全景 北東から



2区 SH01検出状況 北西から



2区 SH01 北西から



2区 SH01柱穴断面

写真図版 6



3区 SH02検出状況 北東から



3区 SH02 北東から



3区 SH02土器出土状況 東から



3区 SH02カマド断面 北東から



1区 SB01 北東から

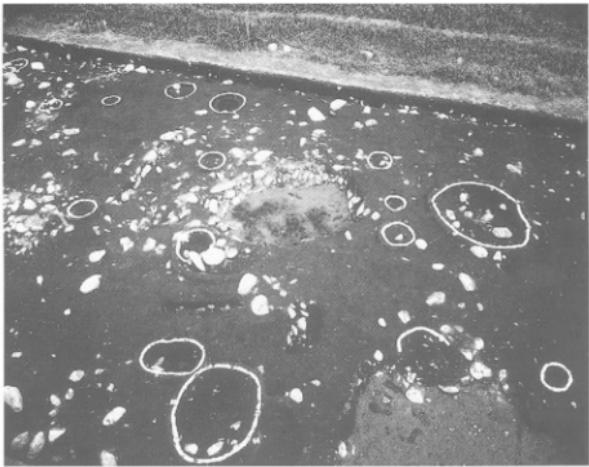
写真図版 8



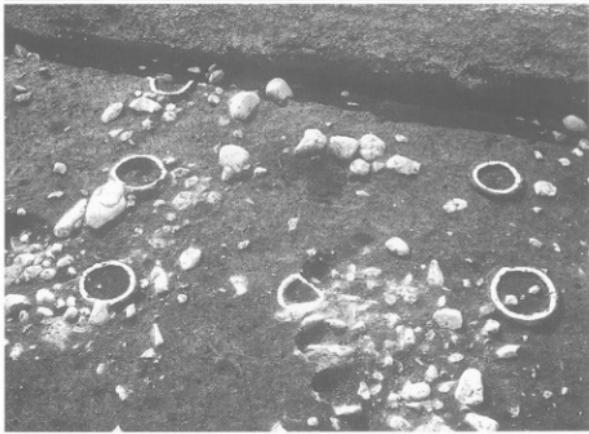
2区 柱穴 北東から



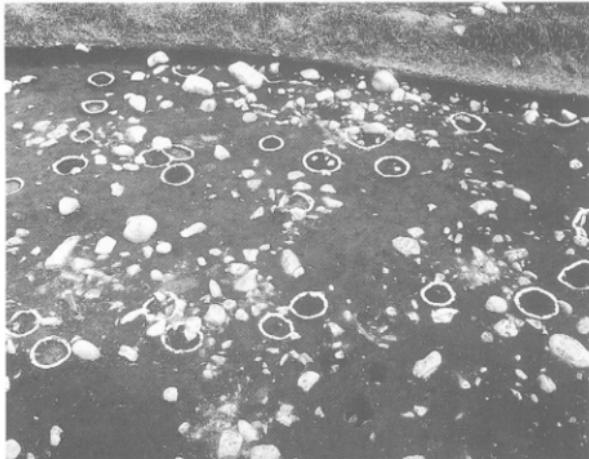
2区 SB03 東から



2区 SB04 西から



2区 SB05 東から



2区 SB07 西から

写真図版10



2区 SK03 南西から



2区 SK05 南西から



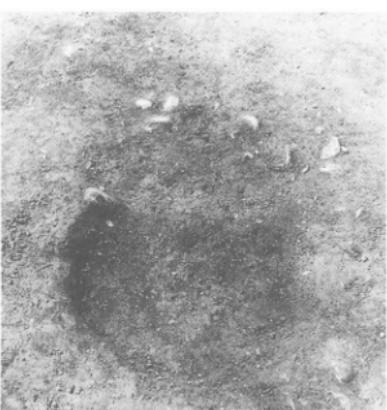
2区 SK06 東から



2区 SK09 南西から



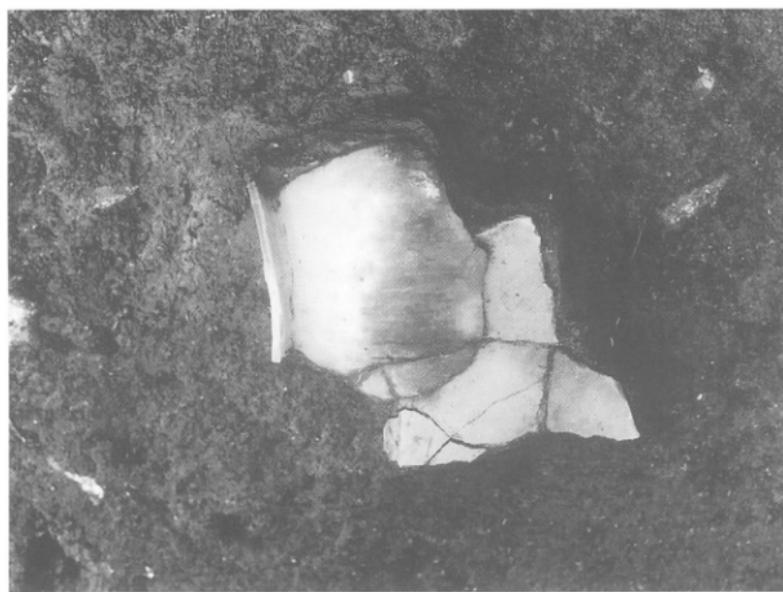
2区 SK10 東から



2区 SK18 西から

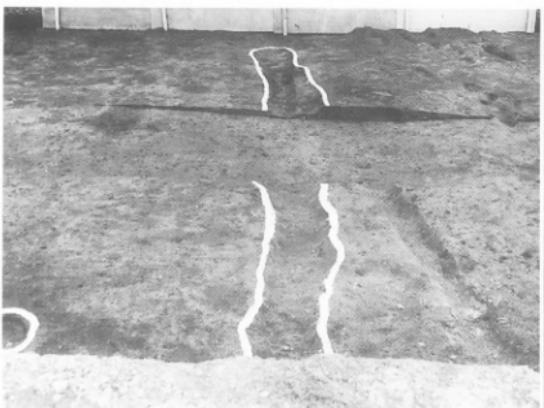


2区 SK08 北西から

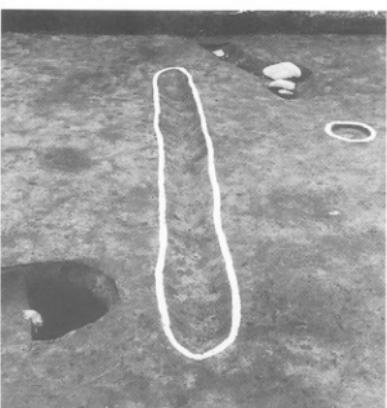


2区 SK08土器出土状況

写真図版12



1区 SD01 北西から



1区 SD02 北西から



4区 SD10 北西から



4区 SD14 西から



4区 SD16 南西から



4区 SD17 南から



4区 SD18 南から



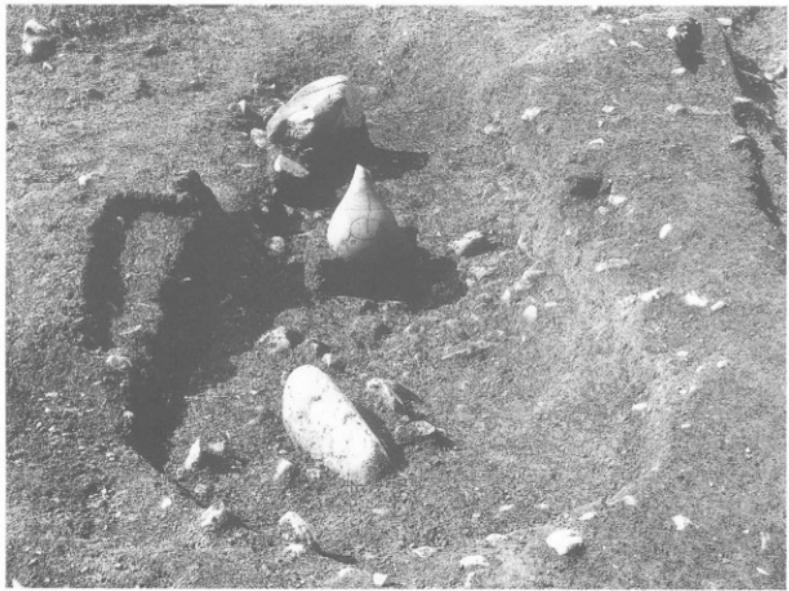
4区 SD18土器出土状況 南から



4区 SD18セクション 東から



4区 SD20 南から



4区 SD20土器出土状況 南から



4区 SD22 北から



4区 溝・木棺墓群 北東から



4区 SX01 南東から



4区 SX02 挿出状況 北東から



4区 SX02 北東から



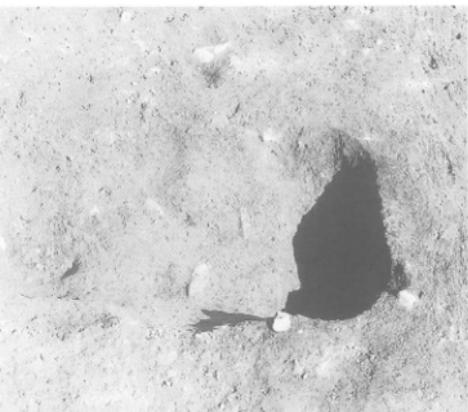
4区 SX03完掘 北西から



4区 SX04完掘 南西から



4区 SX05木棺完掘 北西から



4区 SX05完掘 南西から



4区 SX07セクション 南東から



4区 SX07完掘 南西から



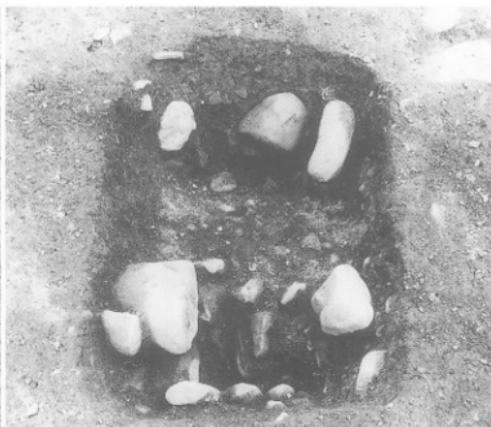
4区 SX09木棺完掘 北東から



4区 SX09完掘 南西から



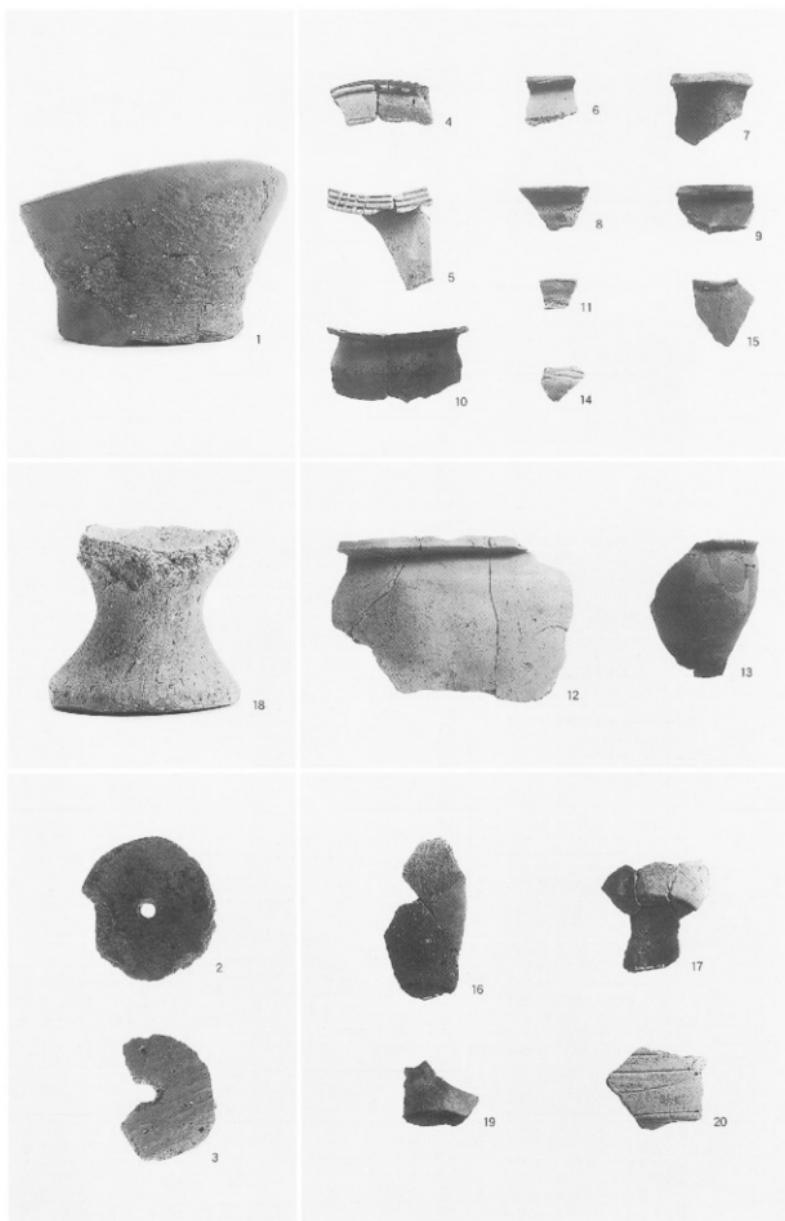
4区 SX10木棺完掘 南西から



4区 SX10完掘 南西から



2区 P12土器出土状況 南西から



1区包含層(1)、SH01(1~20)出土土器



22

21

24



25

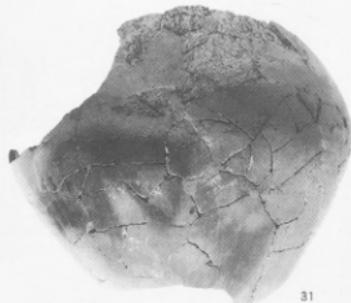
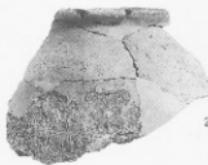
23

26



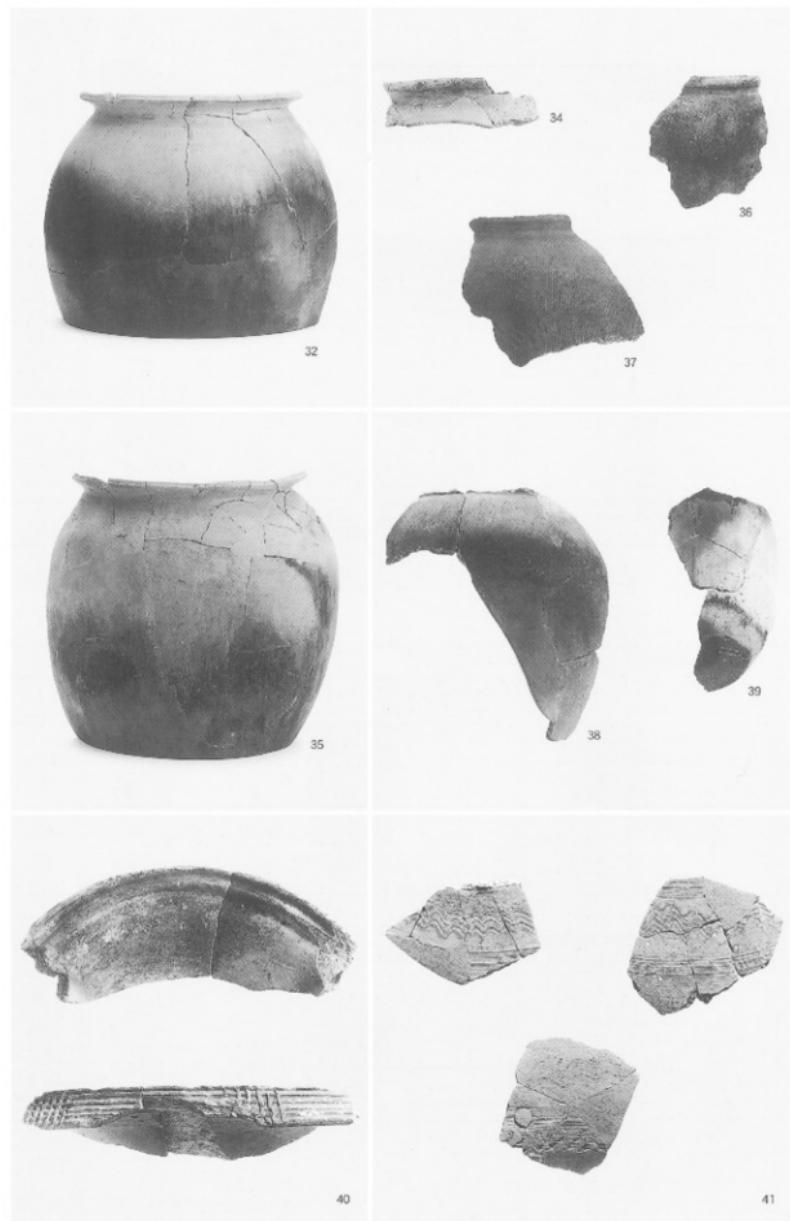
28

27



31

SB03(21～23)、SB04(24～26)、SK01(27)、SK09(28)、SK10(29～31)出土土器



SD05(32)、P05(34)、P11(35)、P12(36~39)、2区包含層(40、41)出土土器



42



44



45



46



47



48



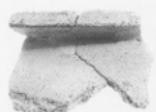
49



50



51



52



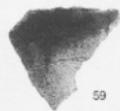
53



58



55



59



60

2区包含層(42~60)出土土器



43



56



61



62



63



64



54



57



65



66

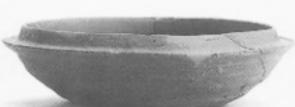


67

2区包含層(43、54、56.57、61~66)出土土器



68



69



75



76



70



71



72



73



74



33



77



78



79



81



84



80



83

SD05(33)、SD14(77,78)、SD17(79,80)、SD18(81,83)、SD20(84)出土土器



82



85



86

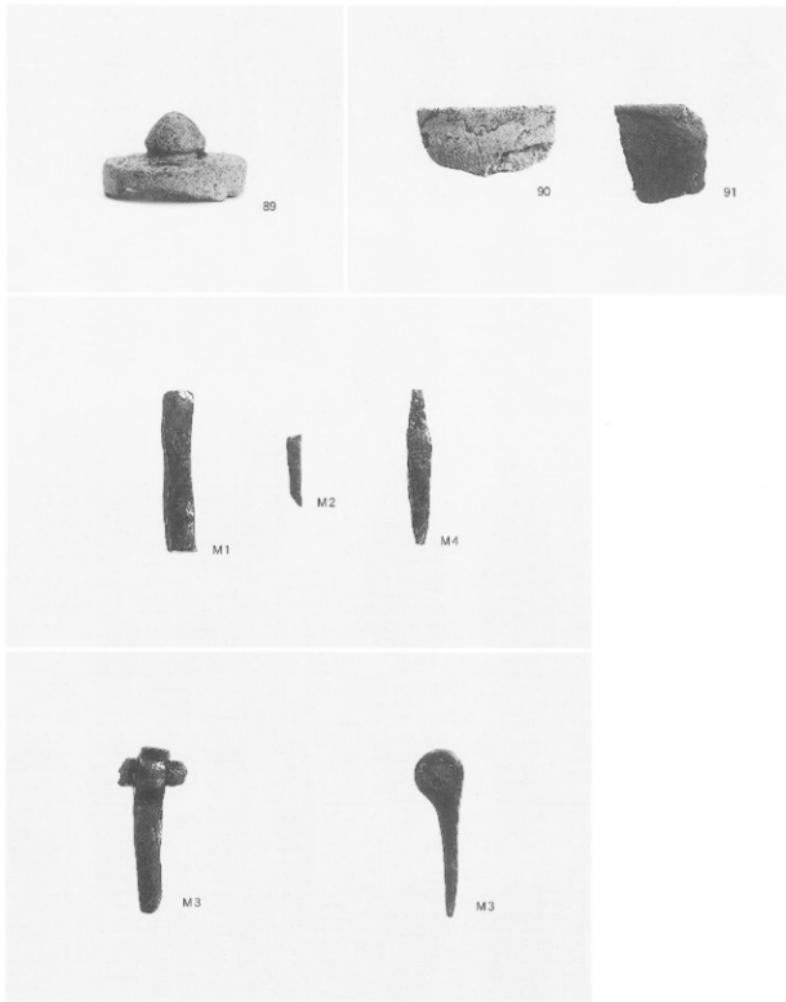


87

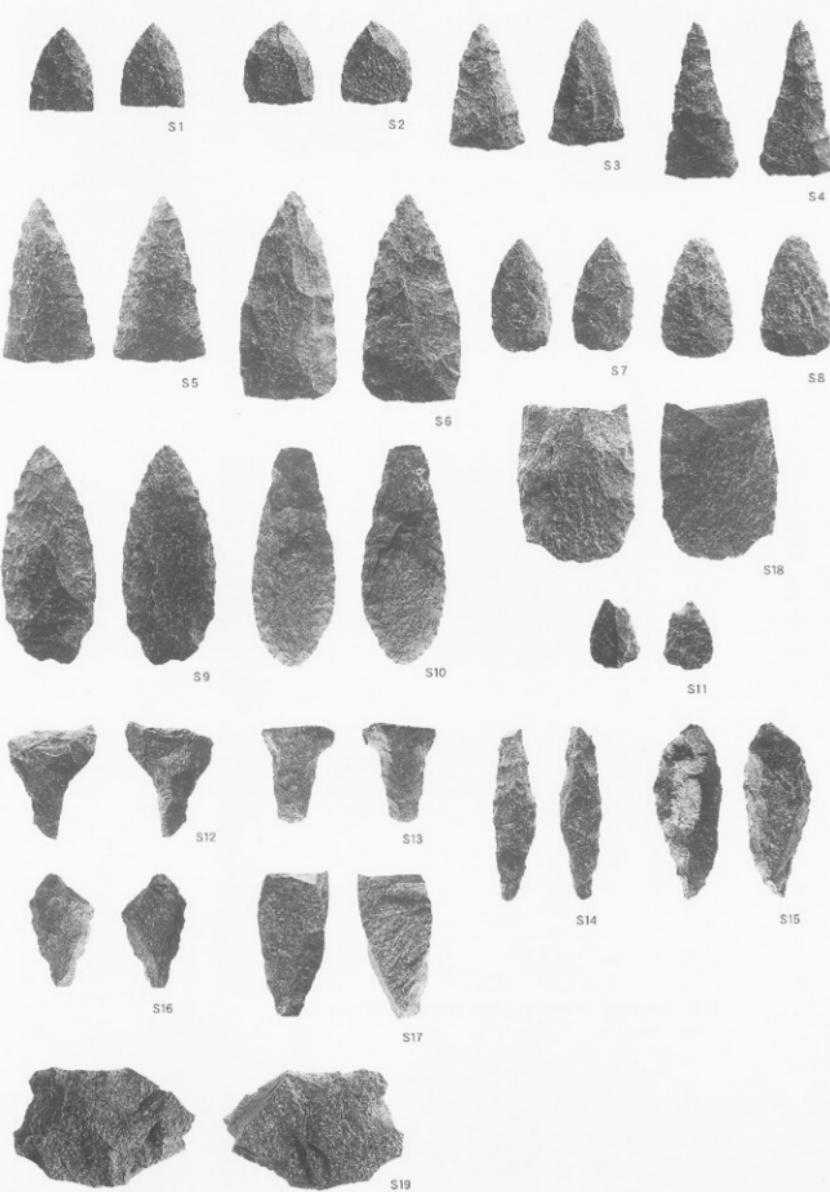


88

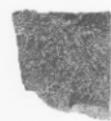
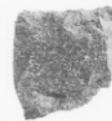
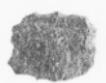
SD18(82)、SD20(85)、SD23(86)、SD24(87)、SD25(88)出土土器



SD25(89)、SX02(90)、SX09(91)出土土器、包含層出土鐵器(M 1 ~M 4)



SH01出土石器



S20

S21

S22



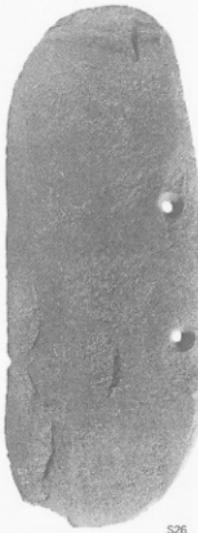
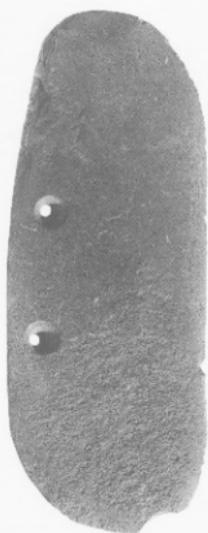
S23



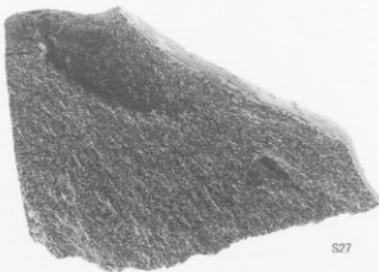
S24



S25



S26



S27



S28



S29



S30



S31



S32



S33



S34



S35



S36



S37



S38



S39



S40

SH01出土石器(写真掲載のみ)

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	かみみかわいせき							
書名	上三河遺跡							
副書名	(主)若桜下三河線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第354回							
編著者名	小川弦太・藤田淳・青木哲哉・バレオラボ・古環境研究所							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500 電 079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1 電 078-341-7711							
発行年月日	2009(平成21)年3月23日							
(ふりがな) 所収遺跡名	(ふりがな) 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡調査番号					
上三河遺跡 510057	佐用郡 佐用町 上三河	285013	2000006	35.07度	134.42度	平成13年 5月30日 ～ 9月28日	2,570m <sup>2</sup>	(主)若桜下 三河線道路 改良事業
			2000225					
			2001004					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上三河遺跡	集落・墓	弥生時代	竪穴住居	掘立柱建物	陶文土器(甕等)	鉄器(釘、錐)		
			木棺墓	溝	弥生土器(甕、甌等)			
		古墳時代	竪穴住居		須恵器(环)			
要約	上三河遺跡は千種川上流域に位置し、千種川によって形成された扇状地が段丘化した場所に立地する。今回の調査によって、弥生時代、古墳時代、中世の3時期の遺構を検出した。中心となる遺構は、弥生時代、古墳時代である。弥生時代の主な遺構は竪穴住居1棟、掘立柱建物7棟、木棺墓などである。竪穴住居は円形で、住居内からサトカイト製の石織や碧玉製管玉などが出土している。集落の北側には木棺墓などが検出された墓域が存在する。古墳時代は竪穴住居1棟を検出した。カマドを持つ住居であり、住居内からまとめて土器が出土している。							

兵庫県文化財調査報告 第354冊

## 上三河遺跡

県道若桜下三河線道路改良事業に伴う発掘調査報告書

平成21年3月23日

編 集 兵庫県立考古博物館  
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500  
TEL 079-437-5589

発 行 兵庫県教育委員会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 株式会社ソーエイ  
〒673-0898 明石市樽屋町6-6